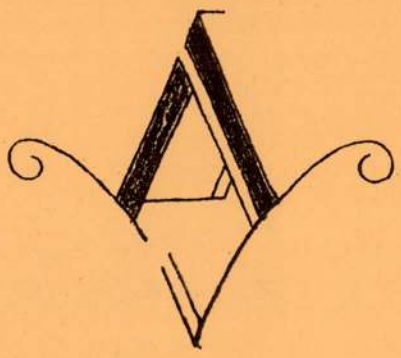
建築と社會

第八輯　第十壹号



日本建築協會

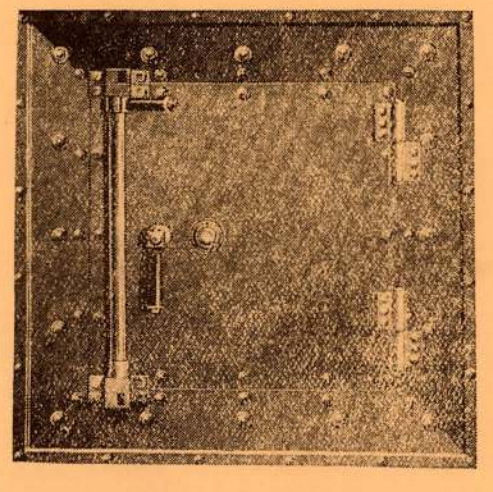
大正十四年十一月一日

大正六年九月一日（第三種郵便物認可）
大正十四年十一月一日發行（毎月一回一日發行）
（第八輯第十一號）

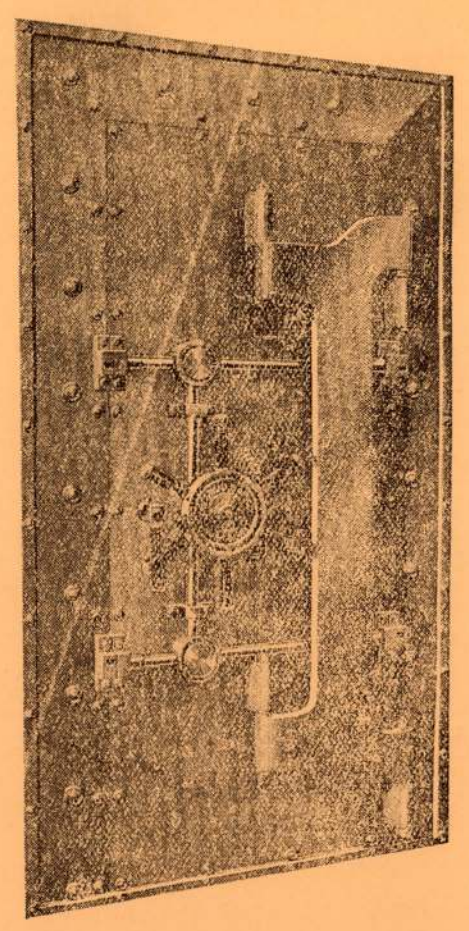
大谷製
船來形金庫扉



大谷金庫店技師
獨逸工學士
アルハレツトシュハルト



正金銀行大阪支店納



製作品目

一金庫
一金庫室扉
一保管金庫
一御眞影奉安庫（デポジットボックス）

東京市京橋區岡崎町二十五番地
大谷金庫店
電話銀座三一二四番

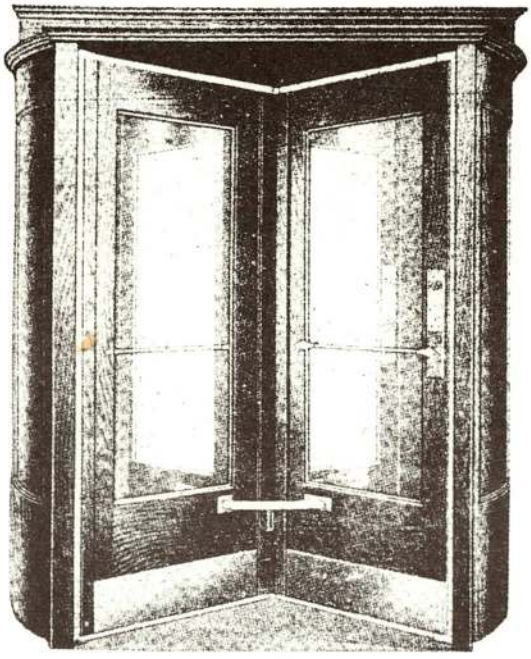
大阪市淀屋橋筋道修町四丁目
大谷金庫店
電話本局三九三四番

京都市松原通東洞院東入
大谷金庫店
電話下五三二番

神戸市楠町六丁目
大谷金庫店
電話本局四八〇七番

回轉扉

米國ヴアンカンネル
レボルビングドアー
コムパニー製造



特徴

1. 煖房燃料ノ節約
2. 塵芥ノ防禦
3. 雜音ノ遮斷
4. 出入ノ整然
5. 換氣ノ良好
6. 耐久ノ堅牢
7. 體裁優美

其他一般建築ニ關スル

嶄新 次ノ附帶工事 確實

▲昇降機 A. B. See式 客及荷用昇降機、其他リフト竝コンベーヤー一般

▲煖房換氣 自動ガススチームラヂエーター、煖房裝置一般、キヤリアー式溫濕度調整裝置

▲氣動輸送 ラムソン式高壓及眞空氣動輸裝置、テムソン式ウアイアリングセージシステム

▲電氣工事 ガーランドチユーブ、ブライアントスキツチ、其他電氣配線工事一般

▲金庫扉 米國最古ノ歷史ヲ有セル、ハリングホールマルビン金庫及金庫扉

内田商事株式會社 大阪市北濱四丁目三〇

紐育 東京 神戸



■科學と經驗……（一）
■落穗……（二）

●數字の物語る景氣と住宅問題……宇治伊之助（三）
●續、誤解された都市計畫……田中清志（九）
●續、借家難……津田鑿（一四）
●舞臺照明に就いて……池田谷久吉（五三）
●明治前期之建築（明治大正に於ける建築觀（二））……增山新平（二）
●國寶『一乘寺』……菅田登美雄（三五）

＝口繪＝

●大阪ビルディング玄關口詳細
●大阪ビルディング外觀
●大阪ビルディング俱樂部
●大阪ビルディング特別食堂及休憩室
●同上地階平面圖
●同上一階平面圖
●同上二階乃至七階平面圖
●同上八階平面圖



□×□×□

●白ペンキの材料なる鉛白に就いて……細木松之介…(一六)

□×□×□

●貧者の一燈……廣岡峯太郎…(四七)

●建築を享樂して……田中幸一…(五六)

●都市から郊外へ、郊外から田園へ……大庭草太郎…(六〇)
——來るべき時代の住宅に就いて——

□×□×□

▲創作 子供の世界……八畑幸二…(六七)

□×□×□

●大阪ビルディング工事概要……(七四)

□×□×□

■俳壇……溪舟選…(七二)

■俳話 自然の蝕ばみ……溪舟…(七三)

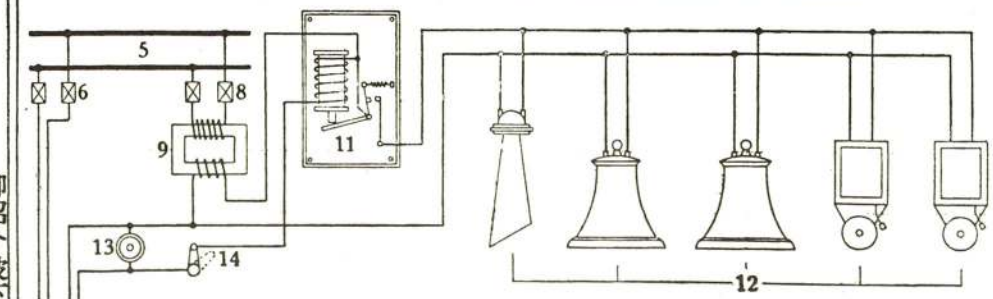
□×□×□

▲事報……(七六)

▲主要建築材料値段……(七八)

附

▲日本建築協會々報……



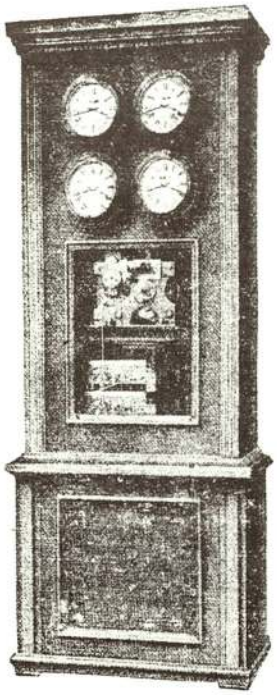
瑞西マグネタ會社インダクタ

無電池式電氣時計

親時計内ニ裝置スル永久磁石ニヨリ自ラ發電ス

最小十五單位ヨリ最大六〇〇單位迄

室用、街路、船舶、塔用各種



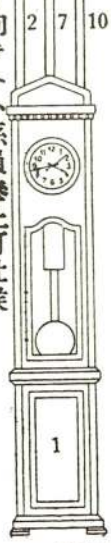
最近御用命先

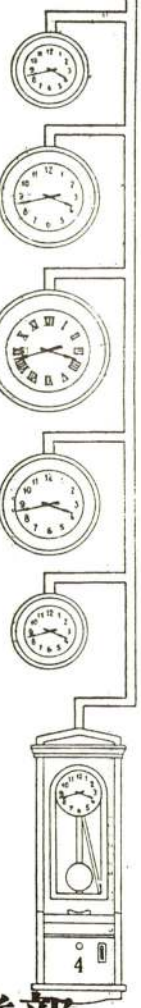
大同ビルデイング　大阪中央公會堂

宮内省　名古屋鐵道局

東京市電氣局　大阪三品取引所

御紹介被下バ型錄進呈致スベク尚御說明御希望ノ向キヘハ係員參上可仕候

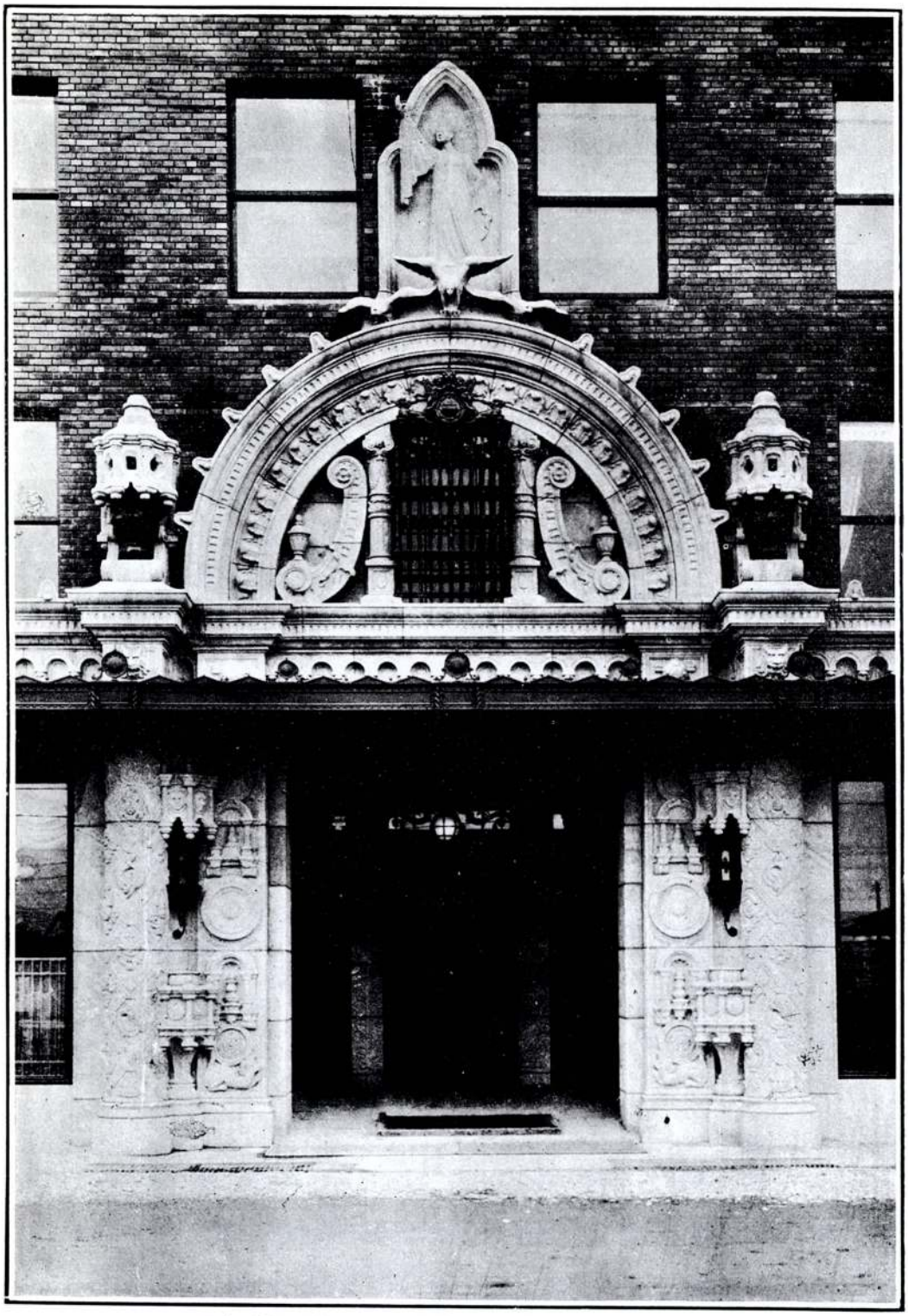




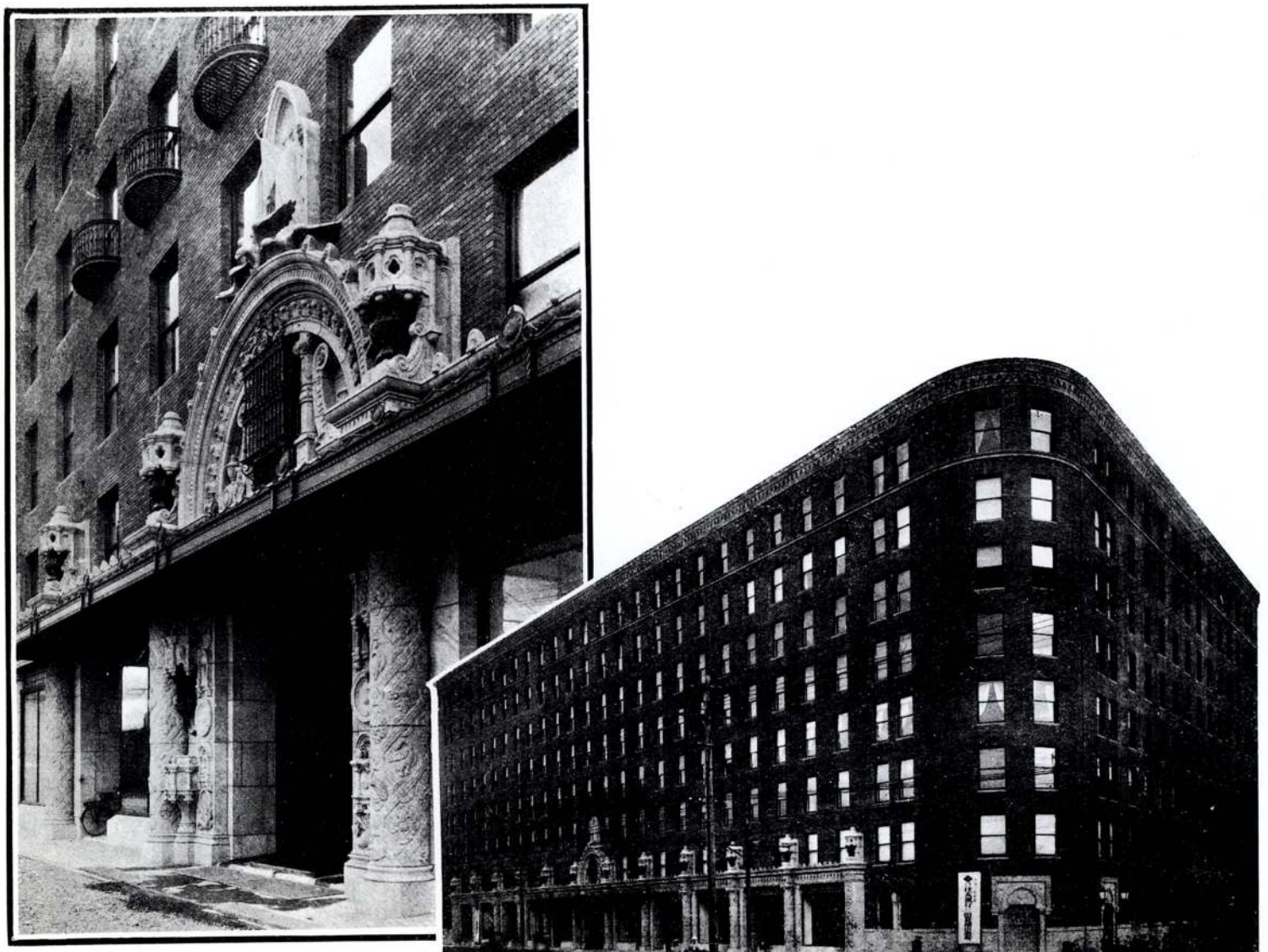
東洋總代理店　シーベルヘグナ商會工業部

電話　土長三五四六番　土五七五四番

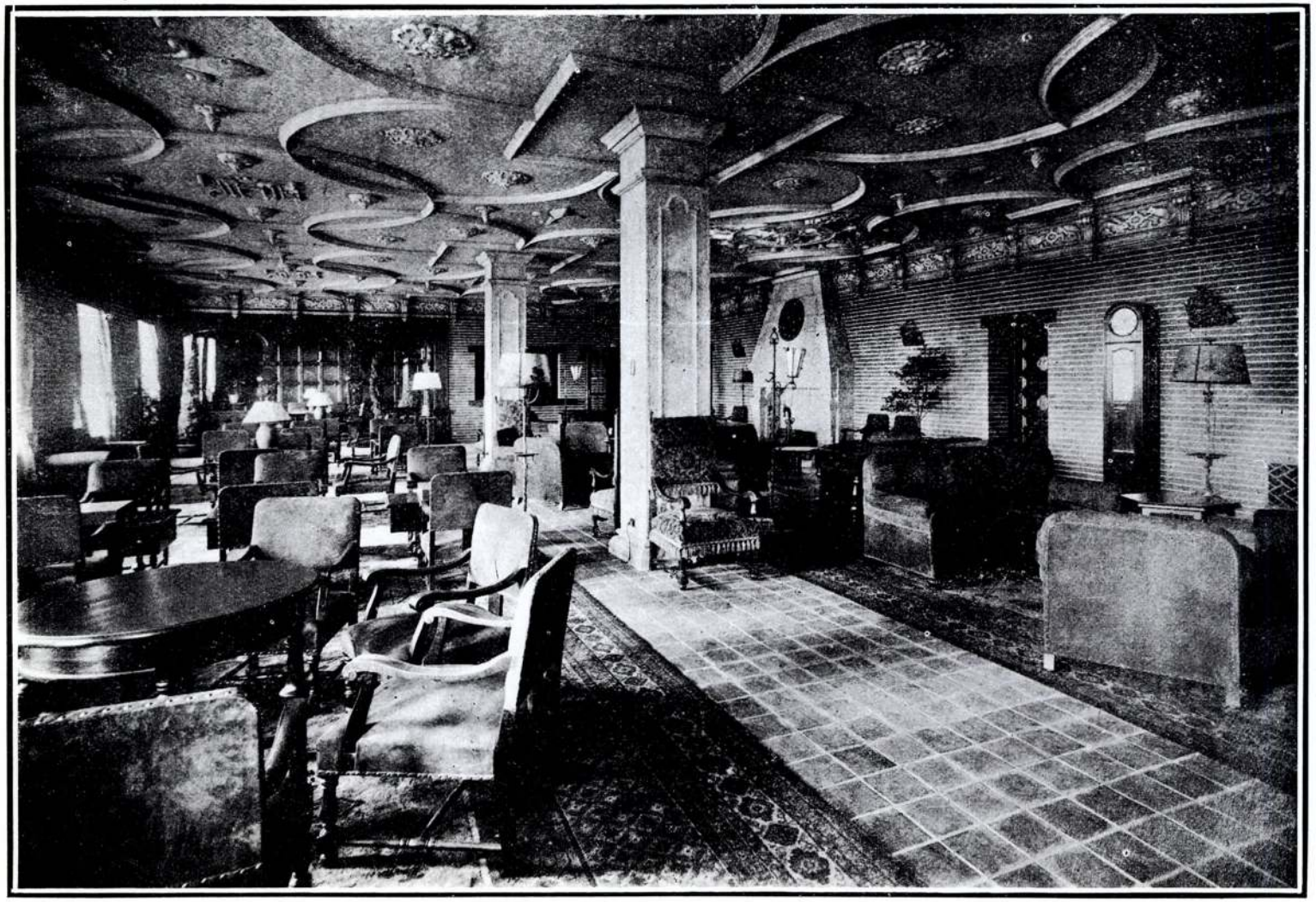
關東代理店　神奈川電氣株式會社



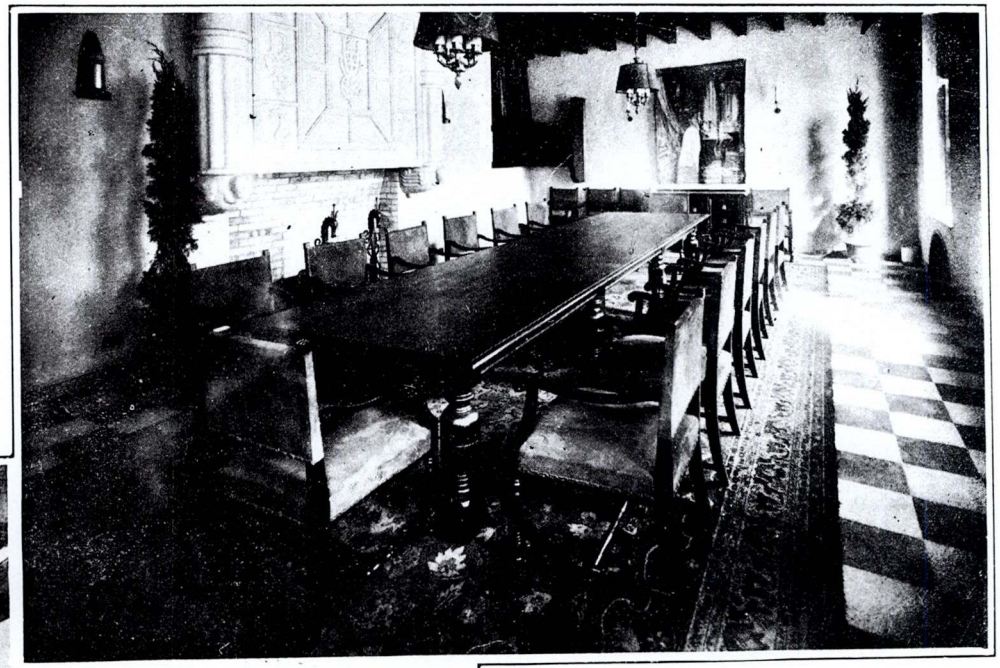
大阪ビルヂング玄關口詳細　　——大阪市北區宗是町——



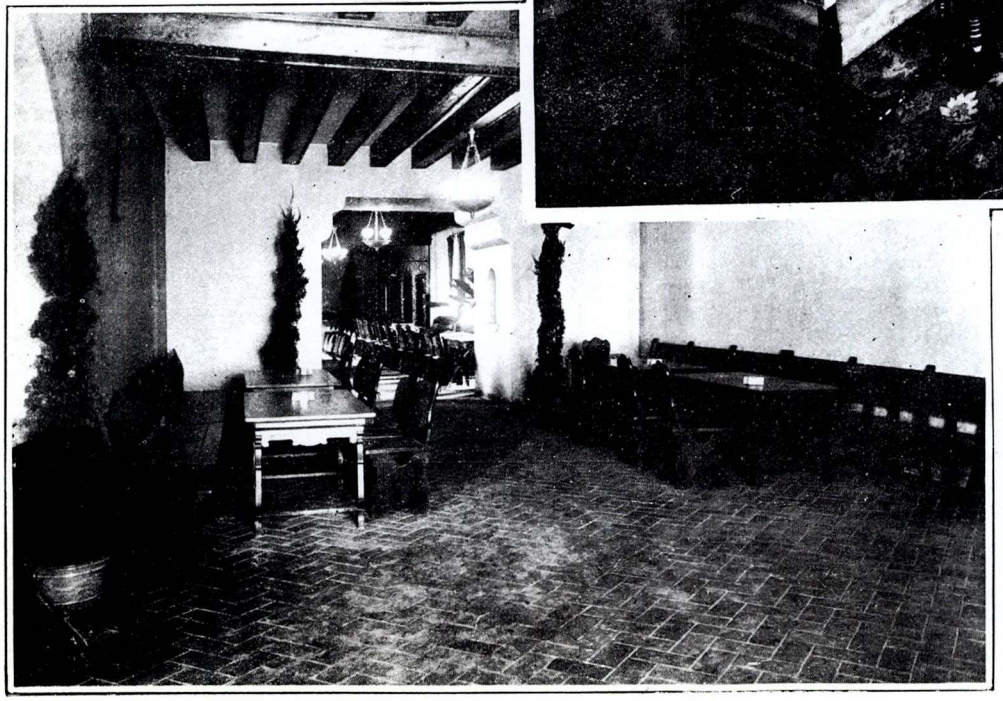
大阪ビルヂング外観



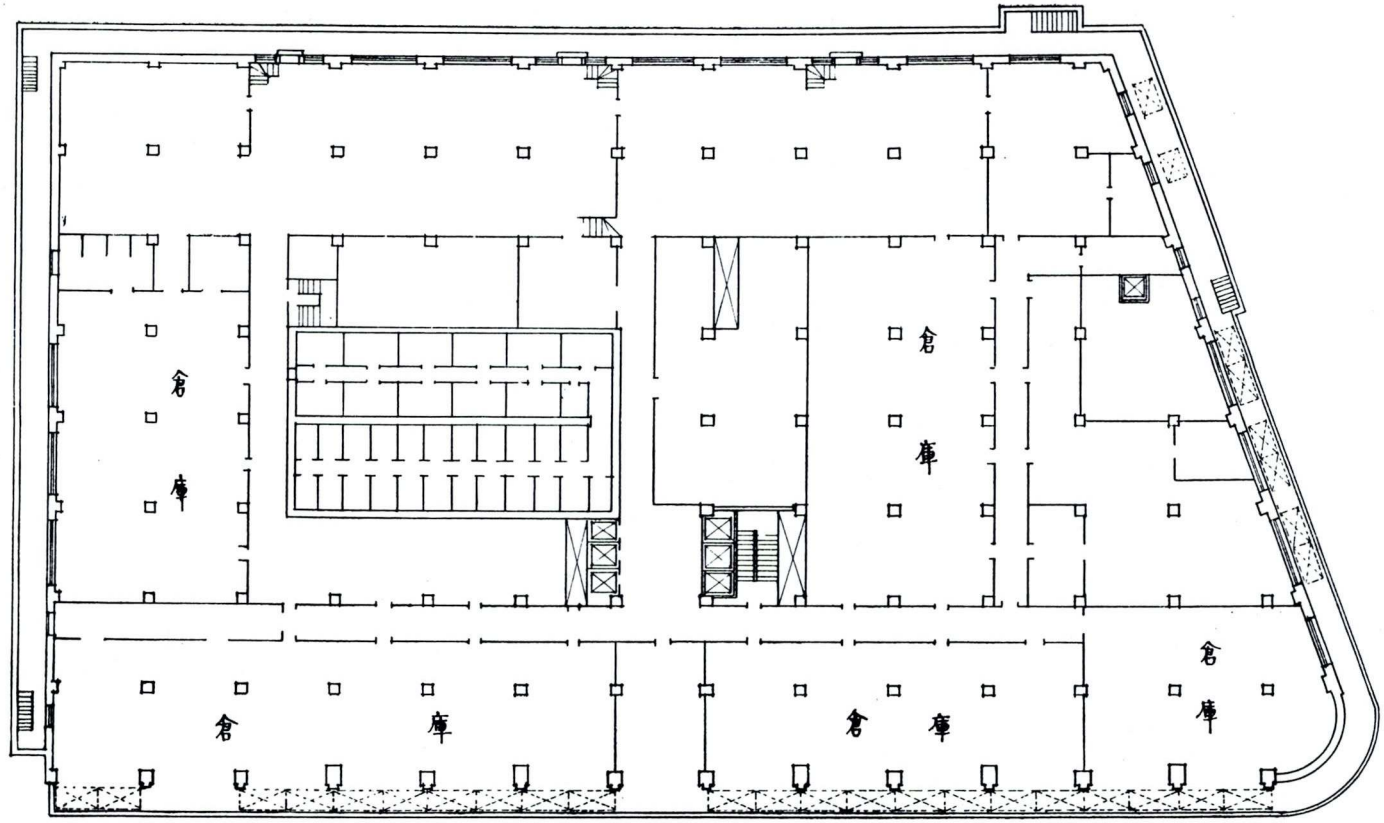
大阪ビルデイングビル倶樂部



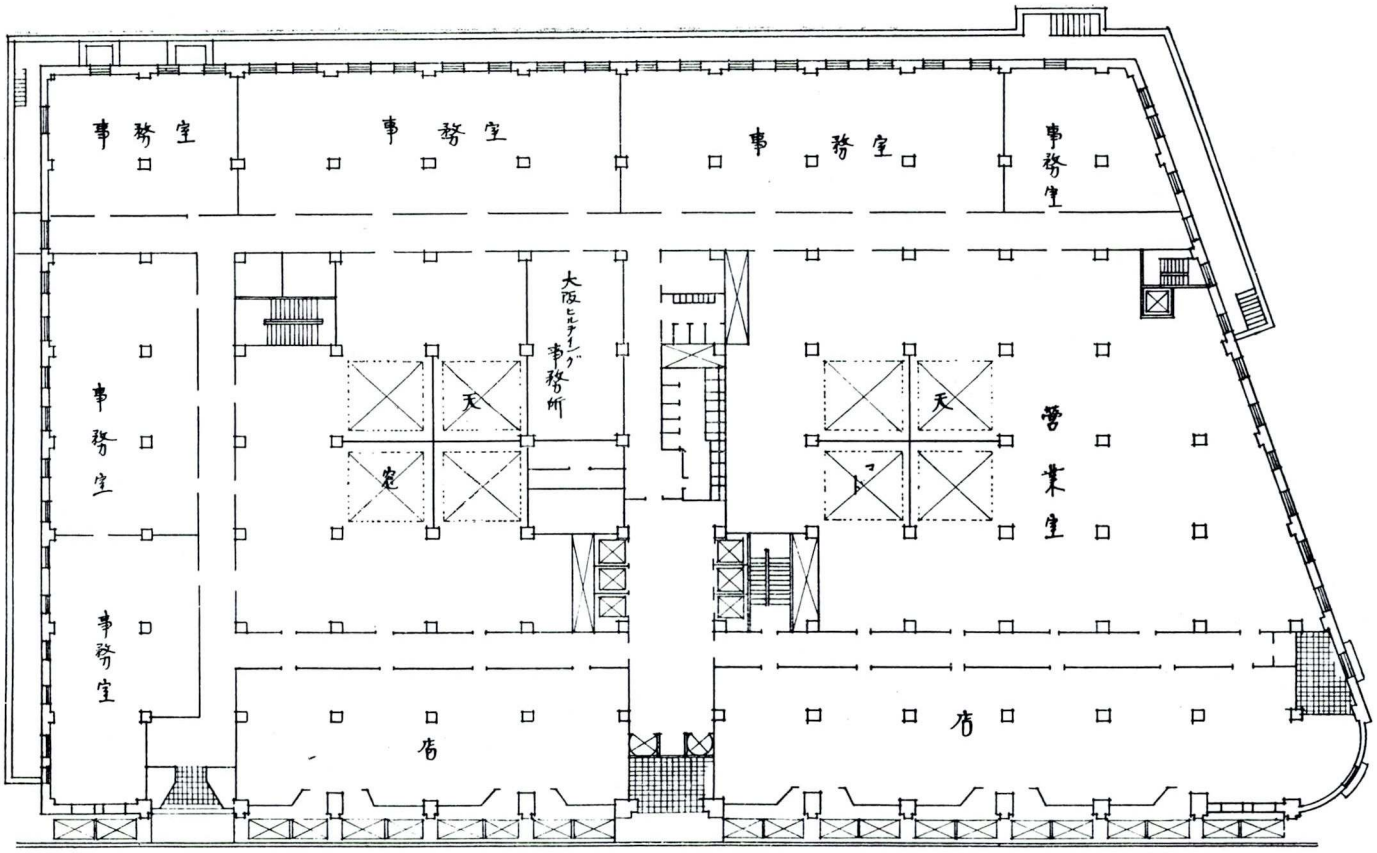
特別食堂



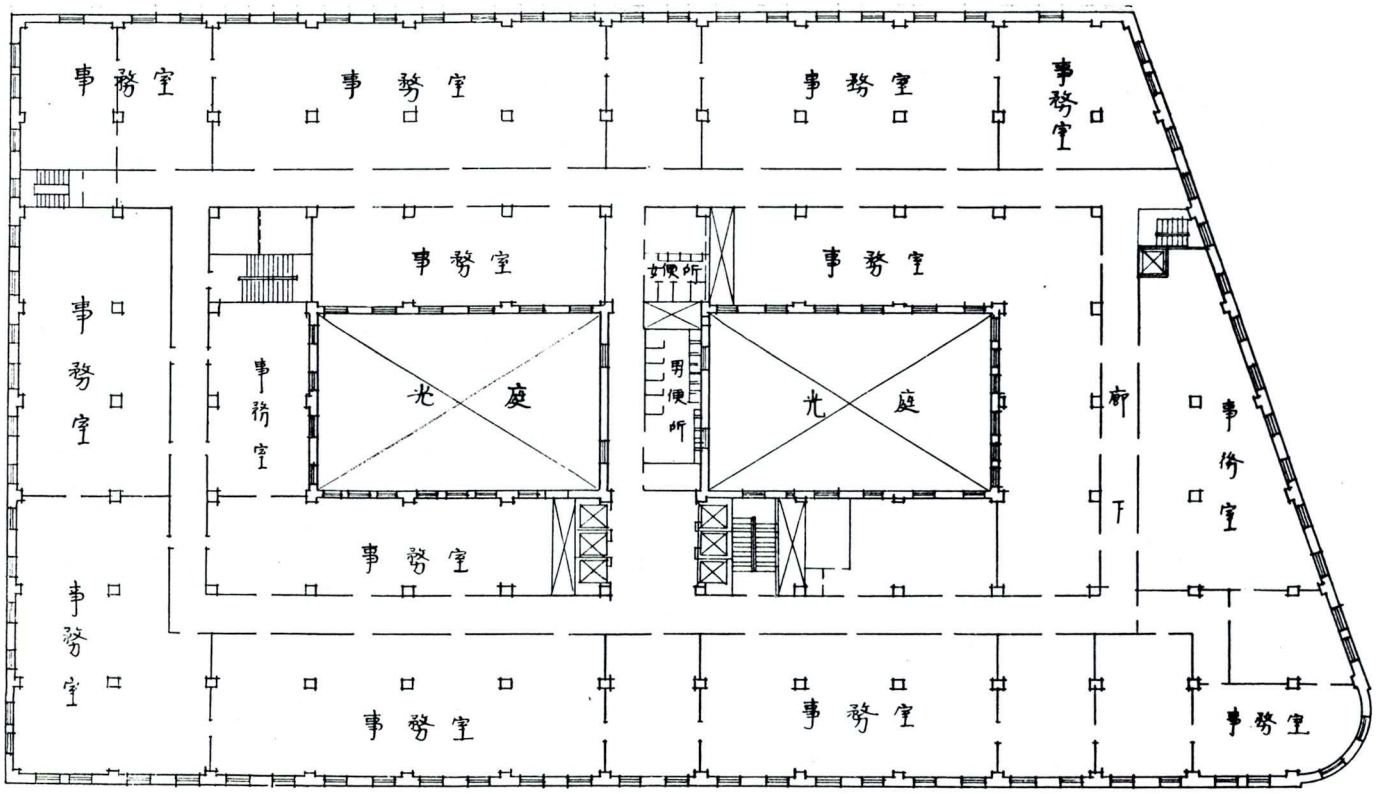
大阪ビルデイングの休憩室

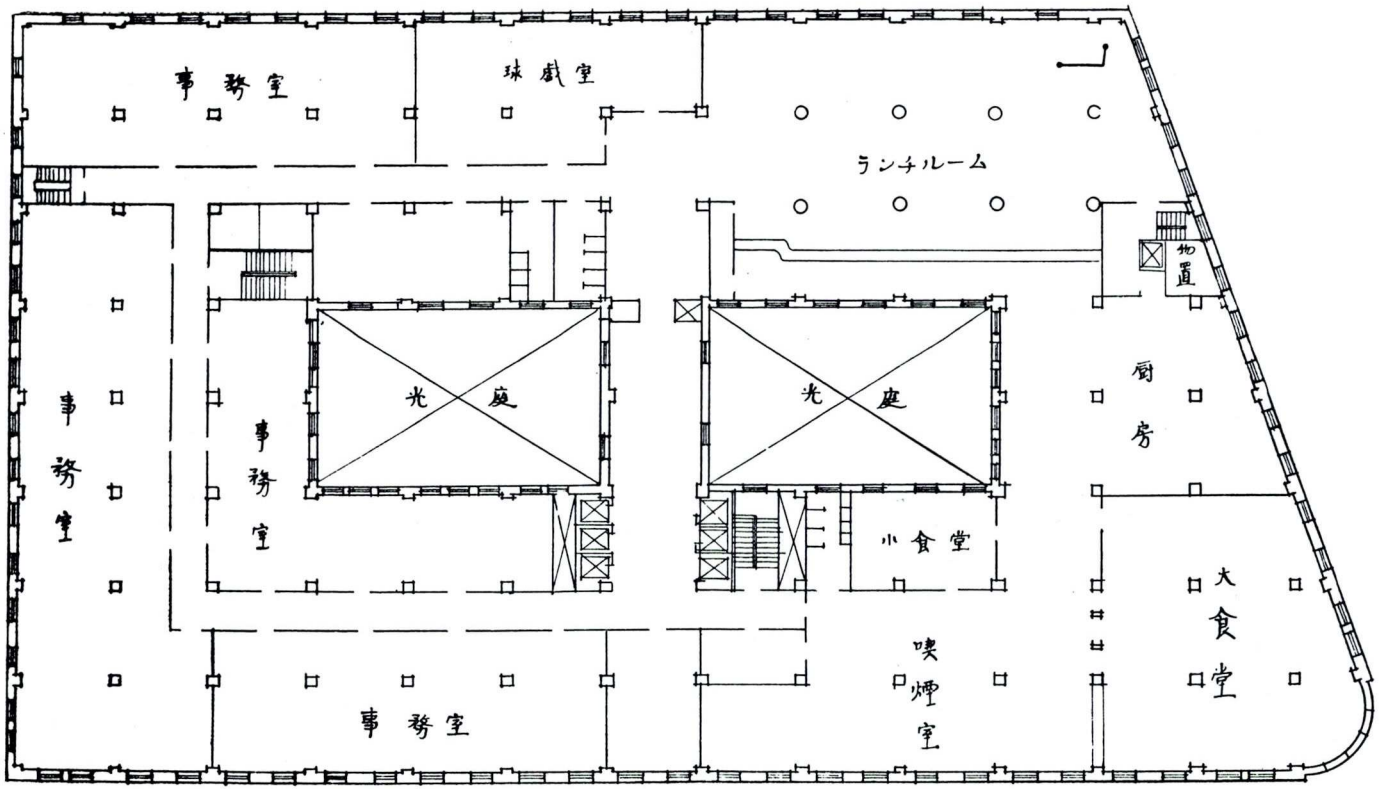


大阪ビルヂング地階平面圖



大阪ビルヂング一階平面圖


事務室
事務室
事務室



大阪ビルヂング八階平面圖



科學と經驗

觀察は一切の科學の基礎である。それは科學の必要なる出發點なるも、科學の目的ではない。事實の蒐集は、たとひその事實が完全に觀察されたものであつても、少しも科學的性質を有つてゐない。植物の標本は植物學でなく、動物園は動物學ではない。圖書館の圖書目錄は科學ではない。

科學は、目錄を作ることに存するのではない。現象と現象とを結びつけてゐる恒常の關係を發見することに存する。

現象の諸關係が、何故にそれ程重要なのであらうか。それは關係が一般的價値を有するからである。關係が充分に檢證されたならば、吾々はこれを一般化する權利を有する。即ち奈何なる場合にも、前の條件が同一ならば、結果も亦必ず同一であると斷定するの權利を有する。法則は豫見せしめない。吾々に一般化の權利を與へるものは何であるか、それは經驗のみである。(ピエールデルペの「科學と實在」)

落穗

◎硝子戸の便不便

文化住宅と云ふと、直に明るい硝子戸のある家を聯想致します、地方ではまだそう澤山見受けませんが、都會の附近にはかなり澤山あります、あんな家を建てようと御考への方もありましょう、又改造したいと云ふ方もありましょうその人たちの御參考にもなる事と思うて、我家の硝子戸に關する經驗を申上げます、餘り澤山硝子戸を用ひぬ方が宜しい樣です、大きた家なら格別五間や六間位の家ならば、……非常に家の密接して居る所の經驗は知りませんが……外から入る光線に不足を感ずる樣な事はありません、都市の建築規程にした處で、光線の入る窓とか障子の面積は、その部屋の五分の一であつたと思ひます、即ち疊五枚の廣さの窓又は障子がなくてはならんと云ふ事になるのです、又は疊の部屋の外に半間の緣側があるとすれば、十疊の廣さになるのであるから二枚即ち六尺角の廣さに相當する光線を取る必要があるわけです、之は最低の限度でありまして更に必要な光線がいる丈けに止める方が得策と思ひます、又北國の雪國の樣に軒の長く出て居る所では硝子で上の方から光線と熱を取る工夫をする必要があります。

以上の光線の取入口があるのは差支へありません、然し餘り外から光線が澤山入ると、頭が刺戟され過ぎて休まりません、でカーテンの如きもなるべく光線を緩和するものが必要となります、又硝子戸は熱の傳導率が非常に早い木の何倍でしたか、今記憶にありませんが兎に角早い從つて冬ならば日の當る時には硝子の方が早く暖かくなり又外氣が室内の濕度よりも冷える時には、餘計に冷えやすいのであります、で冬は南の方から硝子戸を通して日光の暖かみを充分取るようにするのはよいが、ひかげになると窓かけの如きもので、その熱を失はぬ樣に心掛けなくてはなりません、勉強をする部屋の如きも餘り明かるすぎる事は宜しくない樣です次は硝子障子を用ゆる場合でも光線に不足を感じない事は受け合であるから腰丈は板を用ゐる方がよいのです、さうせぬと部屋が冷えすぎたり膝頭が着物の外に出て居るのを家の外から見られたりする缺點があります、且下の方から來る光線よりは上の方から來る光線がより有效なのです、今迄の日本住宅の雨戸の代りを硝子戸で勤めさすには竪まりが少くて冷えすぎると云ふ缺點があるようです、殊に北の方の窓の如きは

◎新考案のアパートメント

北海道帝大敎授法學博士森本厚吉氏は我國民生活の改造に力をつくしてゐるが、わけても住宅問題の根本的解決を圖る爲に、その第一期事業として最も經濟的と認められる最新式合同住宅「文化アパートメント」を建設する事につとめ、それが來る十一月十五日に東京本鄕元町の停留所前に美しいお茶の水の川を見下してい よ〳〵落成する事となつた。住宅問題については博士の夫人靜子さんも非常に興味をもち一年間米國のコロンビヤ大學に住宅問題研究の爲め留學したといふ位の熱心家で今度の建築なども大體は技師によつて設計されたが實際に當つての細部の注意は皆婦人自らの指圖によつたものださうだ「政府の低利資金と他の金をよせて五十二萬圓の建築費をかけました。これは全くの社會事業で、とてもアパートメントの經營だけでは當分の間は年に約一萬圓の缺損となるのです、それで雜誌文化生活」や私のやつてゐる雜貨店及びアパートメントの食堂などから上る利益によつて補つて行くつもりで居ります瓦斯料理ストーブ、洋式流し、洋式浴槽、水湯兩用洗面器、洗滌式便器、醫藥容器、室内電話暖房爐埃燒捨器、自働エレベーター、其他あらゆる近代的便利を設備してあります。もう四十三の世帶に對して四倍位の申込者がありますがそのうち外國人が三分の一入る事になつてゐます、食物はすべて科學的に獻立を作つて人間はこの位の物を食べてゐればいゝといふ標本を作りたいと思つてゐます。女中は一切連れて來て頂かない事にしてあります。特に手傳ひを要する場合には四人の女中を置きまして一時間なり二時間なり使つて其料金だけ頂くやうにしますさうなれば日本の奥さん達はすつと進歩します。今までのやうに女中まかせでは駄目です。それから又小さな部屋は獨身の男子と婦人を兩脇にはなして住んで頂き社交室に於て清く交際して頂き、氣心が知れたら及ばず乍ら監督をして幸福にしてあげたいと私はそんな事にも理想と興味を持つてゐます個人々々は絶對に自由で他人に迷惑をかけないやうにして頂き、男の方で花柳界に出入するやうな方があれば一度お入りになつてもお斷りします。とにかく數へきれない程の澤山の希望を持つてすつかり出來上つて行くのを見守つてゐませうと夫人は自分の子供の成長を思ふやうに樂しげに語つた。



數字の物語る 景氣と住宅問題

宇治伊之助

第一章　序說
第二章　引用統計と其改容
第一節　人口統計
第二節　家屋數統計
第三節　景氣統計
第三章　相關的關係
第一節　人口と世帶數との關係
第二節　人口及世帶數と景氣との關係
第三節　人口及世帶數と家屋數との關係
第四節　景氣と家屋數就中空家數との關係
第四章　結語

第一章　序說

夫れ景氣とは營利的觀念から見た經濟狀態の推移の總計であつて人類の營利心と經濟狀態との二要素から成つて居る、即ち人類の營利心は景氣の主觀的人格的要素であり經濟狀態はその客觀的物格的要素であるのである。

斯くの如く景氣は人類の利念に關聯したる概念であるから景氣の消長は人氣の集散從つて人口の增減と關係すること密なるべきであり而して人口の增減は忽ち之れを收容すべき住宅事情に直接の影響を及ぼすものである。

住宅問題を現狀に贏したる所以のものは蓋し景氣と人口と家屋數との三角關係にその原因を求めねばならない。

茲に題せる如く數字の物語る景氣と住宅問題といふのであるから所謂抽象的一般論を避け景氣と人口と家屋數との三者につきその計數上に表はれたる事實のみを根據としてその相互の數字上の相關的關係を觀察し以て景氣が住宅事情に對し

如何なる趨勢を辿りて今日に及びたるか又如何なる形に於て如何に反映しつゝあるかを客觀的に歸納せむとするものである。

されば之れがためには第一にその觀察の範圍を限定するの必要がある、即ち觀察の範圍としては地域的には之を大阪市内に限定し時間的には明治三十七年より大正十二年迄の最近過去二十ケ年間に於ける事實によることとした、思ふに當該期間にありては我が國民經濟は日露戰爭及歐洲大戰の如き異常なる大事件に際會しその經濟事情の消長並に社會狀態の變化共に極めて顯著にして注目に値すべき時期であつた。

第二に問題となるは數字の取扱に關してゞあるが此所に於ては單に數字のみならず前述の如くむしろ其變化の趨勢を明かにする事に留意すべきであるから從つてその變化の差數よりもその變化の比率に重きを置くこととした。

而して立論の根據として引用したる統計材料及その改容につき明かにせねばならない、即ち之については今便宜上次の如き別章を設けてそを明かにすることとした。

第二章　引用統計と其改容

第一節　人口統計

第一　人口增加率

大阪市の人口增加率につきては次の理由によつて次の方法により國勢調査人口を基準として更正推定人口を算出し而して之れによる。

既往に於ける大阪市の人口調査統計には次の三種類ある、

其一は公定人口として知らるゝ內閣訓令に基く本籍及寄留公簿上の人口調査統計であつて大阪市之れが調査に當つて居る。

其二は戶口調査規則に基き大阪府警察部の行ふ所の戶口調査統計である。

其三は大正九年十月一日我國に於て初めて行はれたる第一回國勢調査の結果であつてその時に於ける現在人口の調査統計即ち之れである。

而して此等の人口調査統計は各々その調査の目的を異にして居るから從つて之れが方法も亦夫々相違して居ることはいふまでもない。

公簿調査人口は本籍及寄留簿上の調査數であるから其數字の正否一に本籍及出入寄留屆の正否に繫つて居る、然るに一方かの本籍人口は其人の本籍の有無のみに着眼し現に居住するや否やを問はない、而かも他方出入寄留手續令に依る屆出を爲さざる者極めて多く又寄留簿整理毎に不自然なる減少を生ずるから此等の數を以て算出された公簿調査人口なるものは實際の現住人口に比しそこに幾多の過不足あるべきこと推知するに難くはない。

次に又警察調査人口に在りては之れ警察官の一々戶別に訪問して調査したるものであるといふもその調査の時を同じくして各所一齊に行ひたるものでないから其實數には脫漏あるを免れない。

元來大阪市の如き大都市に在りては其出入極めて頻繁であつてその人口は一刻一刻に變化しつゝあるから之れが調査の適確を期することは殆んど至難事に屬して居る。

然しながら前掲三種の人口調査統計中國勢調査は人口調査を唯一の目的とし其調査の方法につきても最も周到なる注意の下に而かも同時に之を行ふたものであるから假令その遺漏ありとするも之れ極めて稀有なるべきを認定し得べきである由つて國勢調査を基準として公簿及警察調査人口を觀察し以て更正推定數を算出するを妥當とする。

即ち假りに國勢調査人口と公簿及警察調査人口との各實數を對比すれば次の如くである。

▽第一表　國勢調査人口と公簿及警察調査人口との比較

比較統計	人口實數	國勢調査を基準とせる過○不足△數	同上割合
國務調査人口（大正九年十月一日現在人口）	一、三五二、九八三		
公簿調査人口（大正九年十二月末現在人口）	一、六四三、四三〇	○ 三九〇、四七七	○ 三一%
警察調査人口（大正九年十二月末現在人口）	一、一〇五、六七六	△ 一四七、三〇六	△ 一三%

前表によれば公簿調査人口及警察調査人口は國勢調査人口に比し（其調査の時日を多少異にするも）前者は三一%の虚數を抱容し後者は一二%の負數を有せるを知る。

かくて此結果からして次の事實を想像することが出來る。

大阪市の人口實數は警察調査人口よりは多きも公簿調査人口よりは少なく而かも公簿調査人口よりも警察調査人口に近きものなること即ち之れである。

茲に於て今暫く國勢調査人口を大正九年の人口と假定し之を基準として次の方法により累年人口を推算する、即ち公簿調査人口及警察調査人口實數の各々を平均することによつて前者の虚數と後者の負數とを相殺し然る後その平均數を國勢調査人口を基準として比例式により更正し以て推定人口を算出する。

而して之れにより各々其前年に比したる人口增加の千分率を求むれば次の如し

▽第二表　大阪市人口の更正推定數

年次	公簿調査人口	警察調査人口	平均人口	更正推定人口
明治三十七年	一、〇二六、七六七	七〇〇、三〇四	八六三、五六六	七六七、五七二
明治三十八年	一、〇六九、四五八	七四一、七一三	九〇五、五六六	八二五、八四四
明治三十九年	一、一一七、一五一	七七二、二五九	九四四、七〇五	八六一、五七一
明治四十年	一、一七二、一三八	九八三、六五五	一、〇七八、三九七	八九七、〇九三
明治四十一年	一、二二七、七六五	八四七、七三三	一、〇三二、七四四	九四一、八六三
明治四十二年	一、二〇四、五七七	八四一、〇八七	一、〇二三、八三三	九三一、八二三
明治四十三年	一、二三九、三七三	八九二、三〇七	一、〇六五、八四〇	九七二、〇四八
明治四十四年	一、二七三、六八〇	九七七、四一四	一、一〇五、五四七	一、〇〇八、二五九
大正元年	一、三二一、九九四	九六〇、九二七	一、一四八、四六六	一、〇四五、五七七
大正二年	一、三六八、九〇九	一、〇〇三、八九五	一、一九六、四〇二	一、〇九一、一一九
大正三年	一、四二四、五九六	一、〇〇三、七一八	一、二一四、一五七	一、一〇七、三二一
大正四年	一、四六〇、二一八	一、〇一七、七八七	一、二三九、〇〇三	一、一二九、九二一
大正五年	一、五〇八、六七七	一、〇六六、五二三	一、二八七、九五五	一、一七四、二六七
大正六年	一、五五七、九八六	一、一〇〇、五一五	一、三二九、二五一	一、二三三、二七七
大正七年	一、六二三、三五八	一、一七〇、〇二一	一、三七〇、二〇〇	一、二四九、六二三
大正八年	一、六八三、六五〇	一、〇八五、七三五		一、二三〇、一三八
大正九年	一、六四三、四三〇	一、一〇五、六五七	一、三七四、五二四	一、二五二、九八三
大正十年	（一、二四八、四七一）	（　　）	（　　）	一、二七四、〇三三
大正十一年	（一、二四一、〇〇〇）	（　　）	（　　）	一、二九二、二〇〇
大正十二年	（一、三八七、二〇〇）	（　　）	（　　）	一、三一八、四八五

備考

明治四十二年の人口前年に比し著しく減少せしは北區大火のため他郡市へ轉住せしもの多かりしによる大正八年に於ける人口の減少は公簿の一部整理を行ひたるによる

大正十一年の公簿人口減少は前年の國勢調査の結果に鑑み公簿整理し遺算を是正したるによる
大正十一年及十二年の公簿人口には國勢調査を基礎とせる推計現在人口を掲ぐ

▽第三表　大阪市推定人口増減表

年次	推定人口	前年に比したる増加實數	同上千分率	順位
			%	
明治三十七年	七七七、五七二	二〇、四〇三	二五、九	一三
明治三十八年	八二五、八九四	三八、三二二	四六、四	二
明治三十九年	八六一、五七一	三五、六六七	四一、四	四
明治四　十年	八九七、〇九三	三五、五三三	三九、六	六
明治四十一年	九四一、八六三	四四、七七〇	四七、五	一
明治四十二年	九三一、八三三	△九、〇四〇	△九、七	一九
明治四十三年	九七二、〇四六	三九、二二三	五〇、四	五
明治四十四年	一、〇〇八、二五九	三六、二二三	三五、九	八
大正　元年	一、〇四五、五七七	三七、三一八	三五、六	九
大正　二年	一、〇九一、一一九	四五、五四二	四一、七	三
大正　三年	一、一〇七、三二一	一六、一九二	一四、六	一七
大正　四年	一、一二九、九七一	二二、六六〇	二〇、一	一三
大正　五年	一、一七四、二八七	四四、三一六	三七、七	七
大正　六年	一、二二二、二七七	三七、九九〇	三一、三	一〇
大正　七年	一、二四九、六二二	三七、三四五	二九、九	一一
大正　八年	一、二三〇、一三八	△一九、四八四	△一五、八	二〇
大正　九年	一、二五一、九八三	二三、八四五	一八、二	一五
大正　十年	一、二七四、〇三三	二二、〇五〇	一六、五	一六
大正十一年	一、二九二、一〇〇	一八、一六七	一四、一	一八
大正十二年	一、三一八、四八五	二六、二八五	一九、九	一四

第二　世帶數增加率

大阪市に於ける世帶數の増加率につきてもさきに人口に關して述べたると同一理由により同一の方法によつて更正推定世帶數を算出し之れによる、即ち次の如し

▽第四表　大阪市世帶數の更正推定數

年次	公簿調査世帶數	警察調査世帶數	平均世帶數	更正推定世帶數
明治三十七年	二三八、九六九	一六五、二六一	二〇二、一二五	一九一、二〇一
明治三十八年	二四四、四六三	一八一、九二八	二一三、九六一	二〇一、六八三
明治三十九年	二六〇、五三六	一八九、〇六一	二二四、七九九	二一三、六六〇
明治四　十年	二七一、三〇〇	一九五、二四八	二三三、二七三	二二一、六七六
明治四十一年	二七八、七七六	二〇七、八三一	二四三、二九九	二三〇、一七七
明治四十二年	二七七、〇八五	二〇五、三七二	二四〇、二二九	二二七、二五七
明治四十三年	二八六、四九四	二一六、八七六	二五一、六八五	二三八、〇九四
大正　元年	二九四、〇三五	二一八、八〇三	二五六、九三九	二四七、三〇三
大正　二年	三〇六、七三一	二三五、一七〇	二七〇、九五一	二五六、三二〇
大正　三年	(三〇一、〇六一)	(二四三、三四五)	( )	二五七、五〇四
大正　四年	三〇三、六四八	二四二、五一二	二七三、〇八三	二五八、三三七
大正　五年	三〇九、〇三七	二四五、八〇〇	二七七、八三九	二六二、四三三
大正　六年	三一七、八三九	二五五、八一八	二八六、八三三	二七一、三三九
大正　七年	三一八、四一五	二六二、三〇五	二九五、三六〇	二七九、四一一
大正　八年	(三二二、一八九)	二六三、七六〇	( )	二七九、六八一
大正　九年	(三二六、一三七)	二七七、六九〇	( )	二七一、四一五
大正　十年	三二一、七九〇	(二六二、三〇六)	(二九二、〇四八)	二七六、三三一
大正十一年	(三〇〇、三二四)	二六六、八六三	( )	二八一、〇〇七
大正十二年	—	二六九、五七三	( )	二六三、八六〇
備考	—	二七四、五五〇	( )	二八八、一〇一

明治四十二年に於ける世帶數の前年に比し減少せしは北區大火のため他郡市へ轉住せしもの多かりしに由る

大正二年の公簿調査世帶數の減少は東區に於て從來專ら公簿を基礎として調査せしを實地調査に改めたるに由る

大正七年の公簿調査世帶數の減りしは南區に於て公簿基礎調査に改めたるに由る

大正十年以降の公簿調査世帶數の減少は國勢調査の結果により公簿を是正せしによる

大正十一年及十二年は調査せず

▽第五表　大阪市推定世帶數增減表

年次	推定世帶數	前年に比したる增加實數	同上千分率%	順位
明治三十七年	一九一、一〇一	三、五三五	一八、四	一〇
明治三十八年	二〇一、六三六	四、三三四	二三、五	九
明治三十九年	二一三、六六〇	一〇、九七七	五一、六	一
明治四十年	二二三、六七六	九、〇一六	四〇、七	三
明治四十一年	二三〇、一七七	八、五〇一	三六、九	五
明治四十二年	二二七、二七七	△三、九二〇	△一三、八	一九
明治四十三年	二二八、〇九五	一〇、八三七	四五、五	二
明治四十四年	二四七、三〇二	九、二〇八	三七、二	四
大正元年	二五六、三一〇	九、〇一八	三五、二	六
大正二年	二六七、五〇四	一一、一八四	四一、六	一六
大正三年	二七八、三七七	八三三	三、二	一七
大正四年	二八七、四三三	四、〇九六	一五、六	一三
大正五年	二九一、三二九	八、九〇六	三一、八	七
大正六年	二九九、四二一	八、〇九二	二八、九	八
大正七年	二七九、六八一	二七〇	〇、九	一八
大正八年	二七一、四一五	△五、二六六	△一九、四	二〇
大正九年	二七六、三三一	四、九一六	一七、八	一二
大正十年	二八一、〇〇七	四、六七六	一六、六	一三
大正十一年	二八三、八六〇	二、八五三	一〇、一	一五

大正十二年　二八八、一〇一　四、二四一　一四、七　一四

第二節　家屋數統計

第一　家屋數の增加率

大阪市内に於ける家屋數調査統計としては大阪市統計書の示す數字による、但し同統計は明治三十八年から始まる、而して之を引用したるは次の二つの理由による、

一、大阪市内に於ける家屋數調査統計としては大阪市統計書の示す數字によるの外他に累年一貫したる此種統計のなきこと

二、大阪市統計書掲載の家屋數は家屋の棟數若しくは竈數等によりたるものにあらずして一々實地につき調査し俗に所謂一軒と呼稱する戸前を以て單位とせるものなること（故に一棟の下にあるも事實數軒の住居に分割せられたるものは各別に算し數棟を有するも一構への内にあるものは一軒として計上せられて居る）

但し茲に注意すべきは右表に示せる家屋數につき住家と非住家との區別なきを以てその家屋數中には居住の用に供せらるゝ家屋は勿論營業居住兼用に供せらるゝ店舗及官公署社寺學校銀行會社工場病院興行場等の如き特種建物をも亦すべて包含せらるゝものであるから實際に於て居住の用に供せらるゝ家屋數は前表の數字よりも少なきこと之れである。

今大阪市統計書の示せる家屋數統計によりその前年に比したる增加實數並に同比率を示せば次の如し

▽第六表　大阪市家屋數增減表

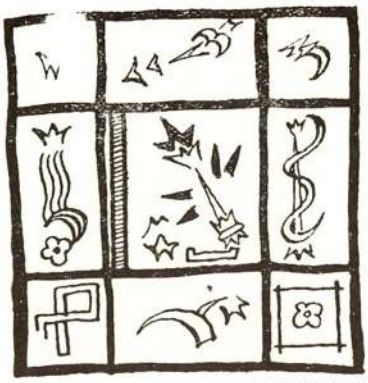
年次	總家屋數	前年に比した増加實數	同上千分率	順位
明治三十八年	一七六、七六四	—	—	
明治三十九年	一八一、八四〇	五、〇七六	二七、四	六
明治四十年	一八八、五五三	六、七一三	三五、六	二
明治四十一年	一九二、七六四	四、二一一	二一、八	七
明治四十二年	一八九、一四五	△三、六二九	△一九、一	一八
明治四十三年	一九四、八五一	五、七〇六	二九、三	四
明治四十四年	二〇四、二〇九	九、三五八	四五、八	一
大正元年	二〇六、二八九	二、〇八〇	一〇、二	一三
大正二年	二一〇、八二〇	四、五三一	二一、五	八
大正三年	二一四、一五四	三、三三四	一五、八	一一
大正四年	二一四、七六一	六〇七	二、八	一七
大正五年	二一七、七一〇	二、九四九	一三、七	一三
大正六年	二一九、六五五	一、九五五	九、〇	一四
大正七年	二二三、〇六一	二、三九六	一八、一	一〇
大正八年	二二三、二〇九	一、一四八	五、二	一六
大正九年	二二五、〇四八	一、八三九	八、二	一五
大正十年	二三一、六五四	六、六〇六	二八、五	五
大正十一年	二三九、〇〇四	七、三五〇	三〇、八	三
大正十二年	二四四、〇六五	五、〇六一	二〇、七	九

第二　空家率

大阪市内の空家數調査統計につきては前同樣大阪市統計書による即ち之れにより大阪市の總家屋數に對する空家の比率を求むれば次の如くである。

▽第七表　大阪市空家數及同率比

年次	現住家屋	空家	合計	家屋千戸に對する空家率
明治三十八年	一七〇、〇三三	六、七四二	一七六、七六四	三八、一
明治三十九年	一七八、三七八	三、四六二	一八一、八四〇	一九、〇
明治四十年	一八四、一二七	四、四二六	一八八、五五三	二三、五
明治四十一年	一八四、九三一	七、八三三	一九二、七六四	四〇、六
明治四十二年	一八三、一四七	七、九九八	一八九、一四五	三六、九
明治四十三年	一八五、四二九	九、四一二	一九四、八五一	四八、三
明治四十四年	一九三、七八四	一〇、四二五	二〇四、二〇九	五一、一
大正元年	一九四、五〇五	一一、七八四	二〇六、二八九	五七、一
大正二年	一九八、〇四一	一三、七七八	二一〇、八二〇	六〇、六
大正三年	一九六、二五二	一七、九〇三	二一四、一五四	八三、六
大正四年	二〇三、〇一五	一一、七四六	二一四、七六一	五四、七
大正五年	二一五、八七六	一、八二四	二一七、七一〇	八、四
大正六年	二一九、〇八八	五七七	二一九、六五五	二、六
大正七年	二二一、四八七	五七四	二二三、〇六一	二、六
大正八年	二二三、八六八	三四一	二二三、二〇九	一、五
大正九年	二二五、四七八	七九八	二二五、〇四八	三、五
大正十年	二三九、八二四	一、八二〇	二二一、六五四	七、九
大正十一年	二三六、九七七	二、〇六七	二三九、〇〇四	八、七
大正十二年	二四一、〇六二	二、〇〇三	二四四、〇六五	八、二



續誤解されたる都市計畫

市民の理解に就いて伊藤氏の答に慊らざるを以て

田中清志

伊藤氏の『市民の理解を基調とする都市計畫』に關聯してものした拙稿『誤解されたる都市計畫と理解されざる其の法制』に對し、態々伊藤氏よりお答へとしてご叮重なるご教示を賜つたことは、私の豫期せなかつた丈けに又一入『深甚なる敬意を表』さねばならぬ所である。唯遺憾とする所は私の小論が氏の駁論によつて全然一篇としての體と意義とを爲さぬ迄に曲解され、甚しきに至つては故意にか偶然にか一部文辭の改竄迄が敢て爲されて居ることで、斯くの如きは私の寔に意外とする所である。これをしても私はこれを吾筆の拙劣なるを恨むの外ない次第なのであらふか。

元來拙稿は氏の御高說に誘導されたとは言へ其の批判が目的の全部でなかつたことは、タイトルによつても內容に見ても氏以外の方には判然觀取されたことゝ思ふが、若し假りに全くの反駁であるとしても、かうした場合に私はその是非は第三者たる讀者に委すを禮と心得て居た、故にこれを再び筆にすることは私の本意でなく、況してや前述の如きご措置に對しての應酬は尙更快しとせぬ所であるが、氏は批論を以て『都市計畫の運行に關して一般の危懼を招く惧』ありと言はれるから、私も私の熱愛する大阪都市計畫のため涙を振つて本稿を草する。

伊藤氏のお答へなるものは私に對してのご答辨以外に批論中の字句の非難と講義が大部分のやうに見受けたが　問題を錯綜せしめぬため、先づ順序として氏のお答なるものから玩味したい。

私は氏の『市民の理解を基調とする都市計畫』の論は前號に於て氏が畢意すられとは多少異り

一、大阪都市計畫區域內に於ける地域の決定を見たるも市民は之に對して無關心なること。

二、之等市民の無理解は其責悉く關係當局者の怯惰と不懇切に在るものと斷じ憚らぬこと（『舊式政治家の態度』と述べられ又吾國官公署の通弊とかを擧げられ『有力者の權勢に支配せられ』とか『批難を糊塗するの愚』とか凡ゆ

る讒誣の言葉を連ねて極論せられて居る）

三、而して之が『興味ある對照』として全然思想と國情と從つて法制を異にする米國に於ける該宣傳の實況を詳細に紹介せられたこと。

四、大阪に於ける地域指定の經過と宣傳方法の不十分とかを獨斷或は豫斷されて『駁くべき謬見』とか『其赴くべき所を指示するに努めずして偏に法の適用を峻嚴ならしめんとする』とか糾彈して市民の理解と援助の肝要さを解かれたこと。

五、又候米國に於ける一例を擧げられたこと。

の如くに解釋した。而して私には『市民の理解』なるものが、ご高說の骨子と看取されたが、其處に市民を理解せしめやうべき何ものをも發見し得なかつた所から、又其の文章の勢から此のご論文の結論は市民の理解なき責が悉く氏の言はれる『舊式政治家の態度』を持し『有力者の權勢に支配せられ』『批難を糊塗するの愚』に陷つて居る『關係當局の怯惰と不懇切に在ると斷じて憚らざるものである』と言ふに在り、而して當時爲し且爲さうとしつゝあつた當局の宣傳方法の一部を『駁くべき謬見』『其赴くべき所を指示せうとするに努めずして偏に法の適用を峻嚴ならしめんとする』と言ふ當局の糾彈非難せんがための非難に外ならないものと解釋した。

私の此の解釋が誤解だとは、今日氏のご希望により玉稿を幾度熟讀しても私には氷解所か益々此の感を强からしめるのみである（私は之を氏の曲論だと思ふがそれとも今更ながら吾頭腦の愚鈍なるを恨むより外ない次第なのであらふか）

私をしてかう解釋せしめたには文意以外に、も一つの理由があ る。それは氏のご高說が大阪の地域指定の告示が官報に揭出された大正十四年四月六日より漸く旬日を經たに過ぎぬ四月十五日付の稿であつた事である。（それが我が『建築と社會』に揭出されたのが其の實施當日たる五月一日だつた）。即ち氏の言はれる『市民の理解』を得べき宣傳の方法に就いてはおろか、私達はやつと官報を手にしたに過ぎざる時で在た。さればこそ當局は漸く具體的宣傳の緒に就きしに過ぎず（電車內の廣告は五月一日から）次に如何なる方法が進められるかは當時當事者にも確定して居なかつたのではなかろうかの時期なのである。

此の時いつ早く伊藤氏が、未だ爲されぬ『都市計畫當局の宣傳が未だ足らざること』を述べられた『勇氣と大膽』さとには敬服せざるを得ぬ。

併し批論は其の冒頭に於て斷つて居る如く、又本篇に於ても述べた如く、氏のご高說の批判が目的の全部ではなかつたからこれらの事情を詳述することを私は故意に差し控えたのであつた。然らば私は批論中に於て氏に如何なる『批難の鋒先』とか——それは直ちに『執つて逆まに』我が『胸前に擬して自殺を促す匕首たらずんば幸である』とまで恐喝されねばならぬ——を指向けたかと言ふに、都市計畫の本來の意義を誤解せしめたくないと言ふ見地から、

第一　地域制の決定を見て喜びに堪えぬと無條件で言はれて居ることの質疑。

第二　概論ごとして『交通系統の確立と地域の決定とが都市計畫の根幹を爲す』と斷定されたことの異議。

第三　市民の無理解の責を『悉く關係當局者の怯惰と不懇

切に在るものと斷じて憚らない』等と糾彈されたり、又『駁くべき謬見』だと豫斷される當局の之に對さうとする方途の論難を高唱される暇に、當事者の一人として市民を理解せしむるの途を講じられなかつたことを遺憾とするてふ希望乃至愚痴。

の三點で、就中强ひれば『批難の鋒先』とも稱され得るものは第三で(イ)氏も當事者ではないか(ロにも不拘當局の宣傳に先んじて、然も其の詳細を調査せうとも爲されず、又進んで良策を建議せうとも爲されず徒らに難詰されたとの批難(?)に在つたのである。(併し氏の人格を慮ひ氏ご一人に判れば好い程度に於て)

これに對して氏は前號本誌に『田中氏に答ふ』と堂々たるタイトルを掲げてそも何を述べられたかと言ふに、第一、第三は之を回避せられ、僅に第二に就いて『田中氏の反對に拘はらず確く把持する所である』と前書し、其の實私の『都市計畫は凡ゆる都市施設の合理的綜合的計畫の樹立である』と言ふ持論を逆に取つて巧妙に裏書せられて居るに過ぎない。私が異議を唱へた所以は『都市計畫の目的が凡ゆる施設の綜合計畫たる以上、道路とか運河とか、或は地域地區とか公園とか箇々に計畫さるべきではない、皆何れも相關聯して即ち綜合計畫してこそ都市計畫なれ、其の實施に緩急の差と、及ぼす範圍に廣狹こそあれ何れ缺げてならぬものである。』と言ふ見地から、やれ道路が幹の、それ地域が根のと斷定して、他を閑却する事は憂ふべきではないかと言つたまでゞある。これは第一に於ても地域の決定を喜ぶに止まられず此の機會に更に、工業地域に在りては運河、港灣、鐵道等の工業繁榮誘致策の要があり、住居及商業兩地域に在りては土地の宅地としての利用を增進せしむる土地區劃整理の如き施設が肝要であると言ふやうのことを市民に吹き込み其の自覺を促し理解を求められたかつたのである。

兎に角第一、第三は答へを回避されて居る今日深くはお尋ねすまい。

斯く詮じつめると氏の『田中氏に答ふ』は其の實私の小論を改訂又は曲解しての反駁が大部分となつて居るのに駁く(或は『田中氏を駁す』のミスプリントかも知れないが)これにお答へすることは問題の焦點を遷移させる惧もあり、又冒頭に記した意味に於て私の甚しく不快とする所であるが、態々かうした態度を執られねばならなかつた氏の苦心の程を慮うて以下なるべく簡單に釋明して置く。

一、氏は所見を異にする私の『都市計畫の意義は誤解されたり』なる前提に對して私が其の原因だとする前半には稍々同意を表されて居るらしい。何故なら氏の『市民の理解を基調とする都市計畫』なるご所論も亦之を說かれたものだと言はれて居るから。(最早私はそれがさりとては餘りに有害無益である等とは言ふまい。)後半の『大阪に於ける從來の所謂都市計畫事業が眞に大阪の健全なる發達を促進するに忠實なる策で云々』(と從來の都市計畫的事業全體に對して言つたのを氏は『大阪都市計畫事業が』と改竄し現在實施のそれに極限して曳れられて居るが)氏には到底踰越し難きギャップだと謂はねばならぬそうで、其の理由として都市計畫の改造と創造二方面の講義を始められ、私が恰も雲を摑むが如き創造一天張の理想論者かの如くに論斷し『田中氏の說く急激なる

發展途上に在る郊外の。準備的唱導や固より良し』等と涼しく納まつて居られるが私の目標が『比較的僅少の資に因て巨利を得べき彼の渾沌たる周圍部の閉塞され切つた交通路の開拓』に在ることは『現在不十分ながらも稍々整備せる中心部』と言へるに見ても確認され得るに不拘、人を誣ふるの餘りに甚しきは氏のために惜む。而して力說されて居る如き中心部に於けるコンゼスションの狀態は周圍部に於ては之を見出し得ないとでも言はれるのであらふかそれはさて措き氏が（意見の相異だらうが）今頃都市計畫の集中主義を禮讃されるなら夫でも好いがたまにはせめて關博士が曾て國民經雜誌に又は本誌に寄せられた左記論文丈けでもお目を通され、又現代に於ける都市計畫の思潮をも顧られたい、大阪市に於ても曾て街路改良と稱し周圍部に對するかうした事業を都市計畫部に於て進められたことのあるをお知らせする。（其實私も昔そうした考へ（氏の如き）を有つて居た時代もあることを白狀して置く）

A、伯林郊外の發達に關する研究
（國民經濟雜誌三二—一・二）

B、集中主義の都市建設　（建築と社會　五—二）

C、分散主義の都市建設　（同　　）

二、『多年の調査と蘊蓄を傾けて之を立案した……都市計畫事業を『暴君的所業なり』と斷言した」と言はれる點は拙稿を再讀されると、前揭其他のご研究により自づから氷解されやう。（私が五六年待てば好いらしい）只「關係當局者が多年の調査と蘊蓄を傾けて立案」せられたものは、今日實施の途に在る都市計畫事業のみに非ざることを附記して置く。

三、私が『苟くも都市計畫の目的を達成するに必要なる事項の計畫は凡て確定——少くとも當務者に於ては確立してあらねばならぬ』と言つたに對し「斯くの如き全般に亘る立案の如きは纔すに數年若くは十數年の長日月を以てするに非んば不可能の事であらふ」と駁されて居るが、氏は彼の明治十九年十二月大阪區部會に於ける市區改正の計畫を請ふの建議提出前後の事情や、明治四十四年七月大阪市會に於ける市區改正に關する法令の制定竝に其の調査委員會設置の要請、大正六年四月以降大正八年迄大阪市に設置されて居た都市改良計畫調査會の經過、殊に當時採擇された大藤博士御提案の基本調査要項と其の進行や、市區改正時代に於ける直木博士以下の御活動の一端をでもご存じなのであらふか、又大正九年四月市衞生課が發表した塵埃處理方法調査報告や、大正十二年七月及八月市水道部長がなした下水處理計畫調査報告及大水道計畫調査報告、又他の委囑調査の存すること、及現に進められつゝある夫々調査研究は未だお耳にされて居ないのであろふか。更に又彼の街路系統や防火地區さては今回の地域の指定等が只單獨に他を顧ず漫然と立案されたものとでも思ふて居られるのであらふか。抑々氏はシビックサーベーに就いて幾千の研究を爲されたことがあるのであらふか。

私が『凡てが確立してあらぬ』と言つたのは『凡てが兎に角當事者間には立案なされてある、而して其の緩急の度に依り實施されつゝあると言ふことを語を變へて言つたのである。繰り返すやうだが從て道路と地域の根幹とかが確定して喜ぶと許り言はれず、更にこれと策應すべく重大なるものゝ多々存することを知らしめ其の圓滑なる運行を期したい微意に外

ならなかつたのである。(此點取出部長の御名論「毎日新聞所載」には敬服して居る)假りにも他を批判せうとするならばそれに關する調査の凡てを盡しての後に爲さねばならぬものではあるまいか(例の宣傳方法等の如き特に)

四、氏の如き先覺者までが道路々々と强調されるがために『都市計畫即ち道路計畫而して榮耀沙汰と誤解されるのに無理はないやうの氣もする』てふ批文中に括弧で伏せた『道路事業には國庫の補助以外に受益者負擔金云々』を恰も私の本論でゞもあるかの如くに摘出して鬼の首でも採つたかのやうに難詰されることは近頃以て多少迷惑である。

五、私が氏の大阪市都市計畫都員ならせられるの故を以て之に就いて批判し批難されることを許されざるものゝ如き見解を有するかに誣ひられてのご所論は『敢へて借問す……氏の胸前に擬し自殺を促す匕首たらずんば幸である』と威嚇せられやうための策略であらせられるなら私は氏のお苦しい立場を察して默過するにやぶさかでない。併し私はそうした見解を持しては居ない(邪なる憶測を前提としてのご非難は見苦しい)

私は氏が當事者のご一人として先廻りしてのご批判(當局がまだせぬことを迄、又これをろくに調査もされず)は不穩當(遺憾とするてふ言葉で)と言つたまでゞある。私が氏の言はるゝ如き批判を是認して居ることは氏のお說に從へば既に私自身之を敢へて爲して居るではないか(ご例擧の點には同意し兼ねるが、宣傳講演の內容の不滿の如き)

六、私が地域制はこれに順應する運河、街路等其他幾多の施設を得なくては所期の効果を擧げ得ぬ、從つて地域指定の次に來るものはそれら施設の確立(當事者間には立案されて居ても)である事を一般に會得爲さしめたい意味から『氏も認めらるゝ如く所有權に大なる制限を加へる(氏が制限の峻嚴さを誇張してまで大々的に詳述されて居たから)此の地域制が(私は大阪に限定せず概括的に述べたが)それに對して保護を與ふべき何等の施設をも計畫なされないで單獨に施行される(と言ふことばとの意味で)ことは寧ろ憂ふべきことではあるまいか』(氏の引用はこれも大阪に對するものと誣ひ且つ批難すべきことゝ揑造されてあるが)と言つたことを巧妙に受けて「其の批難さるべき地域制を立案し、或は……を審議可決したのは氏が其創立以來參畫せる地方委員會に非ずして何人であるか』と巧みに曲解して私を陷れんと無理押しして居られるお手並には古いながらも感嘆し、又ご心事は汲むも私は大阪の地域を何處に非難したであらふか、ご安心あれ、繰返すごとく大阪に於ては地域制に順應する凡ての施設は着々具現の道程に在るから。

七、釋迦に說法かは知らぬが(私は講義が下手だから)地方委員會の組織、權限に就いては拙著『大阪の都市計畫』をご覽ありたい。さすればかうした無鐵砲は放てぬ筈だから。

尙ほこれ以外の點にご論及なきは總て之れを是認されたものと認める。

次に希望として氏が拙稿に與へられたご啓蒙の申し開きは氏が私の指向けたと言はれる「批難の鋒先」とやらの結末がつく迄之をこれ以上保留したい(これ丈けでよく御了解とは思ふが)それは問題を徒らに錯綜せしめるからでもあるが、よし私に落度があつたと假定しても、氏のそれとアルゼブライツク・サムを採る譯に行かぬから。

最後に私の粗野な文辭が、問題以外の點で若し氏を傷けて居るなら御寬恕ありたい。幾重にもお詫する。(一四、一〇、三)



續借家難

（大正十四年本誌四月號參照）

津田鑿

凸凹家主が子供を入れるからと云ふ申出に同情して四軒長家を後に新舊の家主に充分敬意を表して漸く落着いて二週間其の間に舊宅とは別に縁もゆかりもない様でもあるが其處は人情持主は修繕を始めたろう位のことは氣になる永い間別に手入れをしなかつたから定めし今度は費用が掛るであらう併し子供のためなら之も仕方ないとして凸凹家主は出來る丈け費用の節約に目を剝いで職人を指揮して居るであろう雨漏の個所疊、襖、壁を塗つたり張り替へたりなんかと他人の痴氣を頭痛に病んで丁度三週間過ぎ突然御注進が飛んで來た其れは初めの約束を履行せず即ち子供を入れずに修繕の出來ると同時にあかの他人に借して仕舞ふた樣子今新らしい名札が出たと云ふ事であつた之は家主が私をペテンに掛けた事を憤慨して同情的の報知であつた。

之は驚いた昔は何處かの銀行員で今は地所や家作で生命を繋いで居る相當人格ある家主と思ふて居つたのは大間違ひ狸か、狢貉か、とう〳〵尾を出したな今更赤くなつたり青くなつても追付かない。

人の性は善なりである自分で自分を正直と云ふ事は少しおかしいが家主の申出事情は最もらしかつたと思つて心持よく氣前を見せた江戸子流の承諾はちと早まり過ぎた冬の寒空にをいそれと移轉して莫迦を見たのは私である一杯どころか十杯も喰わされた他人に貸した理由は幾何家主が都合があつたと辯明しても之は筋が通らぬ條件は子供が住むから立退きを承知したのだ修繕をして其の費用が掛り過ぎたなんかは理屈にならん最も家主は前住者を追ひ出せば跡は野となれ山となれ自分の家を誰れに貸そうが大に御世話だと云ふかも知れぬが其れは暴言沙汰の限りだ。

賃貸人を移轉させるには普通移轉料の問題を暫々耳にする之れは當然の事だ其れでも借家人はどうしても一筋繩では立退かんと云ふ事を耳にする、尙ほ賃貸人間造作の問題でゴタ

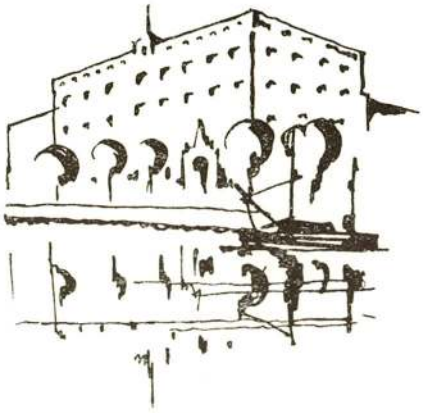
〳〵をも耳にする其の理由は双方にある必ず一方が不當とは限るまいが自分の塲合は全くそうでない結局甘く追ひ出された輩が間抜けと云ふことになる單なる理由を想像すると思ひ切り家賃を上げたいが永住して居るものには多少義理がある新顔には勝手な事が出來る位のことで叩い酒が呑めない處から計略に嵌込まれたのだ是れ迄は子供が多少世話になつて居つたがもう片付けて仕舞へばおさらばそこらが所謂家主根性に外ならない其處で引掛けたのだ又樂々と引掛つたのだ。

社會の紳士に物申す人の性は善なりだが能く考へて見て向ふの出樣で悪に行く必要もある今の世の中では先づ悪家主に對しては善の必要がない事を廣言する追ひ立てを喰はされた塲合動くべきでない必ず一杯喰はされる事情は先方の都合と初めから極まつて居るそんな事に今後驚くものでないイヤモウ決して驚かぬ之れから越中を締め直して家を借りる。

M氏の四年越し追立てを喰ひながら前通りの家賃を納め下手に出てずる〳〵べつたりとは結局之は確かに勝利だ世の中に正直者程馬鹿なものはない何んでもゴム玉式スポンジ流に限る世界一高率の借家、昔の人が利巧そうに唱へた樣な今時分月收の何分の一以上の家賃は贅澤であるなんかと云ふても到底貸す人がない、疊一枚は東京では貳圓內外寧ろ以上だ其の原因は當然の項目もあろうが三年や五年の短期に原價を償還するのは餘り罪な事ではなかろうか其れを承諾しながら借家に住まねばならぬ吾人は不幸なものである事足りれば『ジフシイ』が羨ましい、借家難生活難何時解決するであろうか

淀の深みにうかべる魚のごとにて或る日

行き居れば木槿さきぬたり。



白ペンキの材料なる鉛白に就いて

細木松之介

鉛白の製産額は可なり大なるものであるが其大部分は白色ペイントの製造に供せらるゝのである今其製造法と其毒性に就いて少しく述べて見たいと思ふ。

鉛白に關する最古の記錄は恐らくは希臘のゼノフォン（紀元前四百卅年より三百五十五年までの人）であつて氏は其著書エコノミクス中にセリユサ即ち鉛白を化粧用に供する事を記して居る又チャーチ氏の記事によれば紀元前約四百年の陶製函に容れたる塗顏料を發見したるが之は鉛白と炭酸石灰との混合物であつたと云つてある右ゼノフォンの記すセリユサは天産の鑛物セリユサイト（炭酸鉛）を細粉としたる物である然るに其人工的製造に就いての最古の記事は恐らくセオフラスタス（紀元前三百七十三年より二百八十七年の人）で在て氏は其製法を記して曰く、陶製の器に酢を盛り其上に鉛を載せ置く事約十日にして其鉛が錆の如き物を化成するを以て之を剝落せしめ其後に殘れる鉛を更に酢上に置く事前の如くして錆を化生した時之を剝取る事前の如くして數回之を繰返して鉛の全部を錆化せしむるのである斯く取り集めたる化生物は之を細末となし更に之を煮沸する事長時間にして沈降せる物が所謂セリユサである、又ヴイトルヴイウス（紀元前百年）はローディアに於ける製法を述べて居るが之によれば大なる陶製器に葡萄の小枝を盛り之に酢を注ぎ掛け其上に鉛を載せるので酢の發散を防ぐ爲に之に蓋を施して置けば相當の時を經過したる時は鉛は變じてセリユサとなるのであると。

又有名なプリニー（紀元二十三年より七十九年）によれば古代の人は天産のセリユサを以て船舶を塗りたるも氏の時代には皆人工的酢と鉛を以て之を製造したもので就中ローディアの品は最も優等であつたと。

此等の記事により或一部の人は說を爲して曰くに鉛白即ちセリユサは醋酸鉛であつて炭酸鉛でないと然れども之れは不當の說であつて適當なる豫防を施すに非ざれば酢と鉛によりて生じたる醋酸鉛が

炭酸鉛に變化するのを防ぐ事は不可能である其理由は空氣中には常に炭酸が存在して居る外に葡萄の小枝の分解によりても炭酸を生ずるし又其外に不純なる酢の中には葡萄汁の殘留せるものがあるから之が醱酵して炭酸を生ずるからである。

又ゲンテン氏の著書によるもカリンチアのクラゲンフルトに於ける製法が記してあるが其法は葡萄の絞り滓に酢を加へて醱酵せしめて生ずる醋酸蒸氣と炭酸瓦斯に鉛を曝露して鉛白を製造すとある。

又ガレン（紀元百三十年より二百年の人）の時代に於ては氏の記述によれば密陀僧を酢に溶解して之を壺に入れ四十日間糞中に埋沒して置いて製するのであつて糞は慥かな炭酸の根源であるのである其後第十一世紀に於けるセオフイラス及びエラキユラスの記事によるも糞を發熱の源として記して居るが之が又一大要素な炭酸を發生するものである事を明知して居らぬと見へるのであるそれは兎も角も製品が炭酸鉛であつた事は間違いないのである。

鉛白製造の一大進歩は和蘭に於て爲されたので同國に於て鉛白の製造を始めたのは一千六百二十三年頃であるが同國に於ては炭酸の根源として糞を使用する代りに葡萄酒の滓と白堊とを酢に加へて之を發生せしめたのである、斯くて和蘭人は從來鉛白の大製産者であつたヴエニス人と競爭の位置に立ちて其製品の價格を低下する爲に之に僞和物を混加する事を始め二種の品物を市場に出す事になつた即ち其一はセリユサで他はブランド、プロムである前者なるセリユサは炭酸鉛に白堊を僞和したる物で後者は純粹なる製品である。

此時代に於て英國にても既に之を製造したる事は疑ひなけれ共其製法に至つては詳ならず多分ヴエニスの法か又は和蘭の法に依りしものならんが英國に於て最初の鉛白製造法の特許は一千六百二十二年に塗料用として鉛白と丹とを完全に製造する方法として許可されたものであつて其後此種の特許は實に多數に得られ居るので之によりて見れば他の事業よりも特に鉛白に向つて發明家の注意を惹いて居つた事が推知せられるのである然るに斯の如く多數の特許の中にて大多數は不成功に終つて居る原因の一は無意味に新規の考案をした點もあり又一は財政方面の後援を欠いだ點もあるが最大原因は需家其他之を使用する方面の者が只舊來の慣習に囚はれて新製品に信用を置かなかつた事である。

現況

現今世界中で主要なる鉛白製産國に於ける年産額は約二十七萬五千噸であつて其内譯は左の如くである。

北米合衆國	一二〇、〇〇〇噸
英吉利	五五、〇〇〇
獨逸	三六、五〇〇
佛蘭西	二二、〇〇〇
白耳義	一五、〇〇〇
露西亞	一四、〇〇〇
伊太利	四、五〇〇
和蘭	二、五〇〇
西班牙	二、五〇〇
加奈陀	二、五〇〇

又之を其製造法によりて別つ時は左の如くである

一、堆積法	一八〇、〇〇〇噸
二、室内法	四五、〇〇〇
三、其他の諸法	五〇、〇〇〇

現今鉛白製造法として行はれて居るものは頗る多數にあるが其内最も廣く實施されて居るのが二法あつて其他は種々雜

多であるから大別すれば三種とする事が出來る即ち、一、堆積法、二、室內法、三、以上二法以外の方法

(一)堆積法 (Stack Process)

現今實行せられて居る諸法中にて最も古きものは此堆積法であつて其製法の原則は二百餘年の昔より更に變りたる事なしと雖も實際の操作に於ては種々の點に於て變更し機械的化學的及び細菌學的見地より進歩改良したる處少なからずして最近の進歩したる物は曩日の物とは比較にならぬ位であつて北米合衆國に於ては此方法によりて製造する額は全產額の八十パルセントであつて英國に於ても七十パルセントである以て如何に盛大に行はれて居るかを推知する事が出來るのである。

此法に使用する鉛は最も純粹なる物を撰ぶので此鉛を其工場に於て特殊の形狀に鑄造するのであるが其主要の目的は瓦斯體が鉛の間を流通する事を自由ならしむると同時に鉛板が此等瓦斯體に作用せらるゝ面積を可及的大ならしむるのであるから特殊の形狀の板に特殊の孔を有する物を造るのである斯くて瓦斯體の作用を受けて腐蝕せられ易くなれる鉛板は蝕腐場即ち堆積に組立てるのであつて此堆積場は其四方を煉瓦壁に築造せる物で英國にて使用せらるゝ物は大抵十六呎に十三呎にて高さ二十呎位が普通であるが米國では二十呎に四十呎に高さ二十呎が通常である尙煉瓦を節約する爲に斯る物を幾箇も連接して築造して居るのである、新に築造したるものは其作用の具合を見る爲に其上に柔革に使用したる廢棄柏皮を二三呎の厚さに盛りて數日間時々掻き交ぜて置き適當に醱酵を始むるや否を見るのである、若し其作用に緩急の度を失する物あれば相當の手段を以て之を補正するのであつて、適度の醱酵を得る事は頗る肝要なる事である之れ其强弱如何によりて腐蝕の成績に良否を生ずるからである、四壁の內の牀上には醋酸を容れたる壺を一面に並列するのであるが唯四周の壁と壺の間には約九乃至十二吋の間隙を殘して置くので此間隙には柔革に使用したる柏皮を塡充するのである而して壺に容るゝ醋酸は水を以て稀釋して二乃至三パルセントの酸を含有するものとして容るゝのであつて米國では壺の代りに鉢形の物を用ひ其內部に小緣を造り鉛板を此小緣の上に架し鉢を充たすに至らしむるのである、之に反して英國にては壺を使用し壺上に鉛板を重ね置き三四段積むのであつて其上に板を並べて牀を造り最下の牀の如くに其上に壺を並列せしめ斯く壺と鉛板と牀板を重ぬる事數段にして遂には四壁內に充滿して天井に達するに至るのである、斯くて堆積物には相當の通風の道を設けて之を百乃至百三十日間置くのであるすると此間に醱酵を起して熱と炭酸とを發生するのであるが偖りに醱酵が旺盛であると熱が强くなり過ぎるから之を加減する爲に古くなつた柏皮をも混用して適當に其溫度を制限せなければならないのである而して發生せる熱の爲に水と醋酸が蒸發して蒸氣となり之に炭酸瓦斯が混合して鉛板に作用し鉛白を化生するのである然るに醱酵が强過ぎると溫度が高くなり過ぎて攝氏八十度にも昇る事があるが之は高過ぎるのであるから成る可く五十乃至六十度の間にある樣に加減せなければならぬのである。

鉛が充分腐蝕せられた時は之を堆積より取出すのであるが元の鉛は其大部分は變化して鉛白となつて居るのであつて腐蝕が良好に進みたる時は生成物は硬き磁

器に似たる物である然れ共通常の場合に於ては鉛は悉く腐蝕して居らず其七十乃至七十五ペルセントが變化して居る物で之は尙殘れる鉛に付着して居るから之を機械的に鉛より剝落せしめ尙醋酸鉛が付着して居る恐があるからよく洗淨し更に細粉して生ずる泥漿物は之を搾りて水を除去し最後に乾燥するのである。

此製造に於て肝要なる事は原料たる鉛の純粹なる物を使用する事であつて不純物を夾雜する鉛を使用すれば製品に欠點を生ずるので銀、銅、鐵及び蒼鉛は最も忌むべき物である、若し此等の金屬が交つて居れば製品の色を害するのみならず腐蝕作用にまでも惡影響を及ぼす物である

(二)室内法(Chamber Process)

此法は米國にては更に行はれて居らぬが專ら歐洲大陸に於て行はるゝ物で特に獨逸に於ては殆んど此法のみ行はれて居るのであるから一に獨逸法と云はるゝ位である抑も此法の發明はクリード氏が一千七百四十九年に得たる特許に次で米人バートンの一千八百五十八年の特許等なれ共眞に實際の發達は獨逸人の研究によりて成つた物であるから獨逸に於て廣く行はれて居るのである。

此法は前の堆積法によく似たる物であつて只其異なる所は鉛を腐蝕せしむるに急速にして且完全なる方法を採用せるにあるのである。

腐蝕を起すべき室即ちチエンバーは煉瓦を以て築造し其内部に設けたる横梁に鉛板の長き帶狀の物を掛け而して空氣と蒸汽と炭酸と醋酸の混合瓦斯を牀に設けたる送氣管より室内に供給するのである而して此等四瓦斯の割合及び温度等は其場合の要求に適合する樣に加減すべき物であつて一度適當なる具合が發見せられたならば之は頗る貴重な物であるが腐蝕の温度は約六十度で約五十日間で完結するのである、而して腐蝕が完結したる後に室を開く前に室内へ蒸汽を吹込みて室内の物を濕ほし製品を取出す際に粉末の飛散するのを豫防するのである。

此方法によりて製造したる鉛白は特徴があるので其色は全く純白であり又腐蝕は堆積法に於けるよりは多く進んで居る又生成物の容積も前法によりて得たる物より大なのである。

(三)雜　法

其一　ビショッフ法

此法の要點は(イ)金屬鉛を灰吹法によりて酸化鉛に變じ(ロ)之を水瓦斯を以て還元して黑色の下級酸化鉛となし(ハ)更に之を酸化加水して水酸化物となし最後に(ニ)此水酸化鉛を變化するに醋酸鉛を觸媒として水酸化炭酸鉛即ち鉛白となすのである此方法の特長は製品の成分を自由に左右し得る事であつて之は他法の追從し得ない所である。

其二　カーター法

此法は米國及びカナダに於て使用せられて好成績を擧げて居るのであるが其根本は堆積法の原則を利用して而も其能率を增進せんとするのであつて其實行法としては鉛を粒狀と成して之を鼓狀回轉機に入れ時々水と醋酸とを霧狀として鉛に掛け炭酸を含有する煙道瓦斯を其内に吹込むので之を六日間繼續して行ひ次に之を崩壞せしめて其固結を防ぎ次に又煙道瓦斯を吹込む事六日間繼續して依て成生したる物を尙殘留せる金屬狀の鉛と分離する爲に之を洗ひ別け次に搾りて水を去り乾燥するのである。

其三　ローリー法

上記の二法並に其他多くの方法は皆醋酸鉛を觸媒として使用するのであるが全く之を使用せない物もあるので此ローリー法の如きが夫であつて此法一にマイルド法とも云つて米國に於て行はれて居る物である卽ち其法によれば熔融せる鉛に蒸汽と空氣とを强く吹き掛けて之を極細末とするので斯くて出來たる黑き泥狀物は水と空氣の存在する所にて攪拌するので之に依て鉛は水酸化物となるのである次に之を水簸して金屬鉛と水酸化鉛とを分離し水酸化鉛は回轉式の炭酸化機に入れて其內に於て炭酸の爲に水酸化炭酸鉛即ち鉛白に變化せらるゝのである。

雲

雲が通る
磨かれた空の鏡面を
雲が流れる
一吹の灰色を吹き出したやうな雲が幾つも
星は見えない
雲が靜かに流れる
忽ち離れ落ちた一つの星が閃く
夜は冷たい
雲が靜に
空の上を這つて行く



明治前、中期の建築

明治大正に於ける建築觀（二）

增山新平

（內　容）

總　說……前號既出
明治前期……（第一期）
明治中期……（第二期）

（一）幕末の洋式建築。
（二）邦人工匠の過渡的建築。
（三）外人土木技師の建築。
（四）外人建築技師の建築。
（五）工部省營繕局の建築。
（六）工部大學造家科の卒業者。
（七）邦人技師の建築。
（八）外人技師再度の活躍。
（九）コンドル氏の功績。
（一〇）日本建築學課開講。

普通史は政治上の變革を以つて時代を區分するものなればその區分は明瞭にして劃然たるものなれども、美術史建築史の如きは思想の內面に潛める發現を見てはじめて區分の必要を生ずるものなれば、その始は微々として定め難く、漸く鮮明となり顯著なる事實として現はるゝ頃は既に新なる傾向を孕胎し始めて、もとの流派は徐々として力を失ひ漸次衰亡の道をたどるものなり故に其時期を區分すと雖もその始めと終りは甚だ明瞭を缺き漠然たるを免がれず。故に便宜上最盛期を中心として其の前後を區切り一括するものなり。

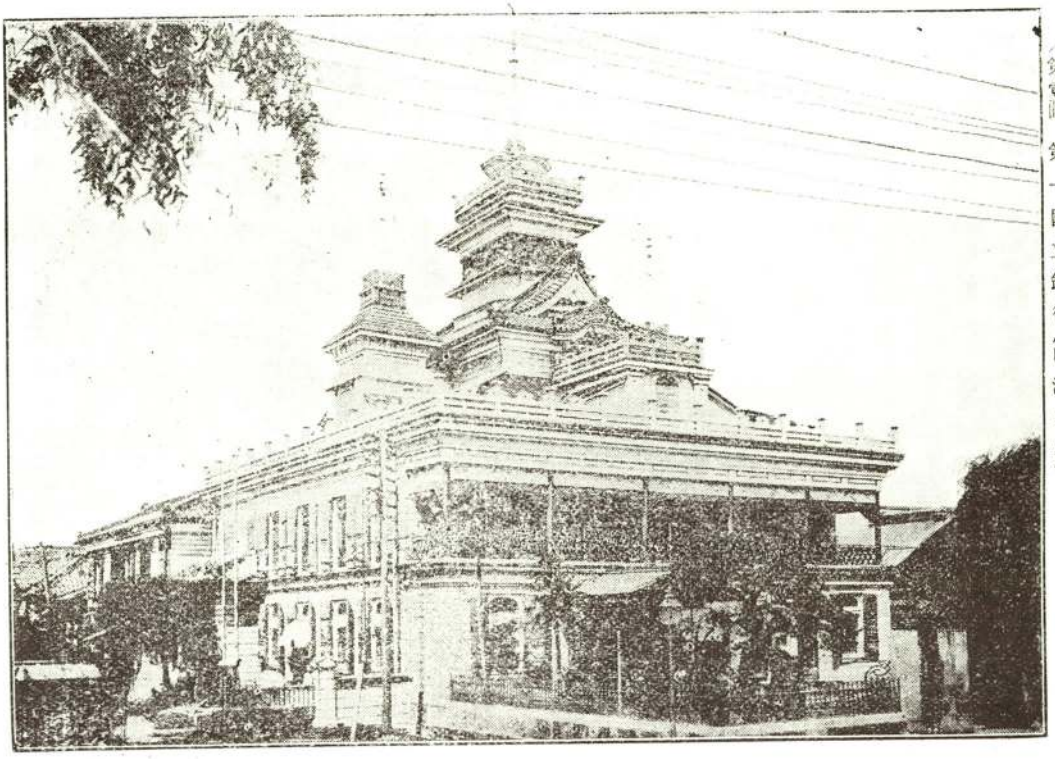
故に明治大正を五期に分つと雖も顯著なる事象を捉へて區分するものなれば區分の範圍內に性質の異なる二三の例外あることは避け難きことに屬す。即ち美術史建築史の年代の區分法が人によりて多少相違することは當然のことなり。

明治前期（第一期）（幕末に於て西洋建築移入せし頃より明治十八年工部省營繕局廢止迄）

維新の大業は我が國の政治思想の方面に一大變革を與へたることは今更論ずる必要もなき事なれども建築は政治界思想界の如く迅速に一變するものならず、六十年後の今日尙その變革の道程にありといふも妨げなからん。

（一）幕末の洋式建築

西洋建築の移入は既に幕末に於てその端を發し、文久二年



（第壹圖）第一國立銀行（明治四年）

幕府は辻内匠をして大工棟梁たらしめ、品川御殿山に本造の五箇國公使館を建てたるをはじめとして同三年には佛人ヒウレ氏により長崎天主堂の建築を見、次ぎに芝の田町に外國人接待所を建てたり。又その頃薩摩の島津家にては米國技師を雇入れ紡績工場を鹿兒島城下磯邸に切石を以つて建築せることは史家の唱ふる處なれども、その樣式の如何なるものなりしかは詳かならず。つゞきて慶應三年には大工棟領鈴木彌五兵衛に命じて芝の御濱御殿内に遠遊館を建て外賓の接待用にあてたるが幾何もなくして毀たれたり。

（二）邦人工匠の鵺的建築

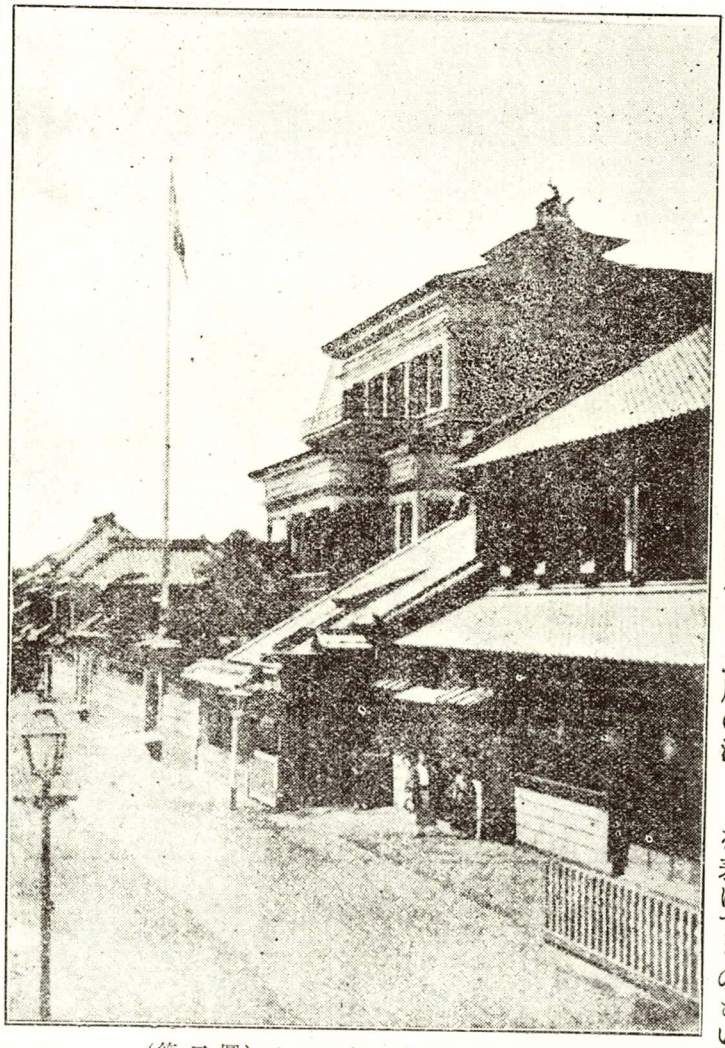
明治となりて最も興味ある建築は邦人大工棟領の建てたる西洋建築にて、全然獨自の工夫になりて和洋の混淆甚だしくその外觀の奇なること洋服に下駄をはき傘をさせるにも等しく後人呼びて鵺的建築といふ。

然れども一面その當事の事情を想ふて、これを見ればその努力と眞劍味の窺はれ一概に一笑に附し去るに忍びず。單なる傳統惰性の建築に因はれ、工夫改新の意氣なかりし幕末工匠の中にありて僅かなる見聞を基礎として新境地を開拓せんと勉めたる人ありしを喜ぶものなり。これらの多くは木造の塗家又は瓦張りのものにて稀に石材を混用せるものなり。次ぎにその實例の二三に就きて述べんに、

築地ホテル館。この建築は明治元年に落成せるものにて、建坪約七二〇坪の三階建にて、これに約百二十五坪の平屋建を附屬し、門と塀とは江戸時代の大名屋敷の如く純日本風にて、本館の窓と軒廻りは洋風を取入れその中央塔は異樣の形

をなし、その頂に方位を示す十字架と風位を示す弓矢形を附けたるなど不思議なる外觀を有す。明治五年燒失して今は二代廣重の錦繪に跡を止むるのみとなれり。

舊第一國立銀行。 明治四年に着手し六年竣工せる二層の洋館にして中央に高き塔を、左右に低き塔を設け、屋根の正面には千鳥破風と唐破風を附し、軒廻りは複雜なる繰形をつけて洋風化せるものなり、和洋折衷といふよりは寧ろ和洋混淆と稱すべきものなり。清水喜助氏の設計になり中期には既に毀たる(第一圖)



(第二圖) 三井銀行(明治六年)

舊三井銀行。 明治六年に東京日本橋駿河町に建つ。外壁に石材を混用せる土藏造なり。之を前記の第一國立銀行に比すれば和洋混淆の程度少きも、屋根に鯱を飾りたるは鵺の本性を表はすものといふべきか。(第二圖)

(三)外人土木技師の建築

上述の如く邦人工匠の活動に依り未熟なる洋式建築の出現を見たるも、これらはその數も少なく、その表現も内容も整はず暗黑界を低迷するに過ぎざりき。明治初期建築の中心をなすものは當時渡來せる外人技師の西洋建築なり。先づ外國土木技師來りて洋式建築の水先案内をなしつゞきて外國建築技師來りて活動を始む。前者は早くも明治三四年頃より七八年頃まで作品を遺し次ぎに來れる建築專門技師にその仕事を引繼げり。

土木技師のなせる最も特筆すべき事蹟は明治五年京橋以南の民家燒失せる際、時の政府は英斷を以つて新橋京橋間の兩側を洋風耐火建築に改造せんとして、英人オードルスの計劃により工費百八十萬九千圓を投じ、同五年三月工事を着手せる事なり。

此の建築は煉瓦造り二階建にて正面にタスカンオーダーを用ひたるコロニアル風のものにて、コロネードを道路に向けて作りたれば　雨天の際は傘を用ひず通れるものなりしと

ふ。而して又建築の大さに階級制を設け軒高三十尺乃至四十尺のものを一等家屋とし二十尺乃至三十尺のものを二等家屋と定め更に十二尺より二十尺のものを三等家屋とし、十二尺までのものを四等家屋と定め、規格を統一せり。銀座通のものを大さ殆ど一定し日報社のみは壇上に柱列を建て、他と異なるこの建築は我國人の趣味に適せざりしためか、時勢の進歩はその存在を許さゞりしためなるか、間もなく柱列は壁體に取込められ、土間は室内となり、かくして明治中期には早くも正面の意匠を改めて舊姿を失ひ高さに於ても大いさに於ても高低大小を生じたり。これらの建築は洋式耐火建築の嚆矢をなすものなれど煉瓦造木造小屋組なれば、震災後は全然破壊せられて輪廓をも知ること能はず。

次ぎにこられの土木技師の手になりたる建築の主なるものを擧ぐれば、

舊龍の口分析所。東京永樂町龍の口にありて明治三年の建築にかゝり同二十四年毀つ。赤煉瓦を以つて積み要所に石材を使用し建坪六十八坪餘りの單純なる小建築なり。

舊新橋及横濱停車場。明治五年竣工せる木骨石造の建築にて米人ブリンヂス氏の設計に成れる何等の裝飾なき素朴なる伊太利ルネサンスの建築にて明治初期建築の遺品として永く新橋驛頭に記念せられたるが、震災のため失ひたり。

英國大使館。東京麹町區半藏門外にあり、明治五年英人オールドル氏の設計に成り赤煉瓦平屋建の裝飾に乏しきゴシック風の建築なりしが、震災はこの建築をも大破せしめたり。この外主なるものをその年次に從ひて列記すれば、

大阪造幣局　明治四年
竹橋内近衛兵營　同　四年
工學寮博物館　（マクビン氏）　同　五年
露國大使館　（スメドレー氏）　同　七年
獨逸大使館　（レツカス氏）　同　十年
海軍生徒館　（ダイアツク氏）　同十四年

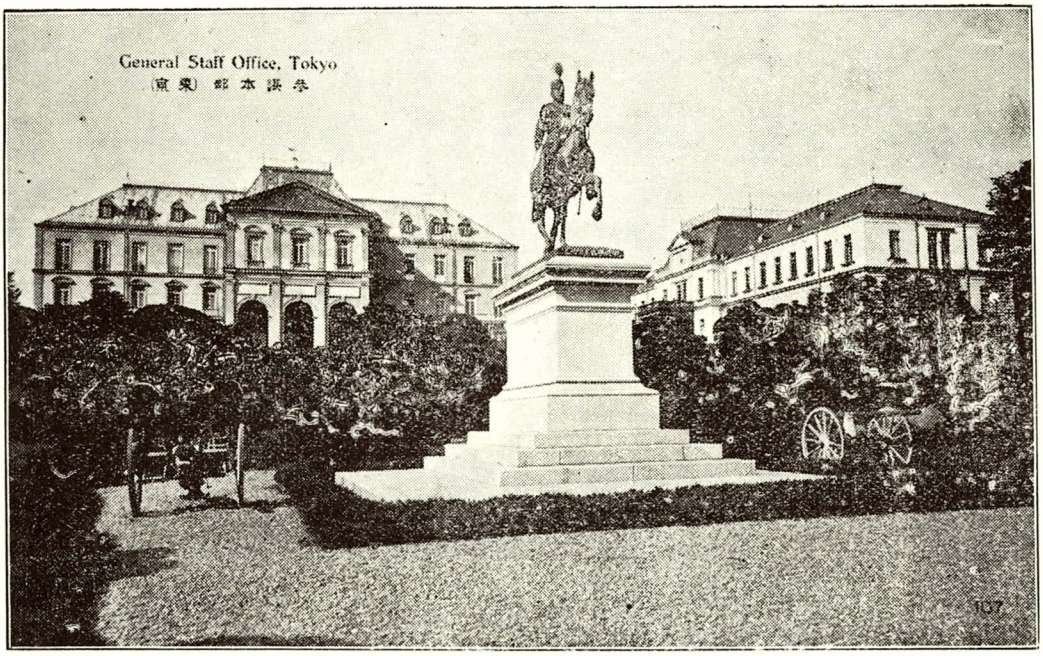
等なり。何れも土木家の手になりたれば様式も整はず、見るべき裝飾もなく、様式を定むることすら困難なる程單純素朴の小建築なりき。

（四）外人建築技師の建築

外人建築技師は明治七八年頃渡來し、土木技師より後れて來たれども、その手腕は忽ち振はれて、ルネサンス式となりゴシック式となり、ベネチャンゴシックとなり、械塞建築となりて多趣多様の作品を出せり。これらの建築家は英、佛、米、伊、諸邦の人々なれば、各々本國の氣風を表はし、各人各様の様式を發揮したるを以て、一時に唉ける春の花園にも譬ふべく、新進氣鋭の外國青年建築家は互に競うて東洋の島帝國に活躍し、遂に明治初期建築の中心をなすに至る。

次ぎにこれらの外人建築家の手に成れる建築物をあげてその主なるものゝ短評を試むれば、

工學寮の諸建築　佛人ボアンビル氏　自明治六年至同十年
大阪府廳舍　同　七年
紙幣寮（後の印刷局）　佛人ボアルビル氏　同　八年
參謀本部　伊人カルペチー氏　同　八年
外務省（後の京橋税務所）佛人ボアンビル氏　同十二年



（第三圖）參謀本部（明治八年）

訓育院　英人コンドル氏　同十三年

遊就館　佛人カルペチー氏　同十四年

東京博物館　英人コンドル氏　同十五年

開拓使館（後の某商業學校）　英人コンドル氏　同十六年

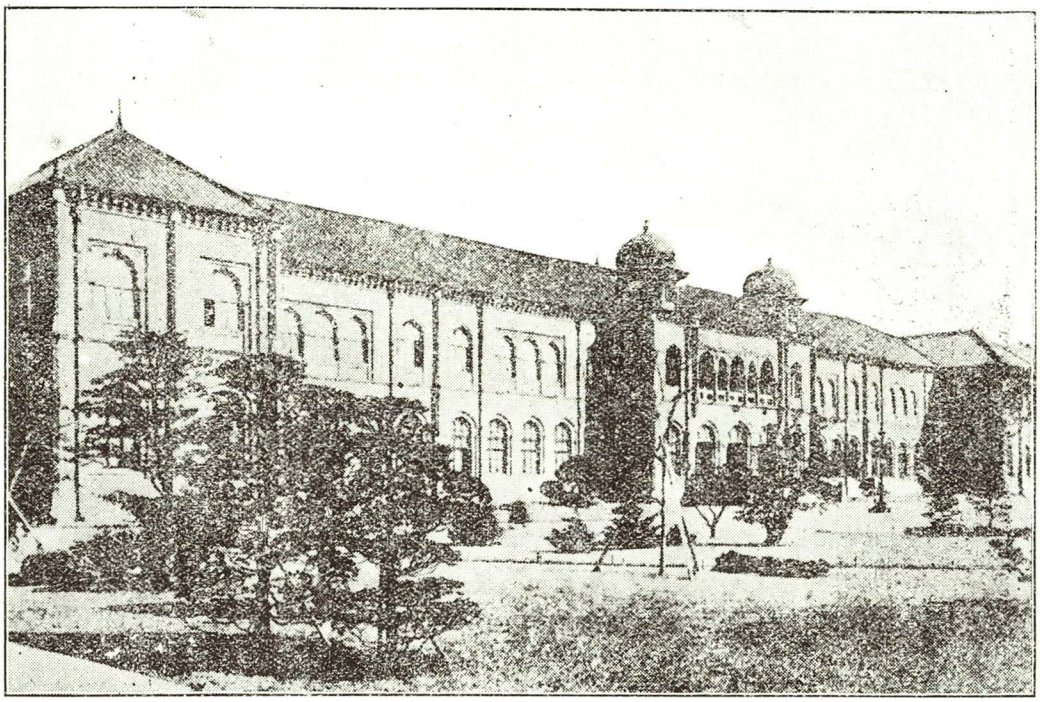
鹿鳴館（後の華族會館）　英人コンドル氏　同十六年

舊工部大學校、は東京虎の門内にある、工學寮にして、その工作場は明治六年八月に成り、本館は同十年八月復興式三層の煉瓦建大講堂を設け雙塔を左右として純洋式の建築なり。更に英人アンダーソン氏の設計に成る生徒館は赤煉瓦に石材を挾みてゴート式建築によりて建てられ、共に明治初期の建築界に異彩を放てるものなり。

印刷局本館。舊紙幣寮製造場と稱し、明治八年五月起工同九年十二月竣成せる煉瓦造二階建七百八十六坪の建築にして、ルネサンス式にて中央入口上に大なるペヂメントを置き内に菊花御紋章と折枝を配し、頂きに石造の鳳凰を戴せ、裝飾の題材を内地に求めたる洋館なりき。佛人ボアンヴイルの設計と傳へられ、工部省の手に成る建築なりしが、震災後は遂に其姿を滅せり。

參謀本部。伊太利人カペルチー氏の設計になり、煉瓦造二階建塗壁の復古式建築にて高臺に位置し、氣品優れたる各建築なりしが明治後期の修理に際し中央にペヂメントを設け舊觀を損ぜり。

遊就館舊館。明治十三年伊太利人カペルチー氏の設計になり、その樣式はミラン地方の城塞建築より暗示を得たるものにて煉瓦造に大理石を巧に配しその手法鮮かにして外觀の整ひたる佳作なりしが、震災に大破せしは惜むべし。



（第四圖）東京上野博物館（明治十一年）

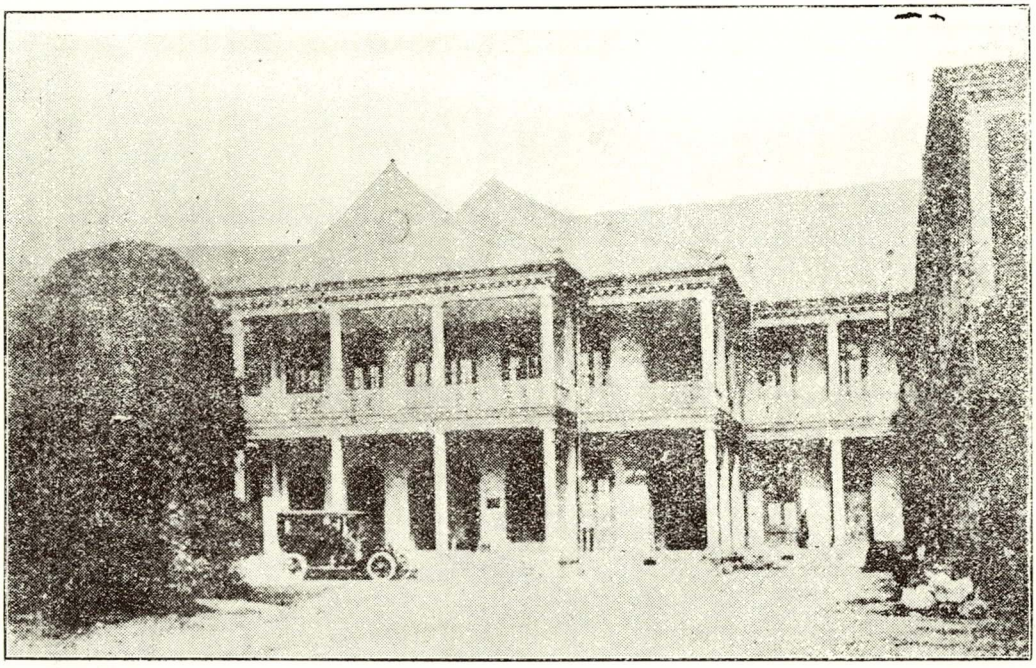
上野博物館。明治十一年四月より十五年四月に亘り建築せられたる煉瓦造二階建の大建築にして英人コンドル氏の設計になり印度回教式の表現をとり、その靜寂にして古雅なる風韻を存する外觀は當代の傑作として賞揚せられたるが、これ又震害甚だしく修理の手も及ばざるべし。

法文學部本館。これ又コンドル氏の設計になり工部省の施工せる建築にして、明治十三年三月起工、同十七年九月竣成の英國ゴシック式建築の優秀作と云はれ、前記の博物館よりも却つて之を推奨する人多し。

（五）工部省營繕局の建築

明治七年工部省に營繕局を置き、專ら官衙の造營を管掌せしめたるが、後には民間の洋式建築の設計監督をもなしたれば、明治初期の建築に貢獻する處多かりき。營繕局の技術者は雇傭の外國技師と西洋建築の工事に經驗を得たる邦人技師とより成り後には工部大學造家科の卒業者を以つて組織せられたり。而して重要なる建築の設計は外技師の手に握られ、邦人技術家は中以下の建築を計畫せるに止まる。

大熊喜邦博士の建築世界に發表せられたる明治建築史料によれば、工部省沿革報告の中、工部大學校の部に明治四年八月十四日工學寮及び測量司を置き其の廳舍を虎の門舊延岡藩邸に設け、又明治五年正月造營掛を置き英人アンダーソンを造家師となし、小學校及び生徒敎師館等を經始すと記錄されアンダーソン氏は明治七年四月廿五日より同八年三月廿一日まで工部省に招聘せられ、造家職工小頭を勤め、佛人ボアンビル氏は明治七年一月廿九日より同十四年三月八日まで雇傭



（第五圖）内務省（明治九年）

せられたるものにて、コンドル氏も明治九年より工部技術官とを兼任せられ先きに述べたる外人建築技師の建築はこれらの外人技師のなしたる建築も含まるゝものなり。

工部省の邦人技術家にして最も現はれたる人は林忠恕氏なり。次に工部省によりなされたる重なる建築をあぐれば、

神戸稅關役所……林　忠恕氏　設　計……明治七　年
横濱外人接待所……工　部　省　設　計……明治七　年
新橋驛遞寮……林　忠恕氏　設　計……同　七　年
元老院議事堂……工　部　省　設　計……同　八　年
内　務　省……工　部　省　設　計……同　九　年
元老院本廳……工　部　省　設　計……同　十一年
舊十五銀行……藤　本　氏　設　計……同　十五年
文　部　省……藤　本　氏　設　計……同　十六年

以上の建築は明治中期には既に毀はされ四五のものは最近までありしが、大震災にはそのすべてを失ひたり。

（六）工部大學造家科の卒業者

明治六年には早くも工部大學に造家學科を置き、明治九年には英人コンドル氏を聘して洋式建築の技術者養成の任に當らしむ、同十二年十一月第一回卒業生として辰野、片山、曾禰、佐立の四氏を出し、同十三年五月に藤本、渡邊の二氏、十四年に坂本、久留、小原の三氏、十五年に新家、鳥居、河合、中村の四氏を出し毎年數名の卒業者を出せるも明治初期にありては未だ經驗淺く獨立獨歩の域に至らず、その技倆を振ふまでに至らざりき。

斯くして當期は江戸時代より殘留せる工匠の時期も去り、外人土木技師の手腕もその跡を絶ち、專ら外人建築技師の跳梁に任せ



（第六圖）日本銀行本店（明治二十八年）

たる時代にして、これら外人の手により正式なる洋式建築の雛形を造りて吾人に示しながら第一期を終れるものなり。要するに當期は日本本來の建築より云へば暗黑時代にして、洋式攝取の明治建築より見ればその黎明期をなすものなり。

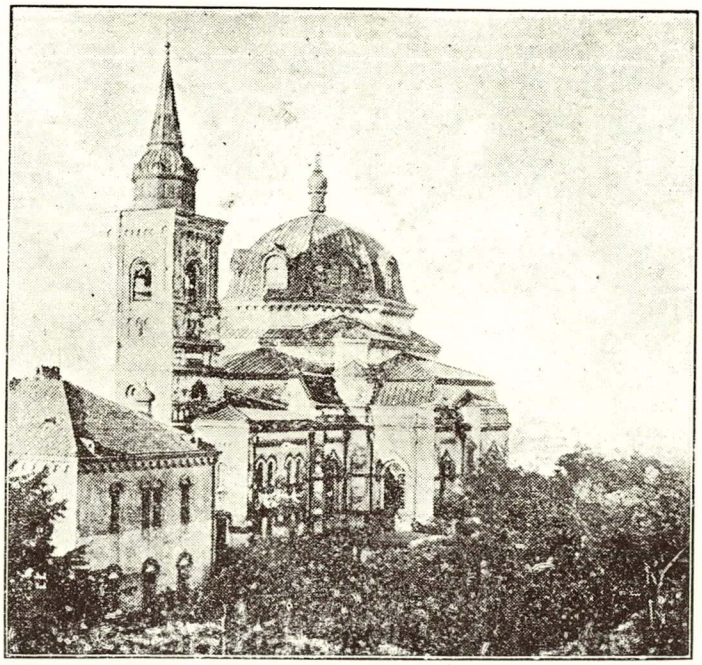
明治中期（第二期）（明治十八年工部省營繕局廢止より明治廿八年最初の鐵骨構造出現迄）

（一）邦人技師の建築

明治前期に於て工學部造家科に學びたるものは卒業後或るものは實地につきて經驗を得るに勉め或るものは歐米に遊びて實際を見聞し、正式なる技術を修得して歸朝しければ、最早外人の手を借る迄もなく大小の建築を獨力に完成し得る程度に達せるも、未だ充分に練熟されざる技術により造られたる建築は調子整はず生硬無味なるもの多く、漸く洋式の外觀をなすに過ぎざるなり。當時にありては洋風建築の模倣に全力を捧げたるものにて、如何にして眞の洋式建築を出現せしむべきかと心膽を碎ける時期なれば　その作品は不完全なる模倣にせよ無理解なる表現にせよ、極めて眞乎なる習作時代なりしなり。然れども中には傑出せる作品も勃々現はれ、辰野博士の日本銀行本店、同じく東京帝國大學工學部本館、片山博士の京都博物館等は本邦建築家の最初の誇りとして紀念さるべきものなり。次ぎに邦人建築家の手になる主なる建築を擧ぐれば、

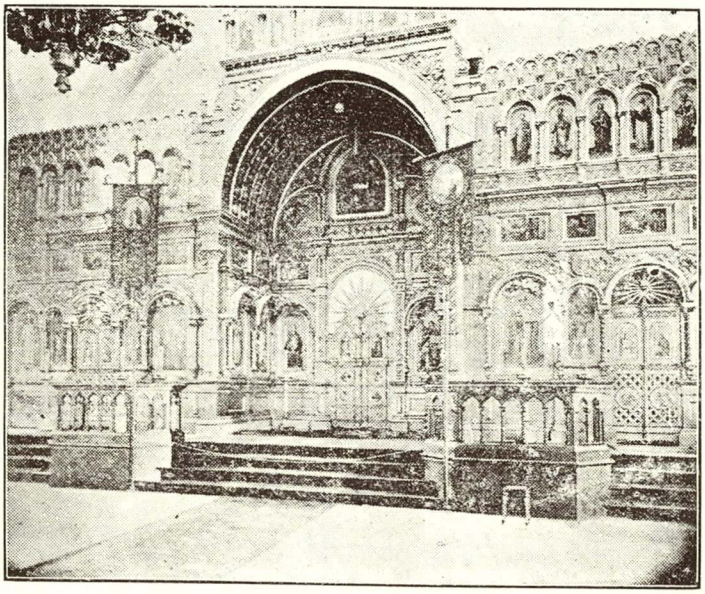
舊東京銀行集合所　（辰野博士設計）　明治十七年
華族女學校（新家博士設計四十五年燒失）　同　十七年
東京帝國大學理學部本館　（山口氏設計）　同　十八年

兜町澁澤事務所　（辰野博士設計）　同　二十年
皇　居　（片山博士等設計）　同二十一年
東京帝國大學工學部本館　（辰野博士設計）　同二十一年
帝國ホテル（チーゼ氏設計の基礎施工後渡邊氏設計）　同二十三年



東京帝室博物館參考館　（高山氏設計）　同二十三年
帝國議事堂　（吉井計氏設後燒失）　同二十三年
農商務省　（新家博士設計　同二十三年
帝國議事堂　（吉井氏設計）　同二十四年
鍋島侯爵邸　（坂本氏設計）　同二十五年

東京府廳　（妻木博士設計）　同二十六年
奈良帝室博物館　（片山博士設計）　同二十七年
日本銀行本店　（辰野博士設計）　同二十八年
明治生命保險株式會社　（コンドル氏）　同二十八年
京都帝室博物館　（片山博士設計）　同二十八年



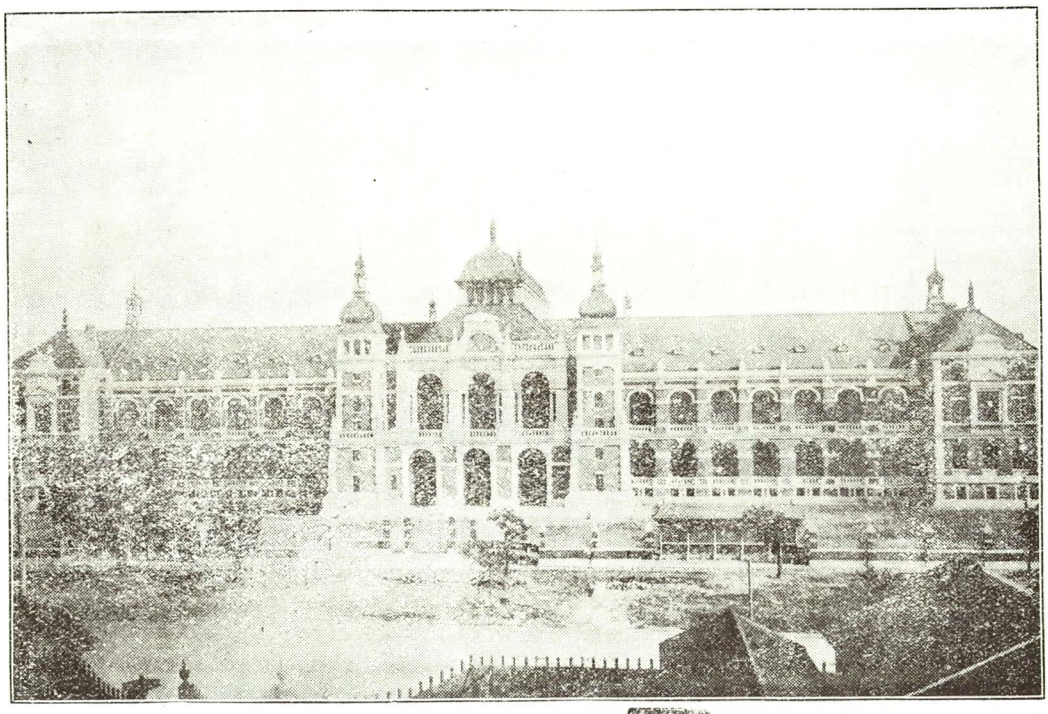
（第八圖）　ニコライ聖堂外觀及內部（明治二十四年）

八重洲町三菱建物一部（曾禰博士設計）同二十八年

東京帝國大學工學部本館は辰野博士の設計に成り、ゴジック煉瓦造二階建にして正面のペヂメントを挾みて圓塔二基を建て城塞建築を思はしめ中庭にはコロネードを廻らし異國情緒の鮮かなるものなり。

日本銀行本店。石造三階建の大建築にして堅實なる構法は莊重なる外觀を伴ひ繁雜に落入らず單調に失せず、中歐ルネサンスの型式をとる優秀の作なり。

東京府廳舍。妻木博士の設計に成る石材と煉瓦を以つて造られたる大建築にして、樣式は獨逸ルネサンス式なれども屋頂の小塔は小アジヤ風を帶びて調和を害せる點なきにあらず



（第七圖）大審院（明治二十九年）

帝國議事堂。臨時建築局の計畫に企てられ始め獨逸建築家エンデ及びベックマン兩氏により設計せられたるが經費の關係上實施に至らずして假建築をなすことゝなり。吉井氏の設計により明治二十三年木造二階建の建築を竣工せしめたるも直ちに燒失し、再び工を起し翌年竣工せるもの現今の假議院なり。其後明治三十二年に議建築調査會を設け、更に同四十二年にも調査をなしたるも、成案を得ずして止みたるが、大正八年設計を懸賞競技に公募し、翌年工費二千萬圓を以つて大正二十年完成の豫定を以つて工事を實施せり。然るにこの假建築は大正十二年の震災をまぬがれたりしも本年九月再び燒失して烏有に歸す、

以上の實例に示すが如く、辰野博士は歐洲より歸朝後第二期建築界の雄として實地界に貢獻せられたる外、工部大學に教鞭をとり後進の養成に盡され、第三期に入りては職を辭し建築事務所を開き幾多の大建築を完成せられたれば、明治建築界は博士に負ふ處甚だ大なりとす。

(二)外人技師再度の活躍

明治十八年工部省廢止せらるゝや十ケ年の間管理せる建築事務を内務省に移し、翌十九年政府は臨時建築局を設置し、大々的に諸官衙造營計畫をたて、先づ獨逸建築技師エンデ及びベックマン、二氏を招聘し更に十數名の獨人を招きて諸官衙造營の一切を委任せり、更らに多數の邦人を獨逸國に留學せしめ建築術の實際を習得せしめたるを以つて再び外人技師の活躍する處となり、司法省大審院の如き大建築を完成し、一方英人コンドル氏の手により海軍省及びニコライ會堂の二

大建築を出現せしめたるを以つてこれらは群小建築物の上に聳立し帝都の美觀を加へたり。

始め政府の計畫は日比谷に中央公園を設け、大路を縱橫に開き、司法省、大審院、海軍省、議院及びその他の官衙を建て大規模の都心計畫を施す豫定なりしが、經費の關係上司法省大審院海軍省の三建築の完成を以つて臨時建築局を廢止せり。

以上の四建築は何れも外人の手になるとは云へ、本邦に於ける最大の官衙たるのみならず、樣式の明快なる點に於ても明治建築史上の顯著なる事實なれば次ぎにこれの建築につき略說せんとす。

司法省。煉瓦造に石材を配したる三層の大建築にして獨人エンデ及びベックマン兩氏の設計に係り、河合浩藏氏主任技師として工事を進め、明治二十八年竣成せるものなり。

大審院。獨人エンデ及ベックマン氏二氏の設計になる煉瓦及石造の三層の大建築にして、妻木賴黃氏を主任技師として明治廿九年竣成す。樣式は司法省と共に獨逸ルネサンス式により。壯重雄大の風姿は海軍省と並て偉大なる建築群をなす、

ニコライ會堂は露國より送り來れる圖案に基き、コンドル氏の潤色を加へたる設計にして、明治二十四年、竣工す駿河臺の岳上に建てられ、露國ビサンテン式の堂々たる建築にして、雄大なるドームと丁々たる尖塔は好調和を奏し四隣を厭せしが震災のため大破する處となり。優れたる細部手法も內裝飾も共に瓦解し今は廢墟の姿傷し。

(三)コンドル氏の功績

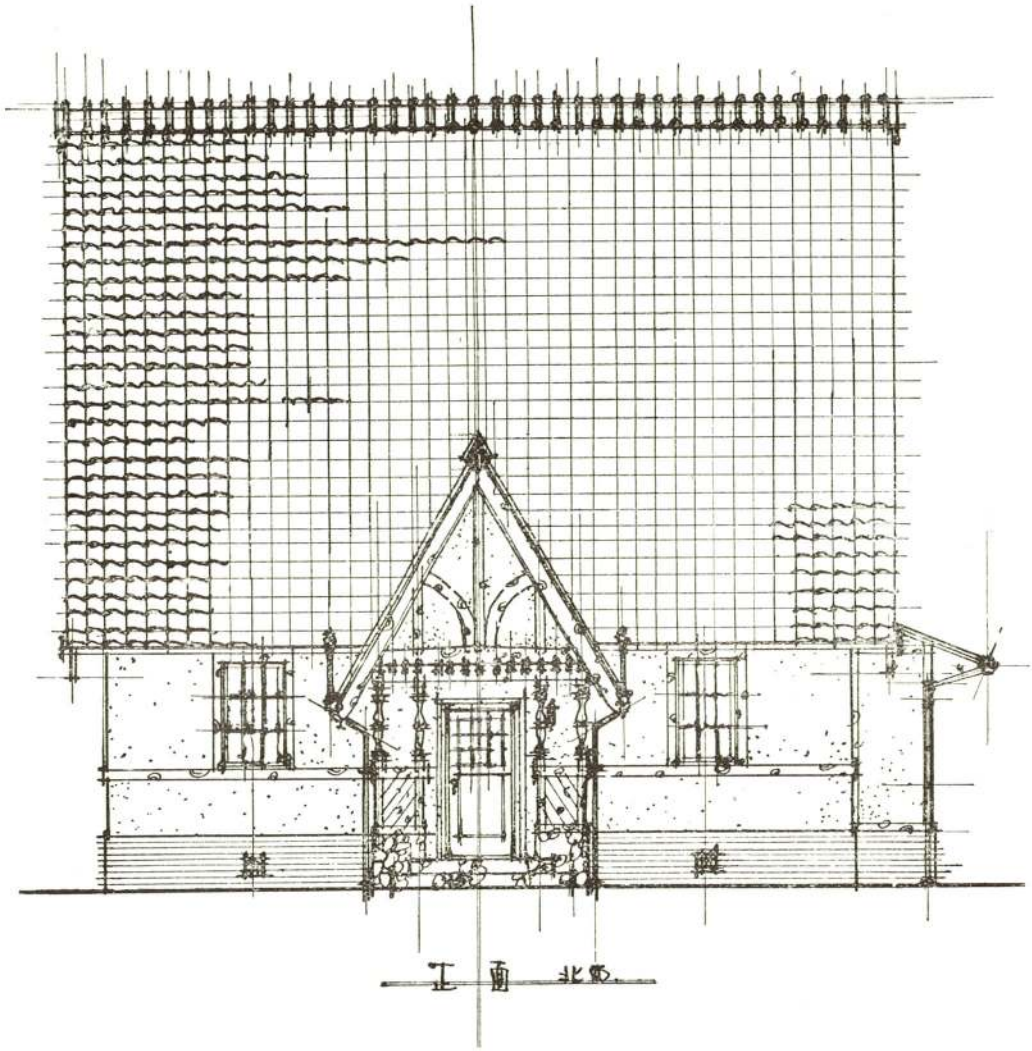
英人コンゴル氏は上記せる如く工部大學に教鞭をとり、我國技術家の養成に勉め、建築學科の基礎を築き上げたる外、實地界にありては帝室博物館及び法文學部本館等の傑作を完成し、更に第一期二期三期に亘りて幾多の建築物を建て範を示されたれば我國青年建築家を啓發せられたること甚だ大にして建築界の慈父とも稱すべし而して氏の溫厚にして堅實なる人格と、その優秀なる作品とに陶冶せられたる青年建築家は第一期には働きを示すまでに至らざりしとはいへ、第二期活動の源泉を作れるものなり。

(四)日本建築學課開講

二千有餘年造楯式の建築を以つて一貫し來りたる本邦建築界は一度海門の鎖鑰を解くや歐洲の建築術に心醉し、暫く我が國固有の建築あるを忘れたるの有樣なりしが、國粹保存の主張は漸く世人の注意に上り、工部大學造家學科の教課に、日本建築構造學を加ふる事となり、明治二十三年頃、故木子清敬氏を聘して講座を開きたり。二十五年卒業の伊東忠太博士は卒業後日本古建築の研究に專心せられ、二十六年卒業の塚本靖博士、二十七年卒業の關野貞博士の熱烈なる研鑽は日本古建築の上に燦然たる光明を齎らし過去千五百有餘年の古建築の年代を明かにしその系統を正し、その精髓を究めて發表せられたれば、久しく歐米模倣にのみに囚はれたる建築界をして覺醒の第一步を踏む動機を作られたるにも等しく、次期に於ては更に新境地を開かんとする重要なる鍵となれるものなり。これと相俟つてこの期に於ては日本風の公共建築も起り寺院の復古さるゝものも現れたり。即ち

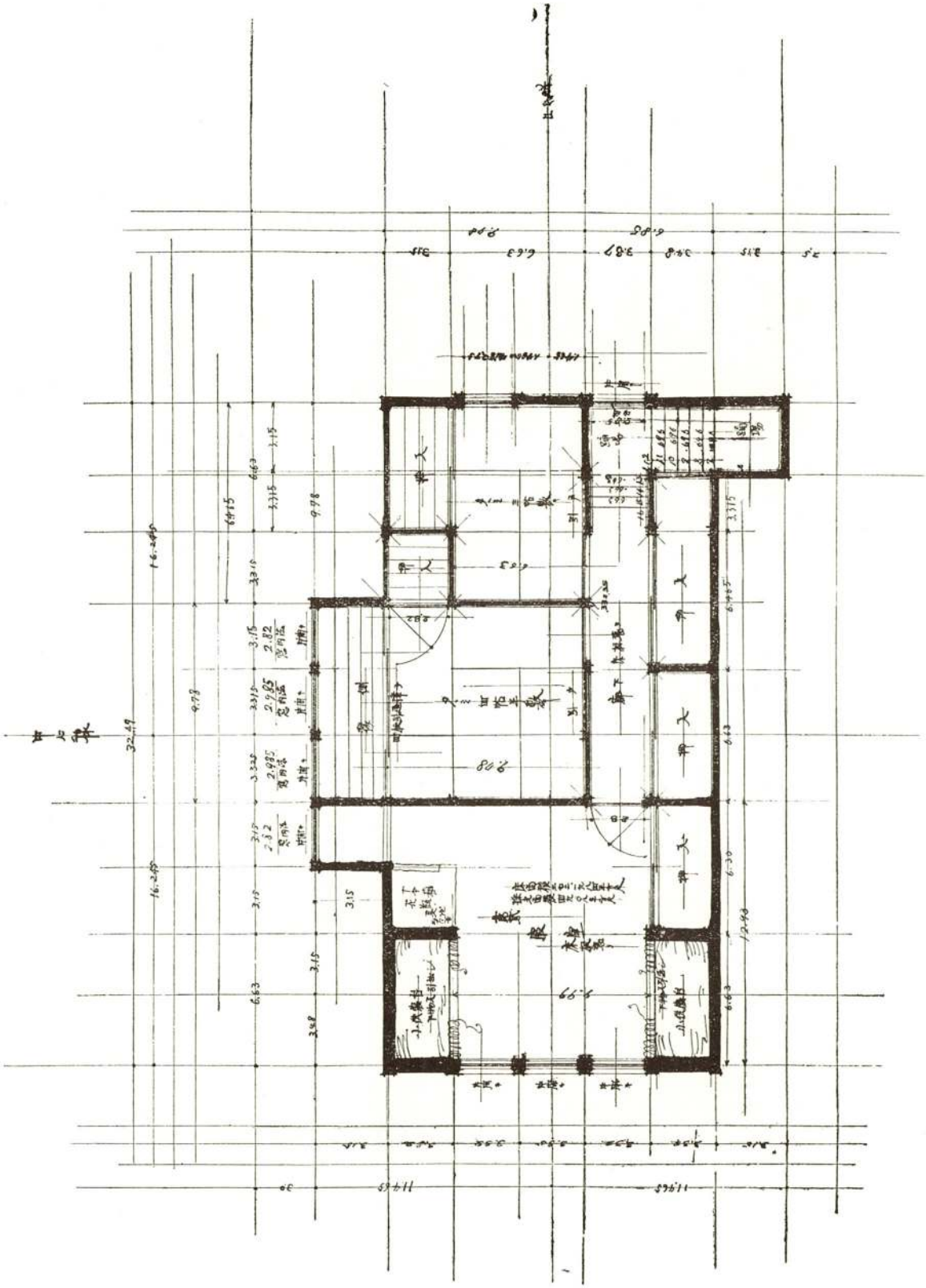
奈良縣廳舍　長野宇平治　明治二十八年
京都大極殿　伊東、木子兩氏　同　二十八年

この內東本願寺のみは江戶時代よりの傳統を繰返せるに過ざれども、大極殿は古建築研究の結果として生れ、奈良縣廳舍は日本建築を公共建築に適用せる好範例なり。(未完)

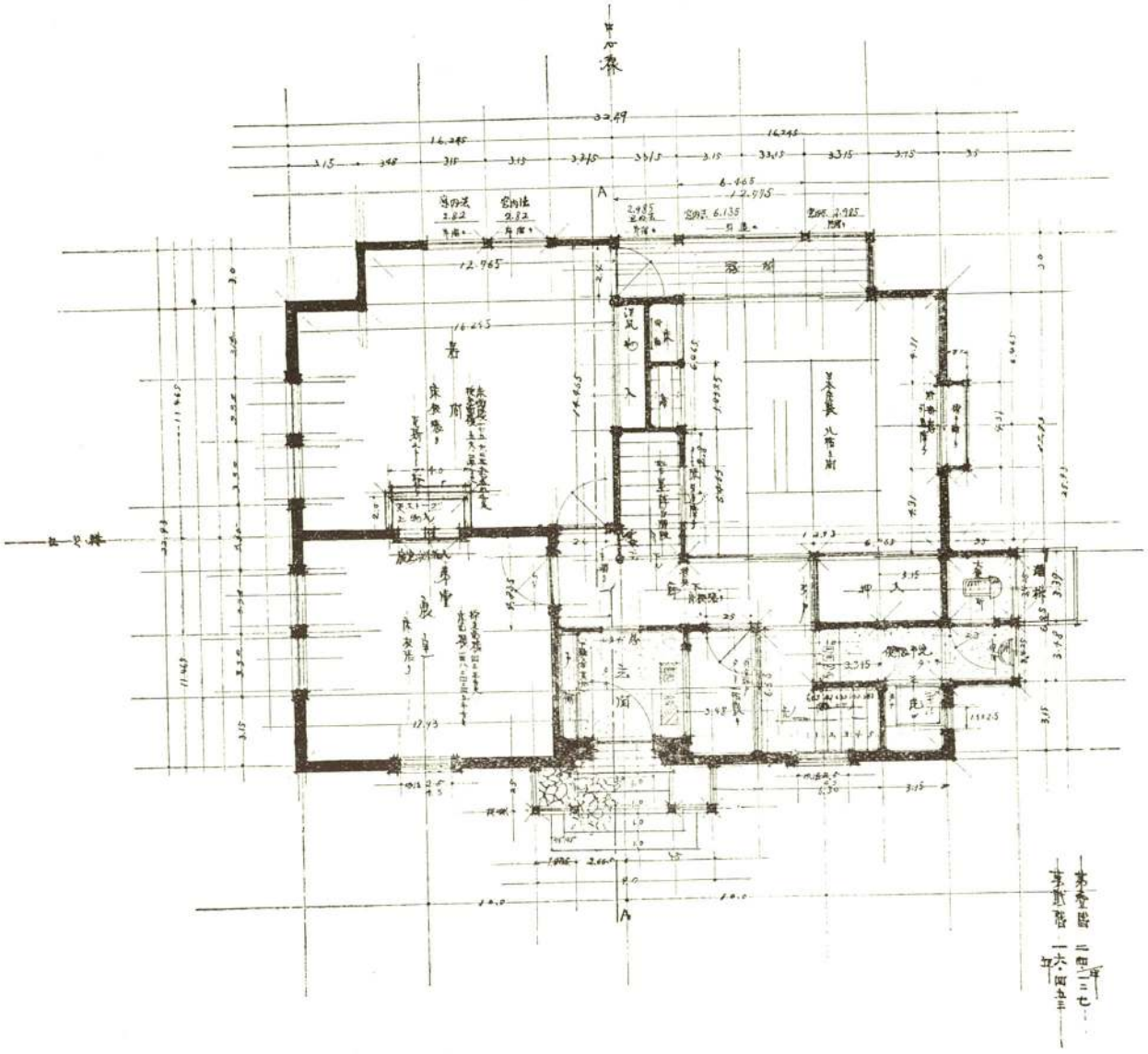


案　私　宅　住

□ —— □

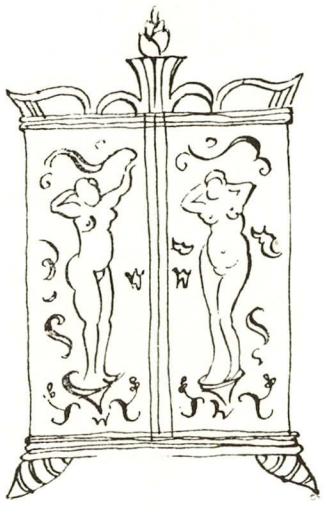


□一の2——階下□　　案私宅住



案　私　宅　住

□　一の3　——　階上　□



國寶「一乘寺」

＝兵庫縣下の古建築(五)＝

菅田登美雄

第五節　一乘寺

第一　概說

一、位置　兵庫縣加西郡下里村阪本

山陽線加古川驛より私設播丹鐵道に乘換へて北し粟生を過ぎ法華口停車場で下車するこゝから、法華山一乘寺までは約一半里、道路平坦で一時間もあれば達し得る、法華口驛からは人力車の便はあるが乘合自働車はない、神戸市からなれば法華口まで行くに約三時間もあれば行けよう、この播丹鐵道の汽車の時間をうまく利用しさへすれば、

參考地圖　參謀本部二萬分ノ一、北條參照

二、歷史的研究

當一乘寺所藏にかゝる緣起に依ると

『夫れ法華山一乘寺は法道仙人草創の勝地孝德天皇勅願の官刹也』

と初めに出て居る、

『大化五年五月天皇御不豫乃ち阿倍倉に宣して仙人を召し加護せしむ……中略……此年勅め金堂（今の本堂即大悲閣なり）を建て持する所の像鉢舍利を安じ白雉元年九月落成天皇臨幸法華山一乘寺の勅額を賜ひ道慈律師を以て供養し……』

即本堂の創建は白雉元年とある、

『仙人山に居る事數十年塔廟鐘樓經藏等梵閣甍を並べ蘭若經を開けり……』

『靈龜二年行基菩薩其の德を慕ひ來り此山に住し』

『天長三年弘法大師其の跡を尋ねて入り此淺に居れり』

『永延二年花山法皇西國三十三所巡禮の時第二十六番の札所にして

春は花夏は橘秋は菊
　何時も妙なる法の花山

と御詠あり』

『正和五年御醍醐天皇勅願を以て石塔を建て住侶宇都宮長老に勅して二階九間の講堂を作り正中二年落成し……』

『大永三年山名氏の兵燹に罹り堂宇を烏有し……』

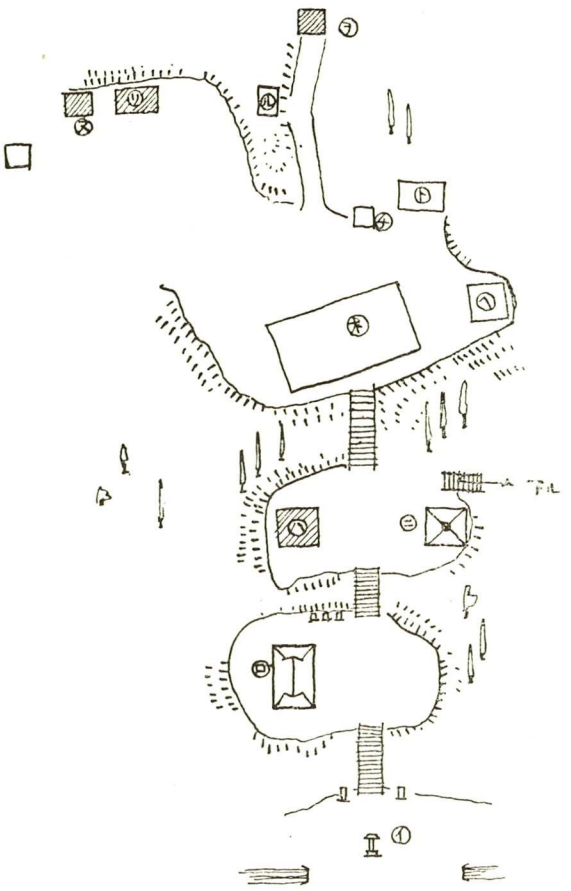
『永祿五年地藏院永嚴赤松義祐の助力を得て復舊し……』

『元和三年本堂鐘樓池魚の災あり』

『寬永五年本多忠政再建せらる』

『明治卅四年本尊始め二軀、高僧畫像十幅を國寶に、三重の塔を國寶に指定

『明治四十五年毘沙門堂、妙見堂、辨天堂を特別保護建造物に指定せられ。』



『明治四十一年又國寶の指定あり…』

三、現在一乗寺大體伽藍の配置ニ就いて

歴史的研究の所で述べた様に昔しは盛大であつた當一乗寺も現在では見取圖に示す様な有様となつて居る、即、先づ二十七番書寫山圓教寺に通じて居る道を別れ右すれば、第一に正面に古色の石塔婆がある長い石段を登れば、第一の踊場とも云ふべき廣場に常行堂がある建物は新しく、大したものではないと思ふ、次に第二の石段を登ると、左に三重塔、右に經藏がある廣場に達する、更に登れば正面に九間八面の本堂あり、右に鐘楼がある密教式の特長を遺憾なく發揮して居る所は又面白い、破損はして居るは鐘楼は見る價値があると思ふ、自分は此の鐘楼について特に研究したわけではないが、圓教寺の鐘楼と比較して劣らないと思ふ、本堂の裏に社務所、手水舎少しくはなれて妙見堂、辨天堂、手水舎の横から上れば、一段高い所にある寶藏、次に毘沙門堂に達する、奥の院はこゝから數丁の奥にある。

此の附近地質多分銅分を含んで居り且つては銅の採掘をやりかけたが經濟的

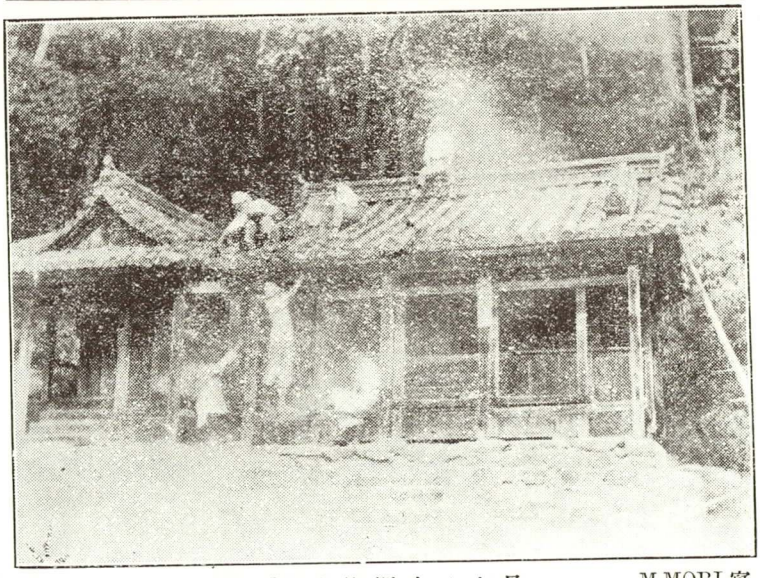
に行かなかつた爲中止したとの事、名殘を止むる孔道は今も尙そのまゝにある。

以上で明の如く當法華山一乘寺の創建又古く其の沿革又甚た曲折して居る事がわかるだろう。

第二　一乘寺塔婆

構造形式　三重塔婆方三間三層塔婆屋根本瓦葺





今夏妙見堂實測中ノ光景　M.MORI.寫

建立年代　室町時代

指定年代　明治三十四年三月二十七日

一乘寺の正面長い第一番の石段を上り次に本堂に上る石階との中繼の廣場の左手に建つて居る、

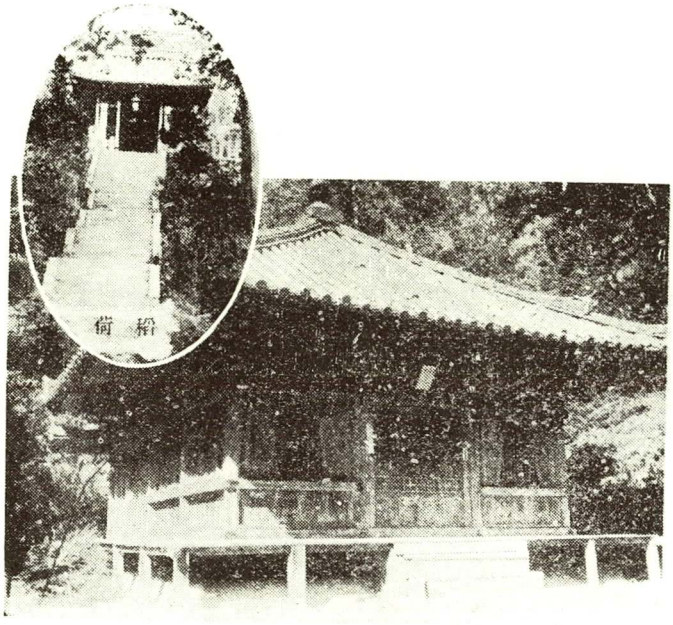
プラン――三間三面で三重の塔であるが各層は共に中央間に板唐戸、兩脇間には欞子窓を開いて居り繞らすに比較的丈の低い高欄ある廻椽を以てして居る。

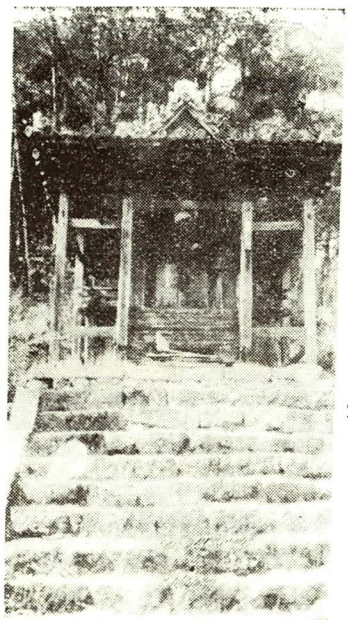
エレベーション――屋根各層共本瓦葺で如何にも重たさうな相輪を戴き、軒は二重繁棰で軒端の反轉は甚だしくて、其の爲建物全體に大いに輕快の感を與へる、其の低平な石段上に立つて居ること、及初層と二層との間隔があまり差があつて初層があまり高過ぎる樣だが其の屋根の流れの緩かな事と軒端の大なる反轉及び屋上相輪の莊重なることは如何にも好く安定の感を起さしめると思ふ。

斗拱――支輪ある三手先（尾棰も具備して居る）詰組で中備には初層二層には本蟇股を置き各層には繞らすに高欄を以てし、これを三斗つが受けて居る。

內部――下層天井は小組格天井で四天柱圓折上格天井とし、壇を作り塔本尊を安置して居る。で木割は一般に雄大な氣分があると思ふ。

當塔婆は前述の如くに初會と二層との





第四十三圖　一乘寺毘沙門堂

間隔あまり高過るが、前に述べた理由で大いに安定の味を與へる好建築物と自分は思ふ其の細部は室町時代の手法の形式があるが蟇股だけは少々違つては居ないだろうからと思ふ

要するに本塔婆は屋棰、支輪、小天井を備へ、甚だ完備した室町時代の塔婆であると思ふ。

第三　一乘寺毘沙門堂

（一名護法堂）

構造形式　一間社春日造屋根本瓦葺

建立年代　鎌倉時代？

指定年代　大正二年四月十四日

護法堂とも稱し本堂の北側（背面）數段の石階を登て達し得る高所にあり、南面する。

一見して明かである樣に此の堂は何ら佛寺建築の意味を含んで居らずむしろ神社建築に屬すべきものである、で寺傳にも其の沿革は不詳ではあるが恐らくは鎭守の祠に相當する建築であつたのを後世寺に附屬物として入れ其の名も護法堂なんかと、改めたものではなかろうかと思ふ。

プラン――は一間社春日造の本、護法堂は前面に板唐戸を立て柱、總圓柱、前側の三面のみ繞らすに廻緣を以てして居る。

斗拱は實肘木を施せる三斗と組み中備の蟇股は甚だ面白いものと思ふ細部――棰はやや纖細と思ふ位である、而して

一、妻部大瓶束を（虹梁上に）置き棟を受け居ること、

二、向拜を連結する爲に一種の蝦虹梁をを用ひて居ること、

等其の他の手法からして唐樣なることがわかる。

本護法堂の建立年代は前に述べた通り確實ではないが鎌倉時代の建立と一般に思はれて居る樣だ。

第四　一乘寺妙見堂

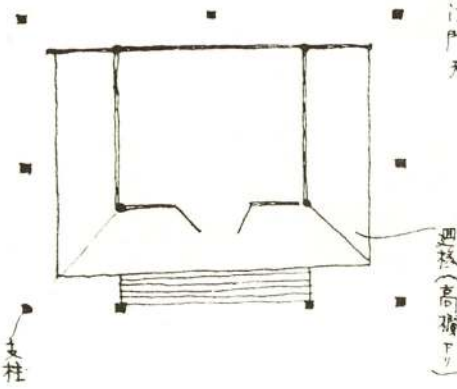
構造形式　三間社流造屋根本瓦葺

建立年代　鎌倉時代？

指定年月　大正二年四月十四日

本妙見堂は辨天堂と共に本堂背面に南面して居る、

屋根本瓦葺で軒には比較的雄大な



椎を分布し出三斗を組み隅には鬼斗を使用する。

其の細部

一、頭貫の末端には唐様の手法の繪様、彫刻のあること

二、向拝柱を繋ぐ虹梁には袖切眉形のあること

三、且つ(二)の虹梁の末端は柱を突出して繪様・彫刻をなし柱頭の斗拱を受けて居る。

四、所々に和様の手法も認められるで平面周圍に繞らすに廻縁を以てし高欄を附けて居るが其の屋根の重量を支へる爲に軒端に建てた支柱は見て其のプロポーションを害する事甚大であり甚だ遺憾に思ふ。

第五　一乘寺　辨天堂

構造形式　一間社春日造屋根本瓦葺

建立年代　鎌倉時代？

指定年月　大正二年四月十四日

本堂は妙見と相竝び一乘寺本堂の背面に在り南面して居る、一間社春日造で屋根本瓦葺軒椎や繊細で前述の護法堂と殆んど構造形式同じだ、誰、相異なる點は

辨天堂の護法堂との相異なる點

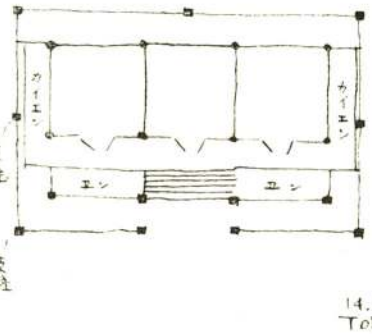
一、虹梁末端の繪様彫刻の異なること

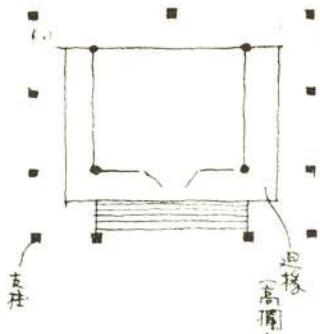
二、辨天堂の方の廻縁には高欄が無いが護法堂にはあること

等がある、今其の相似たる點を



第四十四圖　妙見堂と辨天堂



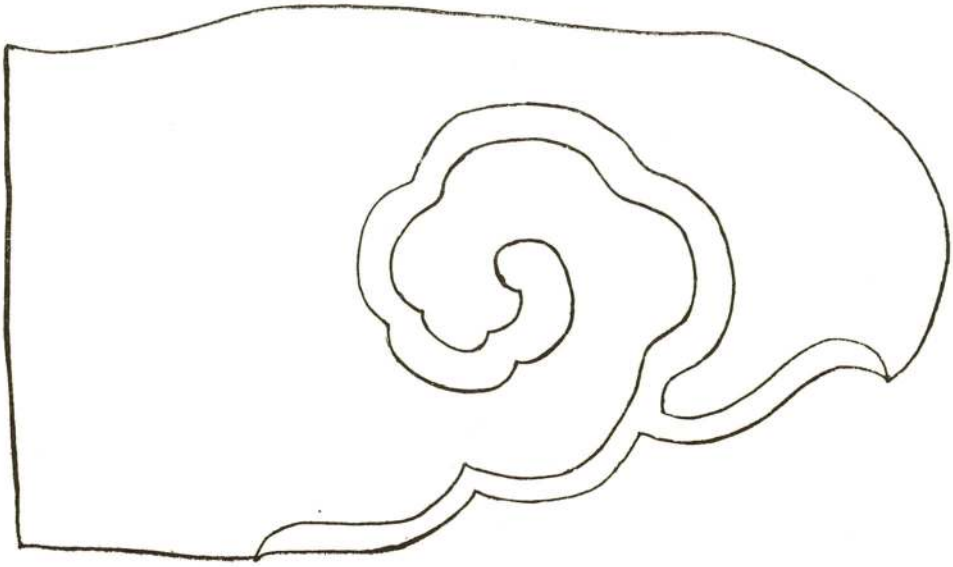


で支柱の附加は共に其のプロポーションを害すること甚だしい、

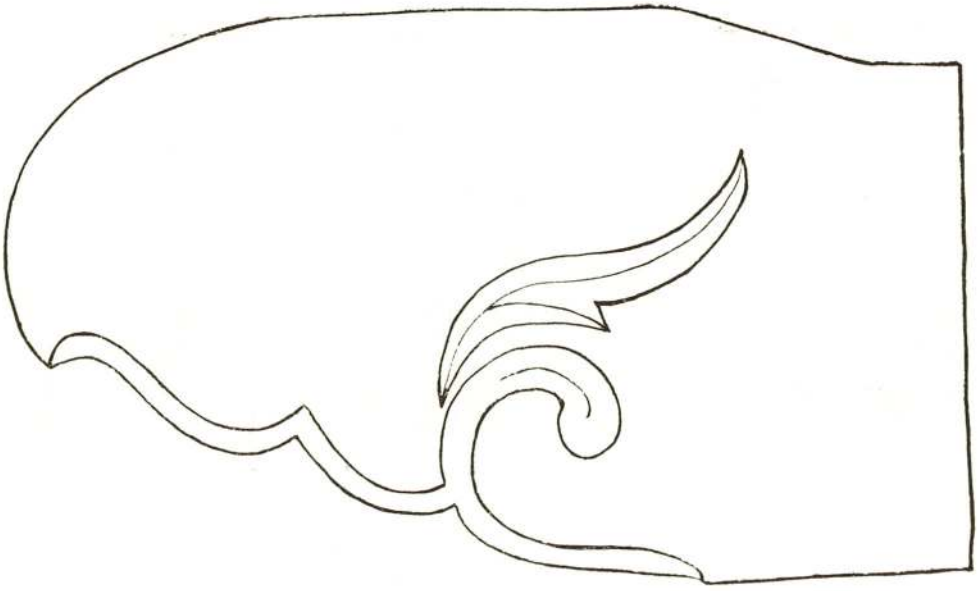
思ふに本堂、竝びに妙見堂、護法堂の三建築は元は檜皮葺の柿板葺であつたものを後世瓦葺に葺き代へた爲に屋根の大な自重に耐へ兼ねて終に支柱を用ひねばならない樣な始末に成つたものと思はれる、でこの五建築は共に鎌倉時代の建立と一般に認められて居る樣だ。

第六　一乘寺本堂

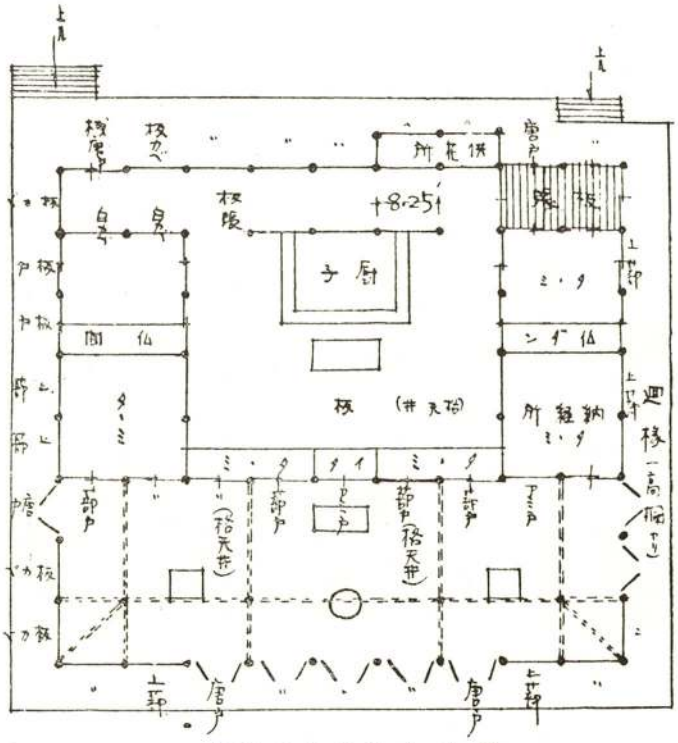
構造形式　九間八面單層屋根入母屋造　木瓦葺



（第四十五圖）　一乘寺　妙見堂



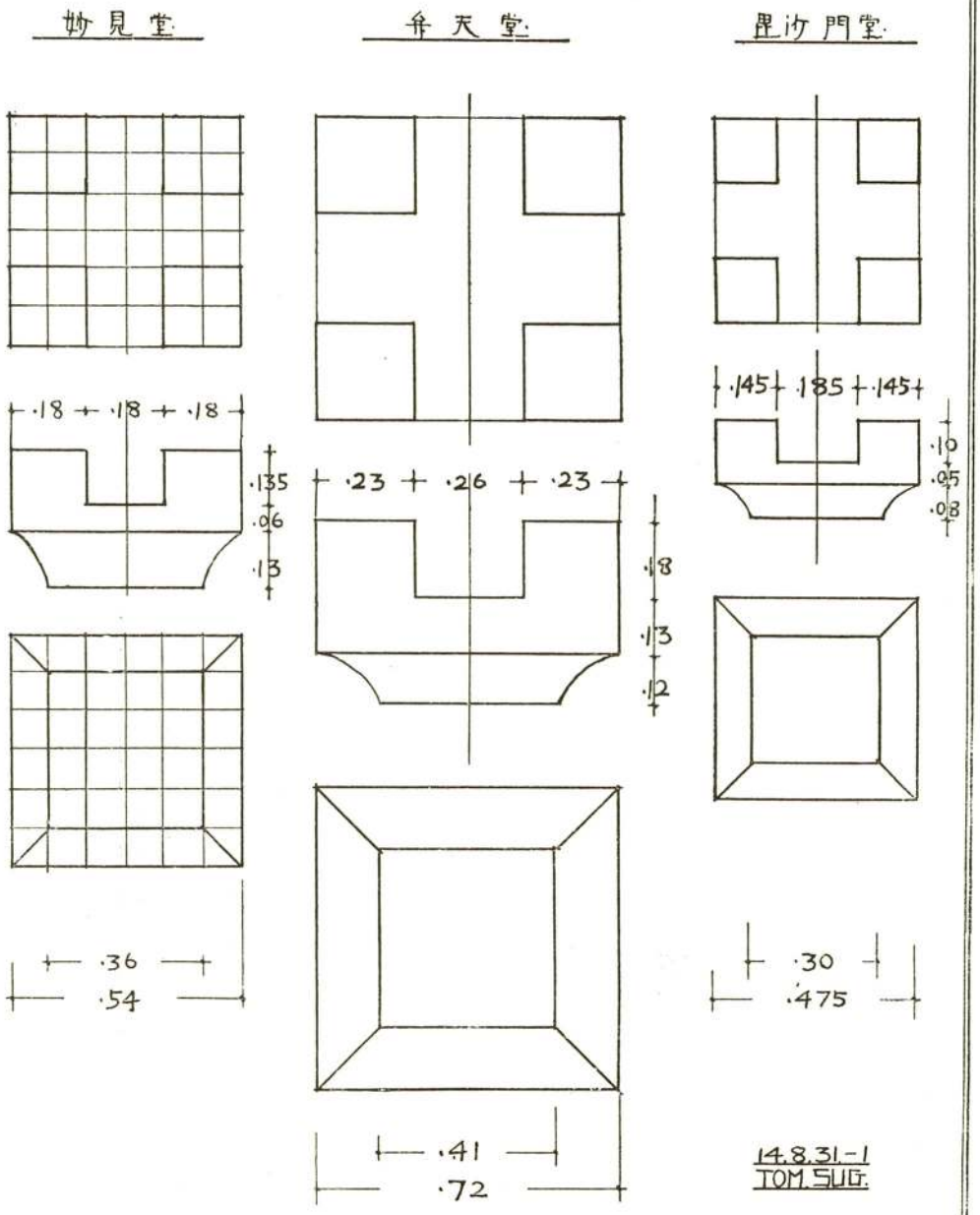
一乗寺好見雲（第四十六圖）

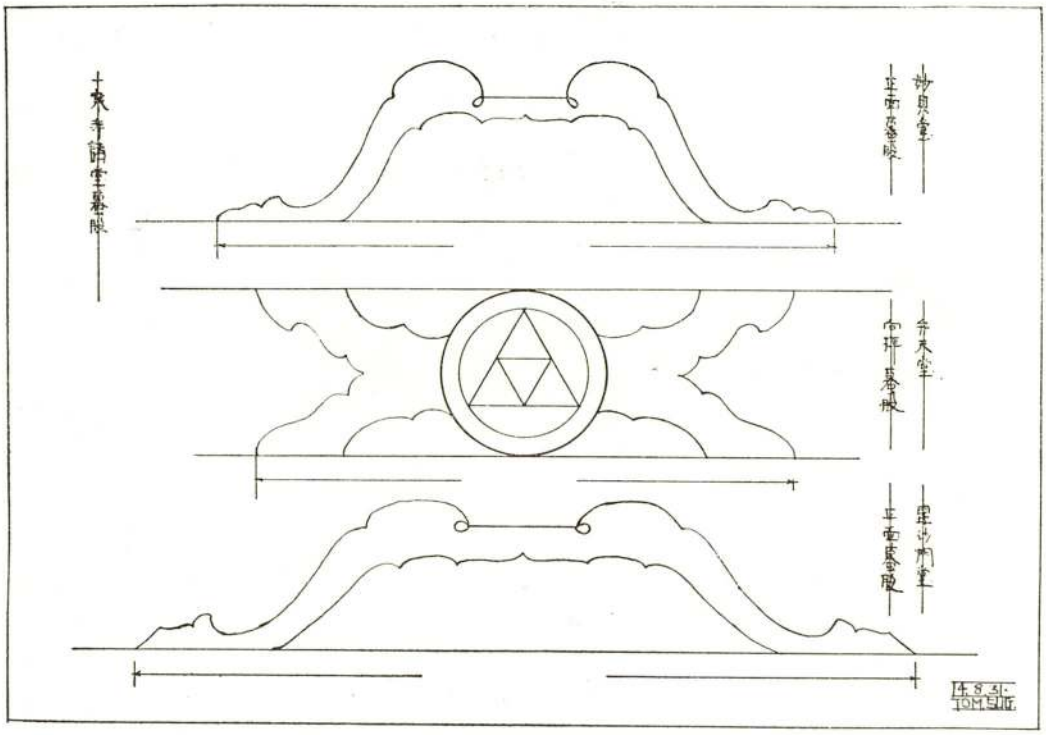


一乗寺本堂平面見取図

薬師寺諸堂大斗比較図

縮尺 1/5





本堂、大悲閣は未だ特建には指定されて居ないが自分は甚だ面白いと思つたから書くことゝする。

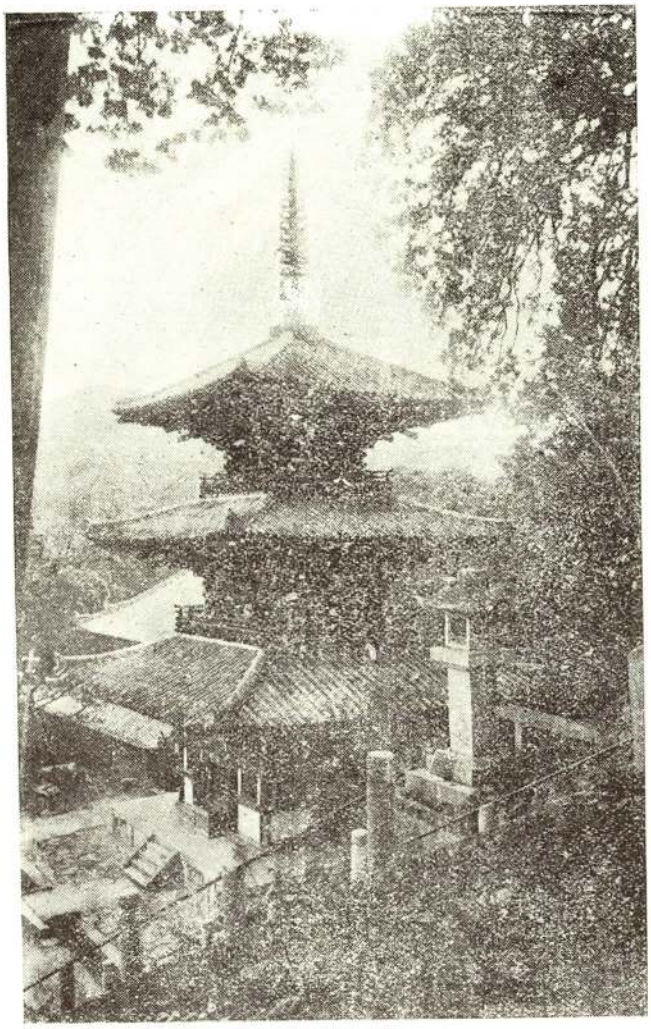
プランー、九間八面、堂々たる大建築である自分が實測した所に依ると柱間眞々八尺二寸五分、それが山上の一角に自己の身體を十分に容れ得る空地のない爲清水寺本堂のそれの樣に心ゆく迄、山の斜面に突出した有樣實に見て氣持がよい。

大體見取圖にある樣に前面中央五間に唐戸餘り二間に上蔀戸、側面には板かべ板戸、上蔀戸を用ひ、出入口には唐戸を使用して居る、後面も同じく、出入口には唐手棧唐戸を用ひ他は板壁を繞らして居る。

內部——最初の三間通りを內陣、殘りを外陣とし、內、外陣の區劃は甚だ明瞭に出來て居る、外陣の床、總板張、で天井は又面白い、圖示の樣に虹梁は縱橫に走り、虹梁で仕切らした所に格天井を組んで居る、隅の柱繋ぎ虹梁、蝦虹梁との集る所むしろ壯觀だ

內陣——は又細かに仕切つて居る、左、右の二間は佛間と納經所に充て中央の五間が即純水の內陣の樣な有樣だ、中央には宮殿式六手先の厨子を安置し、十二神將は其の一角を飾つて居る床板張天井格天井は外陣と等しいが甚だしく、その手法、外陣と比較して內陣のはデタラメの樣に思はれる、天井格間等もそうだ

で自分は尨大な本堂の中に脆坐する時塵の多い事と、甚だ大きな事と花山法皇の御事



一乘寺三重塔婆

蹟と外陣の痛快な事以外にはなにも念頭に浮んで來なかつた。

外へ出て又眺める、軒二重繁棰、周圍一間通化粧屋根裏軒端少しく反轉あり、中備の撥束等々たゞ本堂の規模の大なる點が面白い。

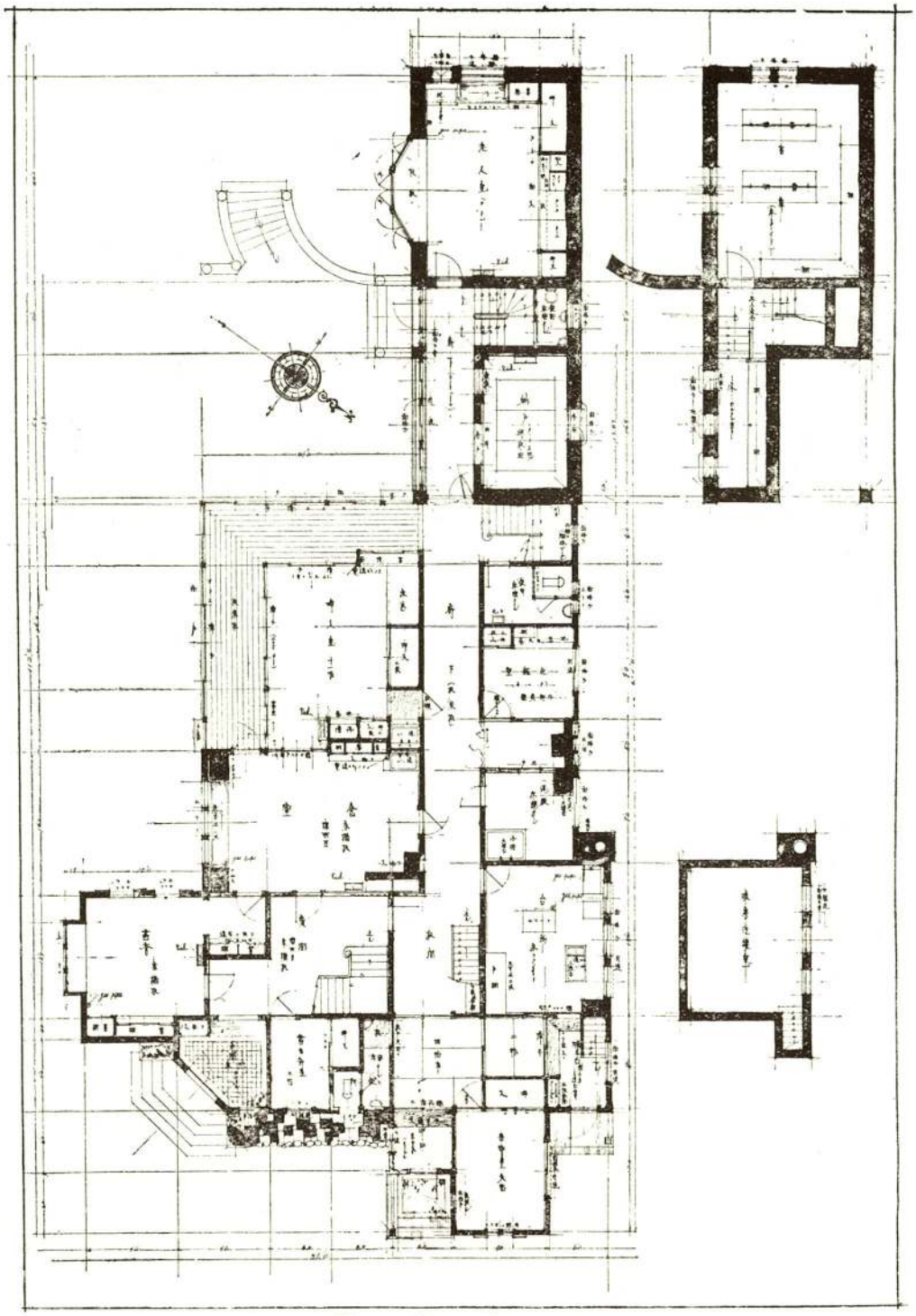
第七　一乘寺に藏する國寶に就て

一、聖德太子天臺高僧像（繪畫）
二、阿彌陀如來　（同）
三、五大力吼　（同）



案　私　宅　住

□ —— □



案　私　宅　住

□　2　の　二　□



貧者の一燈

廣岡峰太郎

A 戯場無想語

それが極端に近い程象徴化されてゐる舞踊及び舞踊劇の上に於ても、建築家は建築家としての使命、天分を生かすべき道があります。

たゞ單に漫然たる、懐疑や思惑から、畫家や音樂家の、活動の世界を、建築家の、傍觀するにとゞまつてゐるなれば、憶病者といはねばなりません。又卑怯者といはねばなりません。何故なれば、憶病者や、卑怯者でないなれば、期界に於ても、現今よりもつともつと、建築家としての大きな仕事を爲して居るべき筈でしよう。

ニージンスキー、カルサヴイーナ、ボルム、アンナ、バヴローワなどのあの、ロシア舞踊團の中から、バクストといふ一人の背景畫家を除いたら、ロシア舞踊團があれ程の名聲を博し得るものでなかつたらうとさへ、ある作曲家はいつて居ります。

色彩や、リズムの一つの要素を通してでさへ、明暗玄妙なる世界から、蒼白い數限りのない手が、お身達の上に握手を求めてゐるのを、お身達は、建築家として感じないのですか。舞踊及舞踊劇の上の、一つの要素であるところの、色彩やリズムを通してでも、建築及建築的のコンポジションに就て考へ得られるでしよう。

舞踊及舞踊劇の演技場それ自身が、舞踊及び舞踊劇の、雰圍氣の主體を形作つてさへゐなければならない樣に考へられて來ます。

この建築物の醸す雰圍氣は、舞踊及舞踊劇のすべりつこをそのまゝに言ひ變へ得られるものではないでしようか。

舞踊及舞踊劇の、効果を滿足たらしめる、繪畫、音樂、照明、粉裝、化粧等に思ひ及ぶとき建築及建築的のコンポジションを輕々に看過出來ないでしよう、と同時に、他方、バクストのロシア舞踊團に對する、寄與及び貢獻の偉大さを考へしめられるでしよう。

バクストの、背景畫家の、功績は、たゞ單にロシア舞踊團に對するのみではありません。そうです。世界的だとも言ひ得られるでしよう。それと同樣に、建築家の、たつた一人の建築家の、舞踊及舞踊劇に對する、建築を通しての、世界的啓蒙の、及び難きことは、徒らに架空の言を弄するのみは思はれない程、安易なる道ではないが又、至難なる道でもなからう。

舞踊及舞踊劇、ならびにそれらの舞臺裝置上に、直接、間接に表現さるゝところの、裝飾風、印象派風、表現派風、未來派風の、繪畫的、音樂的、種々相の上にあつても、よく建築及建築的のコンポ

ジションの有効なる、すぺーすを感じ得る場合もあるでしよう。

舞踊及舞踊劇の渦巻は、それを、せんために、あらゆる色彩と、リズムと、動と靜と建築的コンポジションとの綜合があり、醇化があり、醱酵があります。又舞踊及び舞踊劇への、すぴりつとへの達成を助長せしめ、舞臺、幕、觀客等その他のものを、抱擁したる雰圍氣は、世界的の動勢をさへよく、持つて居ります。そしてそこに、生きる生命があるでしよう。建築家のみにとゞまらない歡喜の聲がもたらされるでしよう。舞踊及舞踊劇の上に、建築及建築的コンポジションの上に、藝術至上主義的世界の建設は、單なる、イリユージヨンに終らないことを信じます。

舞踊及舞踊劇を生かす者は勿論演技者であります。併しながらその劇場を生かす者は矢張り優れた建築家、畫家、音樂家、照明家其他でしよう。如上凡ての者一團となつて、綜合藝術は、燎亂たる華の華。或は演技者は絢爛たる、觀衆より狂熱を以て稱讃を博するでしよう。或は又嚴肅なる、意味に於ける人生への純藝術の寄與を、頒へられるでしよう。然しながら、その雰圍氣を愛し、そのコーナーを愛し、その全體を愛する者にとつて建築家の叡智は見逃されないでしよう。

建築家の寄與は、演技者のそれと相待つて、觀客の意中へ働きます。舞踊及舞踊劇の持つ味と、建築及建築的コンポジションの持つ味、其他種々なる技巧の持つ味の何れもの、圓融無碍の、至妙境に於て、恍惚、陶醉、魅惑以上の觀客の、心性を、藝術的なる最高の、愉樂にまで至らしめ得るでしよう。

觀客の美へのあこがれの眼を心を搖り醒ます者は、演技者です、一擧手、一投足に美の散華をします、劇場全體が、美の馥郁たる幻惑、秩序ある混亂さです。

建築家の仕事は、觀客の藝術的、恍惚と陶醉との心性を抱擁します。例へばその劇場のコーナーです、建築家の叡智は彼の劇場のコーナーに於てさへも、舞踊及舞踊劇の觀客の美の印象をよみがへらせます。そうです、それで澤山です。それと反對だと全くその建築は、打壞しです。

大げさにいへば、感覺情緒は、演技者——幕——觀客を通じての、能働的なると、受働的なるとになります。

演技者の使命は固より大きいが、建築家の使命も大きいです。熱愛を以て觀客を、抱擁します。しのびやかに、眞綿でくるんで、ふらんす縮緬の覆ひして、柔かい肌に抱きすくめられた赤坊。それは觀客でなければなりません。建築家の、愛の問題になつて來ます。

演技者——觀客——建築家及び舞臺裝置者、畫家、音樂家等を一體とせる、三味一體の、舞踊及舞踊劇——劇場の上に同じき道を歩む人々の創造を待つ事の多いのは、明白なことであると思ひます。

（大正十四年一月十八日稿了）

B らゔ・おゔ・あーきてくと

惜しみなく愛は奪ふといふ。

又惜しみなく愛は與ふといふ。こゝにこの一小篇を書かうとする目的がある。

建築の愛、建築家の愛——建築家の愛の及ぶところは、人類愛、母性愛に翼を擴げます。

建築物の愛は萬人に共有である。愛のおもむく處には、光りを宿し、神はとゞまり給ふであらう。

又建築の愛は、凡ての人々の愛を奪ふであらう。けれどもそれらの人々に愛を

與へるであらう。愛の本質は、萬人の胸奥の扉を啓くであらう。

愛は傲慢でも、又卑屈でもない。然しながら素裸で來る。

愛の姿は、錦繡繚綾を、まとはないであらう。愛は强辯でもなく、阿諛でもない。愛の往く處に、一切の邪惡なるものは、姿を潜めるであらう。

建築物の愛は、王女の如く優しいが、建築物の愛を、冒瀆する者には、その尊嚴を示すであらう。建築物の愛は、愛の本質に背くものを許さないであらう。そのものゝ、愛を、呼びさますであらう建築物の愛は、その聰明博大さを以て、裏切るものを、抱擁してしまふであらう

建築の愛は、素樸であつて、粗暴ではない。建築の愛は、强慾なる家主の如き心ではない。

建築物の愛は、凡てを委して、何等他を顧見しないであらうけれども、又一面他の中より熱烈なる愛を要求するであらう。愛は互ひに奪ひあふことによつて、愈々確固たる愛の世界が、打建てられるといふ。

建築の愛は、美を裏切る世界には、打建てられないであらう。

愛の建築家、建築家の、建築物に對する愛は、母性愛にも等しいであらう。建築家の愛は、處女の如き熱情と、貞淑さとを持つてゐる。尚又、人類愛を說く、聖者の如き、意氣と、謹嚴さとを持つてゐるであらう。

建築家の愛は、自分の打建てし、愛の建築物を決して、誇りとしないであらう

光りは闇を拂ふ如く、愛の建築家は、その建築物を通じて、愛の本質に悖るものゝ上にさへ、新月の如き、淨らかさもて、澄み輝き渡るであらう。

建築家の愛は、日輪の如く白熱する。

愛の建築物は、素樸、清鮮、野菜の如きである。

建築物の愛は、勇氣、希望、光明、將や又、忍從を訓へる。又愛の建築物は、幼子を守る、若き女性の如き、安らかなる夢を守る役目をも引受けるであらう。

愛は無言で來る。建築物の愛は、無限にその翼を擴げるであらう。建築物の愛は、母性愛を說き人類愛を說く人々の前に、打建てられるべきであらう。

愛の建築家は、それらの人々の間に打ち交りて常に微笑と、羞恥の瞳を　伏せるであらう。そこには法悦に似た一境を建築家は味得するであらう。

愛の建築家はそこに限りなき滿足を、おぼえる。そこには何の屈托もなく、疲勞もなく、輝かしい瞳と、平和なる、心境とを、人々の上に見らるゝ事を得るであらう。

建築家の愛は、愛なき人々をすら拒まないであらう。建築家の、建築物に對する愛は、拒む程爾く愛の前に、偏頗狹少ではない。

建築家の愛は、心なき人々の造る動物園の檻の如な建築物をして、都市より追放して終ふであらう。

あゝわれ等！いつの日にか　われ等の否、否、萬人の、精神的、科學的精粹の上に打建てられし、最も、眞なる、善なる、美なる都市の、建築郡に、めぐりあふべきことか。

『黑く固き壁』の象徵する牢獄ですら、建築家の愛は、しかく取扱はないであらう。建築家の持つ、理智と情熱は此處にもほとばしり出るであらう。

かゝる場合にこそ、建築家の眞の愛は完全に打建てられるべきであらう。

愛の建築家は絶えず作曲する。小夜曲から、狂想曲まで、時と場所によつては

瞑想し、亂舞するのである。

しかしながら、建築物の愛の本質は毫末も變化はしないであらう。

愛は流動する建築物の愛は動的である

愛の建築物はいつまでもふれつしゆである。

推移する時代の上に、常に動く、そして萬人にさゝやきかけるであらう。之は本質的なる、建築家の愛より出發した建築の故である。愛の建築家、建築物の愛の、惜しみなく愛を與へる所以である

おほよそ、この世の中の、建築家の愛の、ほとばしり出づるところに、一つとして建築物の愛のにじみ出で、芽吹かぬいはれはなからう。

（大正十三年二月紀元節の日に稿了）

C ある斷章

◆

——賢明なる者、迂愚なる者、物的生活に齷齪たる者、心的生活に餘裕ある者とは、誰れが裁き得ようぞ。されど……わが愛する哀れなる、おぶろーもふよ。

◆

——妄執を棄てしところより、自然は開明さるゝに至るであらう。だゞいすとのみらくるも、ろまんちすとのゆうとぴーあも、太虛に、みち、あふれ、ひかりすみ十方無礙光明の世界へ、大地を拔くこと、一二寸の草の葉の、そよぎにさへも息吹きは通ふのである。

◆

建築家としての、われらの今日の豫想をして、明日の効果を裏切らしむることなかれ。これは自他共の願ひである。

今日の豫想すら想倒せずして、明日の効果の、幸福なる人たり得ばうばにしやつざと雖もその必要を何も認め得られないであらう。

◆

——にいちねの『善惡の彼岸』なる言葉をからずとも、人としての建築家として、ぽいんとと、ぴりおどの『句讀點の彼岸』への豫想にだに、吝ならざる者も尊敬に値すると思はれる。

◆

破壞と、建設との道程にあつて、東西古今を貫く建築家のすぴりつとはあらゆる意味に於けるよりもよりよき建築物を生むを希ふ境地であらねはならぬに、あゝ又しても、またしても一杯のリキュー・グラスのあぶさんに、さもしいみすぼらしい心の惹かれようとは……。

◆

——地藏和讃にあらはれたる、みどり子にも等しきは、われ等なり。六道能化の菩薩は、われ等の、心的生活への、美しき、有明の發願に、豫想と効果と、はたやはた、破壞と建設との上に、宿りましますであらうことを信じ得られるであらう。

◆

——自我の核心への沈湎は、對他への自我の擴充となり得よう。やがてはそれが、優れたる建築家の生命の中にあつては、彼は彼の接する、森羅萬象の對照の中より、遂に彼自身の、幽遠相を具象する建築物をも發見するに至るであらう。

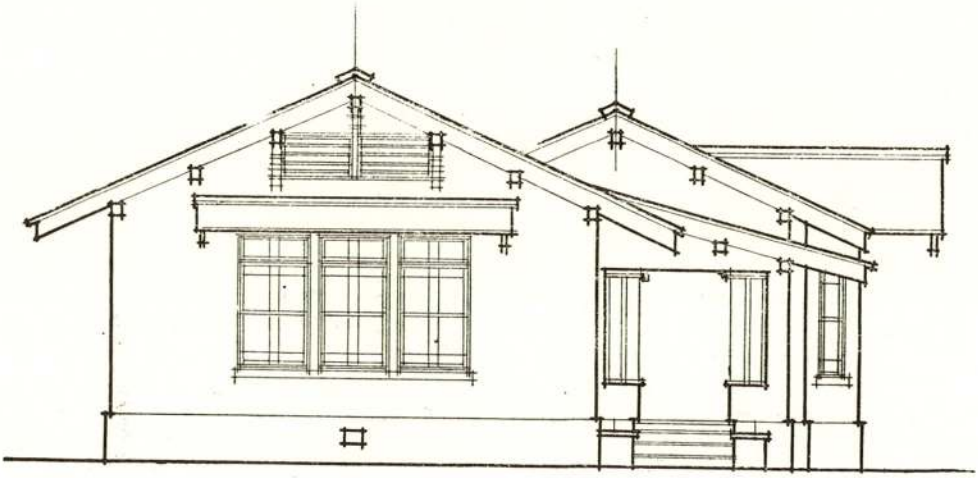
◆

——自我の心性に巢喰ふ惡魔を追拂ふ爲めには、自我の心性に宿りましますであらうところの、あなたのみ心の氣遠い一つの發見が、より必要ではないか。

◆

——きのふのぼつた、らせんかいだんを、けふのわれわれには、みおろしうるまで、さみしくとも、しづかに、しづかに、よるふけてふる、しものこえに、こゝろをこらさうではないか。

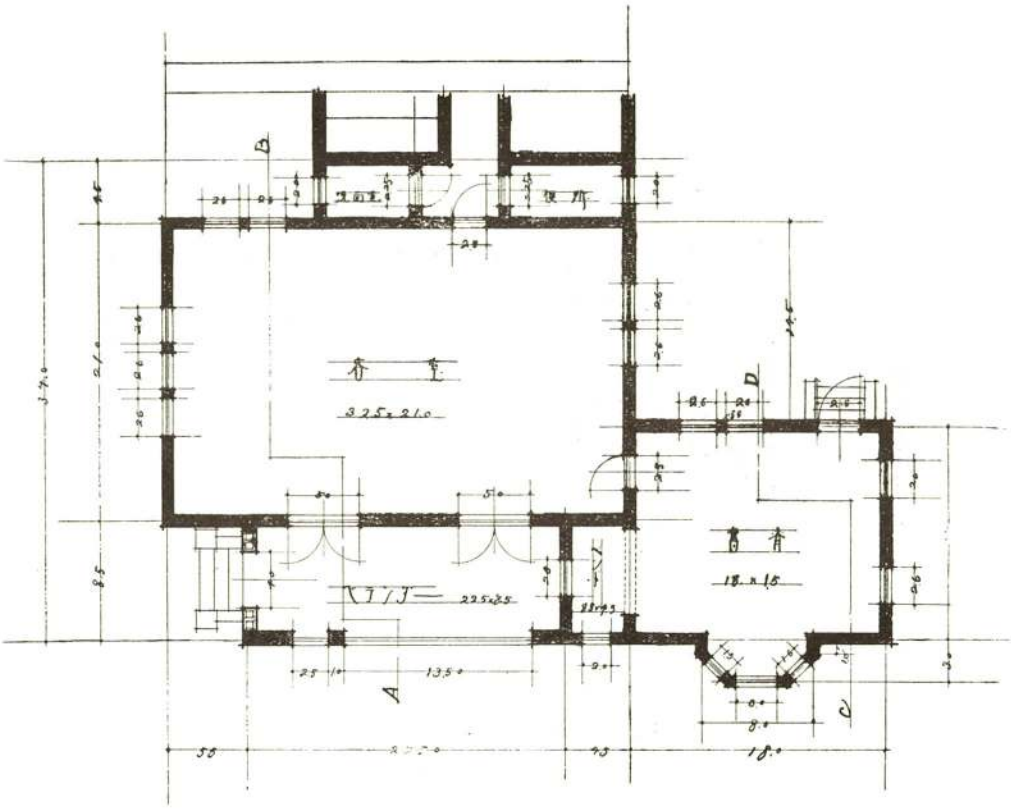
（大正十四年一月十二日稿了）



案　私　宅　住

□　3　の　二　□

□　——　□



案　私　宅　住

□　4　の　二　□

□　——　□

舞臺照明に就いて

池田谷久吉

我國の劇場に於て非常に重要な問題でありながら等閑に附せられてゐたものゝ一つは舞臺照明である。

然し最近に到つて今迄省みられなかつた舞臺照明が一つの問題として研究されて來たことは舞臺藝術發達の上に甚だ興味あり亦意義あることであると思ふ。

劇場に於ける舞臺光線の如何によつて劇の情調氣分を左右する位置にあることは今更管々しく論述の要もないが此の照明機關の利用によつて舞臺面に於ける春夏、秋冬、朝夕、晝夜の別、天候の晴曇室内の明暗等、凡て是れ等の適當なる象徴を如實に表現することが出來るのである。

『光線は劇場の生命である、舞臺裝置の偉大な精靈である舞臺藝術の魂である。聰明に處理せられた光線は舞臺裝置に雰圍氣を色調を深みを正しい遠近觀を與へる。

光線は觀客の主觀に官能的に働きかける、光線の魔力は戲曲作品の内容價値を強調し鮮鋭にし、且これがリズムとなる驚くべき力を有する』

これはアンドレ、アンドアレヌのいつた言葉であるが事實舞臺に於ける光線の色調、强弱、整調の如何は戲曲の効果に大なる影響を及ぼすものである。

即ち折角の舞臺美術を平面的繪畫的なものたらしむるも、立體的彫刻的に浮き上がらせるも只この舞臺光線の如何によるものであると思ふ。

フィラム、ケリ、モダンウエルはこの照明を論ずるに當つて『演出者は陰影が背景の圖面中にあつて美しい塊りとなり得ることによつて舞臺光線は一つの美術である』といつてゐる。

彼は亦レンブランドの繪畫の價値論に大いに共鳴してレンブランドが自畫像を一つの方面から來る光線に依つて繪畫的の統一を示したと等しく近代の演出者も亦光線を使用して舞臺の各部分を一つの完全なる繪畫とせしむべきであることを力説してゐる。

扨て舞臺照明の最も至難なる中心問題は藝術と科學との握手である。

近時科學文明の進んだ結果、電氣燈を使用し得るが過去の如く蠟燭や、石油燈瓦斯燈を使用する時代に於ては完全な舞臺照明は宛然、木によつて魚を求むるにも似た事であつた此の電氣の用ひらるゝに及んで以來照明の進歩は著しく漸く未知の世界への道が通ぜられた樣である。

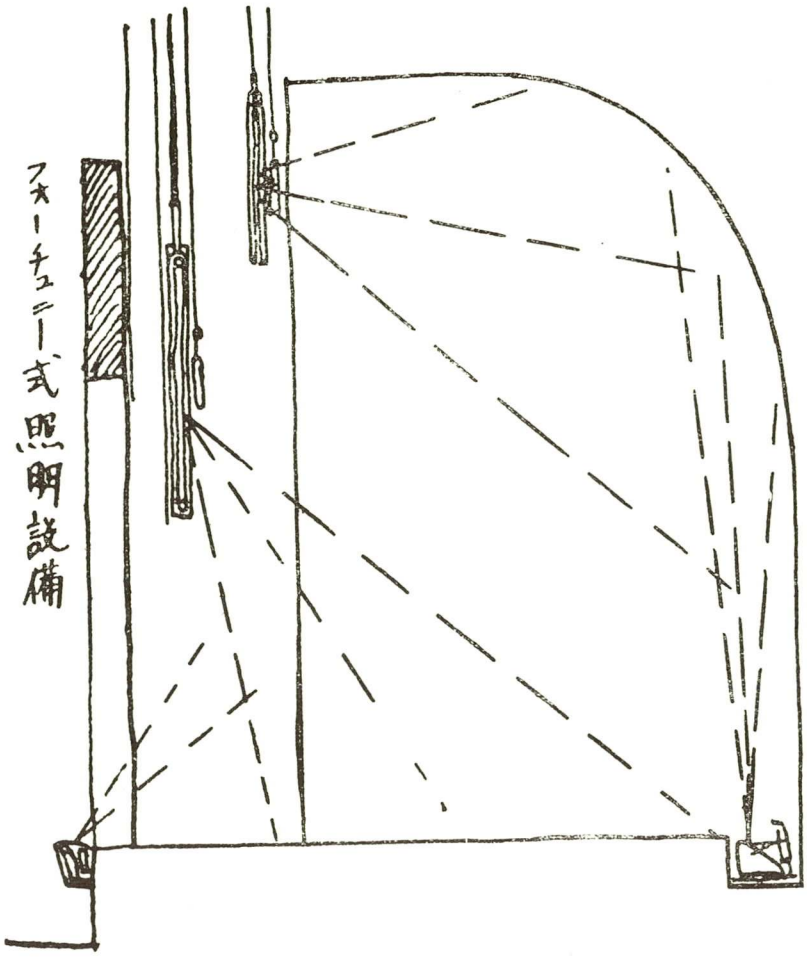
殊に近年獨逸に於て發明され、意外の成功を納めたものにフオチユニー式と稱されるものがある。これは、過去の舊套的な照明法に代るべき裝置で、間接照明法ともいふべきである、即ちフオチユニー式とホリゾンとの二個の裝置は實に舞臺美術上の革命である。舞臺裝置家として有名なゴルドン、クレイグ（gldon

Craig)やアッピア(Appia)の持論たる『常に舞臺上の彫刻的効果』の慾求の理想を充分に滿足せしめ得るものといふことが出來る。

舞臺照明の種類

舞臺照明の種類の區別に就いては種々の方面に分れたるが、普通我が國の劇場に於て使用してゐる一般的のものを擧げると大體左の如きものである。

一、フートライト(Foot light)
二、トップライト(Top light)



A、ボーダー、ライト(Bouder light)
B、スポット、ライト(Spot light)
C、フォーチュニー式 (Fatunyty system)
D、リンネン、バッハ式 (Linnen bach system)

一、フート、ライト(脚光)

フート、ライトは舞臺前面の先端即ちプロセニアム、アーチの直下に一直線に舞臺間口の約五分四位の長さに赤、青、白等の着色電球を配置し、配光室より自由に之れが點燈できる裝置になつてゐて下部より舞臺上部を照らすのである。

我國の劇場に於ては殆んど一樣に使用されてゐる。このフート、ライトは全然不自然極まるものであつてか即ち自然界に於ては下部より光線が來ることは先づあり得ないのである。

然かも毒々しい原色を用ふるがために尙一層の欠陷を認めるものである。生々しいフート、ライトは物の平面的表現であつて只物のアウト、ラインを示すに忠實であるが彫刻的生活の破壞者であると思ふ。

尤も、フォチュニーチー式やリンネンバッハ式等のものに比較するときは極め

て幼稚であり貧弱であるが、それ等の優秀な設備なき場合、之れが使用に注意するときは相當の効果を收め得るものである。故に美的光線の理論を發見しその具體的機械的設備と共に過去の一切を更めねばならぬ。

二、トップ、ライト

A、ボーダー、ライト

これは舞臺上部に幾條（數は劇場規模の大小に依る）かの平行せるボーターを設備し丁度フート、ライトに對抗するもので使用する電球はフート、ライトの如く種々の色彩を着色せるものを配し配光室のスイッチによつて自由、自在に點滅し得るものであつて最も普通一般に用ひられてゐる。

然し是は直接光線なるがために生々しく、堅苦しくて却つて使用方法を誤まる場合には反對に失敗を招くものである。

B、スポット、ライト

これは舞臺の兩翼及上部に設備して演出者に直接光線を與へる方法である。故に同じ生々しさにしても脚光とはよほど趣が異つてゐる。

即ち移動出來ることゝ局部的に使用出來るものであるから極めて便利である。

獨逸座の舞臺監督、マックス、ラインハルト氏(max, Reinhaldt)は常にこのスポット、ライトを使用して偉大な効果を收めてゐる。

C、フォチュニー式照明法

伊太利ヴェネチヤの人フォチュニー氏の發明になるもので過去の幾多の照明法に比較して最も進歩した方法である。

白熱大アーク燈を使用して間接光線を舞臺に平等に柔かに撒布することによつて非常に愉快な自然の大氣中の外光線と同じ効果を漲らせようといふのである。

光は舞臺を背にして白、黄、赤、青、綠の五色に分けられ然も科學的に撰擇された絹の平面板に當り絹に當つた光線が反射し『蒼空』或は『ホリゾン』(Horizon)と稱する圓形地平壁に限られた舞臺を照らすのである。

また、圓形地平壁の底邊に當るピット(pit)にもう一つ反射裝置があり上からの反射光をもう一度そこで下から反射し返し舞臺の光線を均一にすると共に脚燈の代用にもなるのである。

こうして單色、または混合の色の温い浴槽の中に俳優と舞臺裝置とを浸してふつくりとした情調的効果を擧げるのである。我國に於ては漸く昨年東京築地小劇場に於て設備されたのが嚆矢其他では未だ使用されてゐない。

D、リンネン、バッハ式

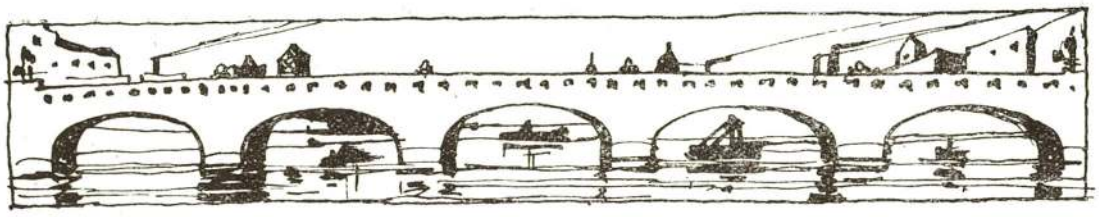
これはフォチュニー式と在來の直接光線式のものとの折衷式のものである。

獨逸ドレスデンのコートン、シャターの技術監督長リンネンバッハ氏の創業になり弧光燈は舞臺から離れたところに置くのであるが光線はランプから來る時に透明な滑り布を通過していろ〳〵な色彩になる。

そして反射光線は無地の白色の壁から反射する、また今若し色々の變つた色彩を必要とする場合には自由に變化が出來るのである。

以上は大體現今使用されつゝある舞臺照明法の主要なものゝ一端であるが著しき發達進歩に大なる刺戟を與へたものは何といつても後期印象派畫家の努力であると云ひたい、殊にロシヤの藝術座及びロシヤ舞踊團その他新劇壇に關係せる者は畫家連から產み出されたものである。

即ちレオン、バクスト(LeonBacst)ゴロヴイン(golovine)アニスフェルト(Anisfeldt)ピカッ(Picasso)等の大膽な色彩と思ひ切つた線と殊更に劇的內容の靈感があづかつて力あるものである。



建築を享樂として

田中幸一

×

單なる享樂が人生の目標であつてはならないとは、誰しもが言ふところである。藝術が苦悶の象徴である。とは藝術への常識の第一歩である。苦悶の意義を極めないで藝術を語ることは、確に僭越な非常識であらう。

或る熱心なる社會學の研究者、合せて藝術への深き理解者である一先輩は、理想としては主義的國家が如何にも最も理想的であるとは考へられるが、その社會組織の唯一の根本的の願望が、この人類の世界から社會的苦悶の一切を取り去り刈り盡さうとするものである以上、その大理想の完全に實現された時は、そこには豫想外の寂寥空漠たる灰色の世界、即ち藝術なき世界が殘されるであらうからこの主義には、藝術を愛好する氣持から言つて、うかつには讃賞は能きないといふ意見を、私にさゝやいてくれたことがある。

彼に依れば、藝術は文字通り苦悶の象徴以外のなにものでもないのである。藝術は人類の盡きざる喘ぎ、嘆き、哀しみ、苦しみ等の制え難き自らなる充溢であつて、そこには唯、裏切られたる希望退けられたる願望だけがあるだけである。偉いなる藝術は唯偉いなる苦悶からのみ生れる。勝れたる藝術家は全て深刻痛烈なる苦悶の體驗者であつて、大いなる激しき苦悶なきところに生命の發展なく藝術の成長もない。社會の相が惡徳と邪俗とに著しく混亂し迷動してをればをるほど、そこに、深刻なる生活的體驗あり、痛烈なる藝術的試練があるといふのである。即ち、藝術はこの社會の恐怖すべく逃避すべき缺陷よりのみ培はれ咲き出づる華であつて、その缺陷の完全に除拒されたる時、その美はしき華の生命生長もすでに必要ではなくなるので、自ら枯死停止するだらうといふのである。階級意識の著しき發達虚無思想の烈しき勃昂も畢竟するにこの世界の缺陷への反抗であり、邪惡からの逃避であり、おしなべてそれらが人生への苦悶である限りに於いて、その存在の理由があるとするのである。

近來苦悶の意義の高められたこと、かつてその類を見ざるところである。

×

この主張は半面の意味に於いて確に眞理に觸れてゐるであらう。唯、その殘りの半面に於いても果して眞理であり得るかどうかゞすこぶる疑問である。

しからば、所謂藝術至上主義者

は、その熱愛する藝術を益々深刻痛烈なものたらしめんために、この現代の、何人に依つても斷然拒否されなければならない歪み汚れたる社會相を、このまゝ是認し歡迎しやうとするのであるか、如何にその絶對至上な藝術の故には、自ら強ゐて苦悶を追求し、缺陷を是認し、邪惡を遂に讃美しやうとするのであるか。尙進んでは、遂に如何なる醜惡穢雜なる地獄的存在にも、そのまゝにして皓然たる藝術的光耀あり得るものとして、押して振り翳さうといふのであるか。醜そのものを美、惡そのものを善なりと、おそましくも强辯しやうとするのであるか。

もとより、在來の美醜、善惡、若しくは眞僞の觀念の錯誤轉倒を雄々しく訂正し改變し、新しき美、新しき善、乃至は新しき眞を標榜しやうとする運動、若しくはすでに確立したる運動、總じて、熱意あり眞情あり未來ある新時代の藝術運動乃至倫理運動を、無視し去らうといふのでは決してない。時代の奔流と倶に新しき美、善、眞はいよいよ琢磨され、世紀の發堀と倶に新しき美、善、眞はますます創出されなければならない。すでに新つきまことなる美、善、眞は到るところに發見樹立され、堂々論議され主張されつゝあるを私達は見聞きするのであるが、こゝにこの榮ある勝利のかげに、古く絶對なる永劫の美、善、眞をまで、あやまつて輕思淺見なる時代的詭辯を以つてして、蔑視し、忘却し、損傷しはしなかつたであらうか。傳統は一度でそのうちに深く沈潛することに依つてのみ、讃賞し或は排拒することが能きる。古き眞實を塵芥の中に投棄しやうとするのは大いなる冒險である。

藝術なき世界はもとより冷たき死の氷原であらう。地獄の世界は一入耐え難き永劫に變ることなき暗の闇であらう。

×

藝術はもともと生活されたる意慾情感の自らなる必至の表現流溢である。やむにやみ得ざる靈魂の動搖發展である。如何なる意味に於いても、藝術は人生を離れて獨り恣なる存在に立つことは能きない。人生に根ざさないで華咲く如何なる藝術もあり得ない。人生以外の存在では決してなく、人生に飽合されたるもの、人生に飽合されたるものである以上に、人生そのものでなければならない筈のものである。進んで言ふなら、彼の日月星雲全て人生のためならざるものはない。一切の存在、これ人生ありての存在である。かくて、藝術が人生のためのものである限り、そは即ち生活である。生活そのものである。まことに、生活が幾多の怖ろしき苦悶に充ち邪惡に塗れてゐるのは事實ではあるが、この人生が、この苦悶、この邪惡に依つて、劫初から劫後まで、人類の手のとどかず希ひの到らないところまで、かゝる苦悶と邪惡とに必ず終始するものであるかどうかは、甚だ疑問とされなければならない處である。

苦悶は正に藝術を育てるであらう。邪惡は確に藝術の魅力を增し加へるであらう。唯恐らくは、この苦悶この邪惡が、斷じて、このまゝ高き藝術の終極目的とはなり得ないといふことである。こは人生の目的が苦悶邪惡ではないのと同一である。

斷言する。古來幾多の偉いなる藝術家は、苦悶を通したる歡喜、受難を徹したる享樂をこそ、その藝術の目標となしたことは明らかである。藝術は人生への厭くなき熱愛の焰であり光であつて、單なる人生逃避、反抗、苦悶ではないのである。

淫するまで自らの生活を愛撫し、溺れるまでその人生を享樂せよ。こゝに、藝術の赫然たる輝きがあるであらう。

×

もとより、藝術は單に今日安易に意味されつゝある低卑なる肉に依る快樂を、この人生にもち來さうとする効利のしぐさではない。藝術は宗教と倶にしばしば人生よりの解脫であると主張され勝ちではあるが、藝術は斷じてこの人生よりの解脫ではなく、人生への厭くなき沒入である。躍進である。戰鬪である些かの妥協も宥さぬ積極道である。

從つて、藝術の進みゆく門は、先づ、苦悶の門である。痛烈な炎の道である。魂はこゝにしばしば迷ひ喘ぎ、肉はしばしばこゝに痛み傷くであらう。嵐と吠號とがこゝにあるだけである。ほむべき哉苦しめば苦しむほど、藝術の光は明るく輝き初めるのである。懸命に苦しまずして享樂することは宥されない。苦しめるだけ苦しまなければならないのである。藝術の世界は斷じてかけひきすることが能きず、ごまかすことは能きない。藝術に富籤はない。

人生が享樂であるとは、この苦悶に勝ち得てあまりある時、そこに勝利の歡喜が殘されてあるとの意味である。藝術が享樂であるとは、この苦悶を突破し得た曉、そこに永劫の輝きが加へられるであらうといふ意味である。受難を通らないでは、何等の享樂もあり得ない。嵐の後の晴天こそ、日本晴である。

×

建築が人生のためのものでなければならないのはもとより當然の話である。他の如何なる種類の藝術にもまして、所謂日常茶飯の人間生活にまで密接なる交涉を有つものは、先づ、常識的に衣食住と總稱されつゝあるうちの一つである建築である。現社會相の日夜の發達複雜化につれて、この衣食住の問題は實に益々切實なる世界的の大問題となりつゝある。建築の藝術問題が決してなほざりにされてはならない理由は、實にこゝにある。藝術は生活の、少くとも、根元である。建築に於ける主流が、藝術的精神でなければならぬことは勿論である。建築上の技術の發達のためには、或はその生涯を捧げてその研鑽に沒頭しやうとする人はあるであらう。建築とその眞髓となるべき藝術的價値に就いて、その數時間をもつて深き考慮を加へやうとする人々の意外に少きは、實に遺憾の極みである。人生が苦悶に塗れてをればをるほど、その生活が明るく樂しまれてあれと希ふは蓋し自然の情である。建築に於ける藝術的精神が厭くまで明るき情熱と信念とに依つて樂しんで守らるべきであるのは當然の話である。もとより、唯安易なる表面の技巧の輕薄さは斷然避けられなければならないが、建築は先づ暗き陰鬱なる感情を與へるよりは、明るき爽快なる印象をもつものを優れたるものとされなければならない。唯徒らにその偏邊を飾り衒はれた美は言ふまでもなく不可であるが、とりつくろはぬまゝに靜かに置かれたる輕妙さは、自ら人生への爽やかなる歡喜と安心とをもち來らせるであらう。かのゴシックの大寺は、全て、神へのやむことなき熱愛と篤信とを以つて、この現實世界の苦悶を躍り越えたる明るき世界への憧れ心を以つて、樂しんで營まれ、かのルチサンスの劇場祭壇は、多く、この薄暗らき苦悶の人生の、より美しく爽やかなる人生への轉換を期して、大いなる喜び心を以つて、勇んで建てられたものであ

る。ゴシックの壯嚴ルネサンスの典雅は、即ちこれ、全てその各々の時代人がこの人生へ投げかけ働きかけたる明るき、積極的な信念を表現するものである。現代に於ける建築、多くは過去なる樣式の魂なき愚劣なるそのまゝの模倣であるか、さもなくば、强ゐてその表面にのみ唯技巧の新奇を衒はんがために歪め飾れるものであるのは、倶に高き輝きあるべき現世紀の建築としてはうけとり得ないところである。倶に唯難澁苦悶の作爲感はあつて爽快享樂の創造感はない。創造は深き苦悶であるよりも尙高き永劫の享樂である。作爲のあとの歷然たる作品は、いまだ藝術作品としての大完成の域に到れるものとは言ふことは能きない。その根は搖ぎなき永劫の眞實の中に深く下ろしつゝ、如何にもさりげなく樂しんであることこれ藝術創造の本願である。

×

苦悶を雷に苦悶としてのみ苦しむ時、そはその本來の面目を失ふ。人生は苦しんでのみ生きんよりは、樂しみ進んで明るく生くべきものである。藝術は苦悶の象徵である以上に、この苦悶の底に嚴存するより以上痛烈なる人間的歡喜の表現でなければならない。建築は先づ人間歡喜の場所でなければならない。人生を樂むためにこそ建てられなければならない。その公會堂であると事務室であると工場であると劇場であるとを問はず、全てこれ心からなる喜びをもて生存し得る場所であらねばならない。その表現施設又自ら樂んでなされなければならない。藝術はもともと永劫なる世界の絶體眞實を、この現實世界の苦悶邪惡な亂れ騷ぎ立てる波動の中に、發見し、把握し、享樂せんとする有目的の靈魂運動である。明るき建築をこそ求めらるべきである。

ひややかにみづをたたへて
かくあればひとはしらじな
ひを小きしやまのあとども



都市から郊外へ
郊外から田園へ

＝來るべき時代の住宅に就いて＝

大庭草太郎

一

都市の發達は、言ふまでもなく、その道路の發達ひいて都市内外の交通機關の發達に負ふところが實に多いのであります。都市問題は先づ道路問題であるといつても過言ではありませぬ。ともすれば輕視され冷視されて來た都市に於ける道路も、最近の都市計畫思想の發達につれて、追々問題視され重要され初めて來たのは、市民の全らゆる階級の人々と倶にまことに同慶の至りであります。しかも今それを詳しく部分的に論じてゆけば、その理想の施設は未だその大部は着手前の有樣であつて、決して今日までの低劣なる都市觀念に依つて毒され禍されて來た俗雜、狹隘、穢惡、卑猥の境を脫し得てゐない狀態であります。安んじ樂しんで步行し得る一尺の餘裕も有たず、唯徒らに歪み、曲り、迂つて、そこに腐敗した塵芥を積ね、濡つた日蔭を貯へてゐるのみであります。所謂裏通り横町等を稱して、そこはもともと不潔亂雜なものと是認して怪しまず、反つて、そこに極めて僅かなる空地、一本の立木を發見すれば、恰もあるべからざる不經濟かのやうに考へたがるといふことは、あまりにもその市民的敎養の低劣淺薄であるのを示すものであります。僅か三匹の仔猫が辛うじて通り得る程度の細長き土地を、大都市の道路、文化人の交通路であると言はうとならば、こゝにはすでに議論の餘地はありませぬいやしくも都市に於ける道路の高き本來の意義を承認する程の市民は、こゝに深く自ら省みて、先づ道路の建設改造を念とすべきでありませう。

單に大都市に於いてとのみ限らず、全らゆる建築物に於いては、先づその土地の選定と同時に、道路の適宜なる計畫施設が必要であるべきは當然であります。建築あれば必ず道路あり、建築の規模が大きくなればなる程、その道路の計畫施設も大きくならねばならぬものであります。將來の都市に於いては、如何に狹く考へても、少くとも自動車三臺が相手を互に苦しく待ち合はせず、傍人にも不慮の狼狽死傷を與へない程度の幅員が必ず準備さるべきでありませう。尙このうえ

並樹芝生等に充分なる土地を割くとか、或は建築線に於いて少くとも三四米の餘裕をもたせるとかすべきであります。電車線其他の定規的な車馬線に就いては、もとより以上に深厚精細なる注意と研鑽とが拂はれなければなりますまい。單に地上線とのみ言はず、高架線、地下線に就いても同樣であります。このことは、將來の交通機關の壯大なる一つの社會事業化、社會科學化を豫期しても、今こゝで斷言してをいてもいゝと思はれます。

もとより、地價の盲目的なる騰貴は、一寸の土地をも空しくはしまいといふ極度の經濟的觀念を益々擴く深く市民の胸に播き散らし植ゑつけるでありませう。又道路、廣場、公園等を充分にとらうとすることに依つて、建築敷地の地價を益々あふる事になりませうから、二重の意味でこの事業は頗る困難に思はれます。しかも、問題は唯市民の市民的敎養と自覺との如何に懸つてをります。自己の邸宅のためにのみ唯寸尺の土地を爭はず、せめてトルストイと俱に『人はどれだけの土地を要するか』を賢く考慮し、多く有てるものはそれだけ多く萬人のため、都市のために美はしき犧牲を拂つて道路廣場、公園等のために割き、以つて市民共有共樂の財寶なる都市をして、健全なるその發達へ促進せしむべきでありませう。

かくて、完全に計畫され、施設され、舖裝されたるよき道路は大都市の大都市としての機能を完うせしむる唯一の絶對的機關となりませう。道路は今や單に交通のためのみならず、都市の文化そのものゝためであります。

二

道路及び廣場、公園等の發達は、言ふまでもなく豫期以上の交通の至便を來らせます。交通の至便のもたらせるものは先づその物的文化の輝やかしき發展伸長であります。もともと、人口百萬以上の都市の成立を見るに至つたのは極く近代に至つての現象でありますが、往時人口の都市集中を現實的に許容しなかつた唯一の理由は、その交通機關の頗る幼稚迂遠であつたことに依ります。鐵道の發明は疑ひもなく都市の急激なる驚異的發展を促したのであつて、是に依つて、多數地方人を都市へ集中せしめ、多數市民の日用品を運び、生活資料を厭くまで豐富にし、加へて、諸種の建築材料を豐富に運搬し來り集中せしめたのであります。都市は必然の勢から大都市へと素早く發展しました。近代科學の全らゆる方面に於ける都市での日夜の激甚なる發展は、この膨脹しつゝある大都市をその輝やかしき科學の裝ひで掩ひ、その魅力を以つて飾り、利便を以つてその威を揚げしめたのであります。物的文化はいやがうえにも發展伸長しました。從つて、心的文化も多くの文化的施設がその科學的利便に刺戟され助成されて都市に集中し、都市は疑ひもなく近代文化の母胎となり、搖籃となりました。近代文化は即ち都市文化であるかの如き有樣となり、都市人にあらずば敎養ある文化人ではないかの如く强調され誤認され初めたのであります。一切は都市に依つて計畫され生産されます。都市人たるの敎養が現代の敎養の一切を意味しやうとする以上、如何なる山間に生れた者も一度は必ず大都市に出で、一旦は大都市に於ける現代的雰圍氣のうちに色づけられ、揉まれて初めて現代を語り得るかのやうに考へられ初めてをります。青年子女は爭うて人生の目標を大都市の空にをき初めたのでありま

す。都市萬歳の世紀なのであります。

もともと都市へ集中して來る地方人の全ては、都市といふものゝもつ一種異樣なる感覺的觀念に魅惑され、その文化を求め、科學的利便を慕ひ、ひいてはその都市の一見派手な、輝やかしい、惠まれて見える享樂的な色調、雰圍氣を追うて集つたのであります。都市は益々よいにつけあしいにつけこれ等地方人に依つても著しく發展膨脹しました。多くの所謂都市問題は今後益々複雜を極め繁俗に流れるでありませう。而も、この都市は今後益々その交通機關の發達につれてその發展の加速度を增し、量質俱に膨大し擴大して停止するところを知らないでありませう。人口百萬はすでに何等の驚異でもありませぬ。七百萬、一千萬の大都市が、近き將來に於いて實現し得ないとは斷言能きないでありませう。大いなる、複雜なる都市問題、生活問題、ひいて國家的な社會問題のしばしば起るのは當然のはなしであります。

三

都市の發展はかうして日を追うてその勢を强烈激甚なものとしました。一切の文化は益々この都市のみに依つて花咲かうとしてをります。今や、如何なる都市讃美者嫌惡者も、唯一樣に、都市のこの近代的色調、現代的刺戟からは到底逃れ去る事が能きなくなりました。刺戟はその强すぎることに依つて其の効果を半減し、歪めます。現代の大都市に於ける刺戟の効果は、すでにあまりに歪んでをります。如何なる都市心醉者も認めないではをれない都市惡都市醜が、都市のその雰圍氣によつて釀し出された社會惡社會醜を俱に激しき渦を卷き狂はしく搖れつゝあるといふことはかくしきれない事實であります。

都市の文化、それが心的であると物的であるとを問はず、その必然なる明るきよき半面には多大の期待を懸け乍らも、その大部分の半面には、怖るべき、嫌ふべき暗らき、歪める半面の確に現存してゐることは到底否むことは能きませぬ。所謂文化なる名に依つて裝はれ隱された虛僞、卑猥、俗雜等はその第一でありますが、唯刺戟を求めるための刺戟となつて人生の本義は全然亡失され、唯徒らなる亂倫、輕薄、野賤、低劣なる刺戟を日夜果てなく飽くなく求め、都市をして唯々徒らなる惡趣味、沒敎養、喧騷、愚惡の亂れたる集團と化せしめ、明るき世紀を濁し新しき文化を汚すばかりとなります。物質の豐富は社會生活の罪過を多くし、人口の過剩は人心德義の亂倫を多くします。

加ふるに、その所謂生存競爭激甚を極め、單なる惠まれざる小さき偶然のために、所謂社會生活の劣負者となるもの多く、一つは高樓に美娼を弄んで肉樂淫邪の全てを極め、一つは襤褸を纏うて街巷のかげに失職薄給に哭きます。尙も加へて、その生活相の事務化、科學化は日夜に必要以上に昂まり搔きまはされ、疲れ易き神經軀體を極度に昂奮せしめ疲勞せしめる結果を來たします。邪惡、不德、僞瞞、加へて、病弱、失意、苦惱の激しき波が、そこに押し寄せ渦卷くのは當然であります。思想上の幾多の悲劇を生むのはもとよりのはなしでありますが、手近かなところをとつても、その衣食住の問題は實に日を追うて深刻複雜を極めやうとしてをります。衣食の問題は或る意味で未だしも一時的にでも解決はつけ得るでありませうが、住の問題は、都市に於ける工場地帶、商店街等の急進的なる

増加、地價の驚くべき突猪的騰貴、それに加へて、市民一般の都市的敎養に依る住宅慾の伸長は、益々都市に於ける住の問題を容易ならざらしめます。工場、事務所、商店と、住宅との分散はすでに世界の大勢であります。事務的生活が複雜激甚になればなる程、その休養的生活に閑寂靜平なる住宅を求めやうとするのは當然であります。激しく混み入つた集團的生活は、その反面には和ぎある家庭生活、ひいて、自己一個の靜かなる魂の時間を有たうとする傾向を助成します。しかも、現代の都市はその住宅の分散をもその同一都市内ではやうやう不可能ならしめやうとしつゝあります。もとより、工場地帶、商店街、住宅區域等の都市計畫的分散は喜ばるべきでありますが、現代の都市の發達は、その住宅區域内に於ける新しき生活的不滿をすでに產みつゝあります。大都市の生活相そのものゝ厭ふべく粗雜であること、地價があまりに高くて市民の大多數である所謂中產階級以下の希望が全然充されさうもないこと等であります。

茲に田園郊外の主張が當然起ります。

四

田園郊外の主張は田園都市の主張に對し、或は相副うて主張されてゐるものゝやうであります。我國に於いては、時としてこの兩つの主張は相混同されて論じられてゐる傾向さへあります。

もともと田園郊外の主張は田園都市の主張があまりにも理想的であつて、目下の現實にその完全なる實現は到底希望することが能きないだらうといふ考へ方、或は都市の現在の發展膨脹の勢は將來の田園都市流の生活とは益々緣遠きものとなるばかりで、畢竟、田園都市は一つのユウトピアであるといふ意見から來てゐるらしくあります。

田園郊外の主張は、もとより、現代の都市のこのまゝの趨勢を以つて完全なる都市への發展だとは思つてをりませぬ。將來の交通機關の停止することなき發達につれて、益々住宅は分散するであらうし、當然分散すべきであるとするのであります。都市計畫思想の發達につれて、舊時の都市も自らその新しき都市としての自覺へ進み、今や全らゆる都市に於いてその内部の改變が起りつゝあります。住宅分散の傾向はその交通機關の發達につれていよいよ著しくなり、都市中央部に於ける惠まれた階級の高大壯麗なる住宅も、追々その高塀の外まで押し寄せる時代的大勢に押され、漸次都市の中央部を去つて郊外へ轉り、跡に高層有利なるビルディグ、商業取引生產の場所をのこします。近來の建築術の目覺しき發達はこのラディオ發明以後の世界を一層事務化し、利便化し、輕敏化しやうために必死の努力を加へて居ります。この傾向はまた益々都市内に於ける交通機關の發達を助成し、道路の發達はもとより、地上線、高架線、地下線等をそこに極力集中せしめ一個人一家族の邸宅はこゝに存在の可能性を漸次失つてゆくでありませう大都市の中央部から住宅の消え去る時代もさう遠くはありますまい。

從つて、住宅は先づその近き郊外の地に求め建てられなければならないでありませう。もともと、住宅はその一家族をその樣式の基調とすべきであつて、その家族の個人個人の敎養、趣味、信念等がよく家族的に訓練され調和されて、その和平健全を守らるべきものであります。本來人間は家族的生活を營むべくされてゐるものであつて、極度の孤獨も過度の集團も、倶にその心身の調和均整を破る

だらうといふことは當然であります。從つて、その住宅が家族のものである以上はその一個の住宅に就いての相當の自由は當然許されていゝのであります。家屋の廣さに程度のあるべきは勿論、その周圍を圍む庭園空地も相當に與へられて然るべきであります。從つて、寸尺の空地もなき都市中央部に於ける狹隘なる住宅又はアパアトメント風の住宅は、もとより完全な理想を實現し得たものであるとは言へません。理想としては、地價低廉充分利便であつて健康地である土地に、自己の家族の敎養、趣味、信念等の理想的の結晶である住宅を營むべきであります。

田園郊外の主張は即ちこの理想の土地を現代の都市に近き郊外に選ばうとするのであります。都市内にその業務を有つてゐる市民が、なるべく近き距離の郊外に住まうとするのは當然であります。

五

現代の都市の發展をこのまゝ是認する以上、田園郊外の主張は最も妥當であり賢明である主張であります。

しかも、大都市に於いては、その中央部に近接したる區域にその業務の都合上必ず住居しなければならぬもの、他を嫌つて必ずそこにのみ居住したいと希ふものが、數多くあることを考慮に入れてをく必要があります。激しき筋肉勞働に從事する者にしてその執務後郊外の地に電車に搖れて歸るにはあまりに疲勞を覺ゆる者、唯に目ぐるましき社會上の、多くは物的の所謂成功立身を求めて狂奔してゐて厭かない者、住宅に對する何等の觀念をも有たずして唯徒らに都市に於ける多くは低惡邪淫なる享樂機關に眩惑され、それに自ら心身を投入し陶醉せしめて悔いない者、貧困窮天の底にあつて郊外の住宅を手に入れるに由なく、さりとて都市に於ける安然なる居住の場所を得やうあてもなく、しかも唯空しく都市そのものに執着し戀々し、或は都市を一刻も離れてはその生活の道を失ふといふ種類の者等は、如何にその郊外の地が低廉にして健康地であり、よし又大都市に於けると同等の利便を與へられやうとも、そこに住まう資力意力俱になく、唯徒らに世を呪ひ苦しんで反轉するより外はないであります。加ふるに、將來へのこのまゝの趨勢はよし現在その郊外の地價が低廉であらうとも、年々著しく騰貴の傾向を有してゐるのであるから、貧しき者には其理想の土地も手に入れ難く、都市に於いて他よりも一層長時間一層激越なる勞苦を負はなければならぬ者が、最も都市に遠く、從つて利便の惠み薄く、車馬賃の高價なる土地に居住しなければならぬ事情になります。

しかも、現在の都市發展の勢は、今日の田園郊外を決して三十年さき五十年さき百年さきまでそのまゝの健康地、美はしき郊外として殘す筈なく、都市中央部の發展につれてその田園郊外も益々脅威を感じないではをれなくなるだらうとの怖れを抱かせるものがあります。加ふるに、近時の航空機、航空術等の驚嘆すべき發達は、戰術の恐怖すべき發達と相俟つて、一朝ことある日には、最もよき目標となり易き郊外區域は思ふも無慘な結果に導かれるでありませう。『このことに就いては、將來武裝なき都市は攻擊しないこと、その住宅區域は攻擊しないこと等の國際的規約が如何にかたく結ばれやうとも、結局、時に當つては無駄でありませう。』都市經營、又難い哉の嘆を發せしむるものがあります。

六

こゝに私の言はうとする田園都市の主張はこの田園郊外のよき精神とよき計畫とを、よりよく理想化し實際化せんとするものであります。

もとより、現代の都市をそのまゝ現代の田園へぶち撒かうといふのではありません。單に現代の都市のこの避くべからざる趨勢の一切を無視しやうとする所謂歸農運動でもありません。現代の都市に厭き足りない心は又現代の田園にも厭き足りない心であります。未だ完全に整理され得ない現代の田園へ、未だ不完全なる都市を置き代えやうとするのは初めから無謀な擧でありませう。

科學の發展は長く現代の田園及び農業をこのまゝでは決して棄てゝをくものではないだらうと思はれます。すでにその機運は、世界に明に動きつゝあるのですから、こゝに革命的な耕作機が、農作法が、發明發見されないとは斷言能きません。今のまゝの田園はあまりにも當然あるべき田園本來の意義と目的とを沒却してゐるやうに思はれてなりません。いつまでもこのまゝの田園經營法がつゞけられて、安んじて生活はしてゆけない狀態にすでになつてをります。こゝに新しく明るい未來が當然あり得るものと考へられます。

田園都市は先づ理想的に整理されたる田園を　文化的な利便至善なる種々の組織で經營しやうとするものであります。先づ大都市の無意識的なる膨脹をこれ以上急激に增大させることを意識的に避けやうとするのであります。即ち、程度以上の中央集權的な組織を避け、單に住宅のみならず、都市そのものに分散を行はふとするのであります。單に工業的都市商業的都市等とは限らず、都市の組織そのものを　或る程度の集團にわけやうとするのです。もとより、その集團の中央には一つの商業街工場地帶等を設けるのは勿論、その事務的地帶を取り卷いて、或る近き距離によき住宅を經營し、よき道路及びよき交通機關をもつて、その中央部へ三分、五分　多くとも十分間を以つて充分達し得るやう經營し、主婦女中等の日用品購買のためにも、又幼き兒童の通學のためにも、極めて利便であるやう計畫しやうといふのです。もとより、そこには、その他市民の時代生活に缺くことなき、文化的施設、例へば、公會堂や圖書館、學校、寺社教會　劇場　運動場公設市場、小中學校、その他の愉快な社交機關を設け、市民をして、樂み、心をきなく、その愉快にあづからしめるやうにすべきであります。かゝる集團より住宅までには、よく整理され耕作されつゝある、田園をゝき、明るき並樹、靜かなる杜林、美しき池川を自然のまゝに巡らせ、よき道　輕便なる交通機關を以つて不自由なく連絡をとり、利便と靜平とを兼ね保ち得るやうすべきであります。

かゝる集團を一つの組織とみて、この組織を必要に應じて、十、二十と集めたものを以つて、將來の大都市としやうとされたいのであります。集團から集團への交涉は、將來の交通機關の發展に俟つて、安んじて可なりでありませう。この集團のうちに一つの最大なる集團を以て大都市の中央と考へてもいゝでありませう。人口の增加は、又新しき一つの集團を增し計畫することに依つて、容易く賢く解決されるでありませう。將來に俟つべき自治精神の發達、社會道德の發達はこの偉大なる有機體を、歪みなく維持し保護してゆくでありませう。

七

この理想が或る人々には單なる嗤ふべき空想として受け取られるであらうことは認めます。理想としては如何にも立派ではあるかも知れぬが、今日目下の狀態には早速の役には立たないといふ人々には、現代の都市をこの最大なる中心の集團として、そのまゝに田園郊外の主張の通りの施設を計畫し、改造してゆき、今日以後の都市計畫に於いては、この田園都市の主張に基く計畫、即ち、今一つの新しき小集團を計畫し、進んで第二、第三と計畫を進め、現在、人口一萬乃至五萬十萬の小都市に於いては、今日以後その市街の雜然たる集塊的の膨脹を意識して避け、よろしく百年の計を立てゝ新しき文化的集團を附近のよき田園の地に計畫し、そこに、理想の田園都市を建設されるやう希望します。もと〳〵、如何なる都市人と雖も、田園を唯忘れ果てゝのみ、徒らに生きてゆくことの能きるものではありませぬ。本然の相にかへされたる人間の性は、全て、大地の和やかなる懷を慕ひ、綠の野を、綠の杜を、綠の丘を慕つてやまない筈のものであります。健全なる文化の發達は、言ふまでもなく健全なる社會思想、社會組織のうえにのみ、期待することが許されてをります。私達の日夜周圍に見聞きする多くの罪惡不德、亂倫の類は、多く現代の生活相の隱し切れない缺隙から漏れ出でる時代の塵、垢、あくであることは誰しもが認めるところであります。都市が惡德邪淫、卑俗の巢窟の如き感を抱かせるのも、多くこの都市生活の不自然さから來てをります。わけて、定職なく定住なき彷徨浮浪の徒が、その都市の底に蠢き喘いで、種々怖るべき地獄的なる企みをめぐらしてゐるだらうといふことはほんとうであります。

新しき田園都市の計畫は、先づ、住の解決であります。住の解決はひいて、衣食の解決となり、生活不安の一掃となります。生活相の安定は、よき生活意慾の喜ばしき伸長發展となり、社會思想の健全を招來します。都市生活の安定は、その國民道德の安定確立となります。國運の隆盛、期して待つべきでありませう。

理想は高く遠いからといつて、一笑に附し去ることは危險です。今日まで、この世界の文化を動かし進めて來たものは實に唯この高遠なる百年の理想であつたことは事實であります。この一見迂遠なる机上論らしく思へる田園都市の理想計畫を、唯徒らに看過し去らざらんことを希望する次第であります。

炬は高くかゝげて、堂々と、自信づよく歩むべきであります。國運の無窮なるが如く、この都市經營の大理想も當然無窮であるべきが望ましいのであります。國家百年の大計を確立し、斷じて、淺見私慾の徒に亂されざらんことを希ふべきであります。

× × × ×



創作

子供の世界

八畑幸二

生後滿一年と三ケ月。まだ歩かない。俗に云ふイザリ這ひをして、四疊半一廻り位樂にやる。

若い兩親に似ず一重瞼だ。睫は氣持ちよく長い。心持ち頭は大きい。顏色は青白い。若い兩親は、そのまた親に、よく子供の顏色で怒られる。

『少しは日向に出してやれ。』と、子供の祖父さんがいふ。

『出して居るんですが……』若い子供の父は、自分が務めに出た後は、洗濯、掃除、子供の晝寢、風呂屋行き、夕飯の仕度に追はれる子供の若い母に、どうしてゆつくりと日向に子供を出して、呑氣に歌でも歌つて居る暇があるものか、と幾分同情しながら答へる。

子供の祖父さんは、今度は、子供の若い母を見ながら云ふ『お前は、日向に出すと色が黑くなると思つて居るだらうがお前が、氣地の黑いのを白くしたい量見だからいかん。おやぢ——子供の若い父を云ふ——が生れつき青いのだから、尙ほ今のうちから日に當てんといかんよ。第一、日當りの餘りいゝ家でもないのだから、外の日光が必要だよ。』

若い父は『おやぢ——子供の祖父さんのこと——は咁いことをいふ』と考へる。日光にあてることは贊成して居る。し

かし、ゆつくりした暇を持たせられないのを、若い子供の母に氣の毒に思つて居る。その若い母が、生れ附き色が白くない事を、一言のもとに醜星を指して、日光にあてる事をいふ親の言葉に苦笑する。酒臭い親は、やはり自分の事までも心配して居る。現に俺——若い父自身のこと——の色の白いのを心配して居る。

青白い皮膚を荒らす鬚をなでながら若い父は答へる。

『お父さん。私のとこの二階はよく日が當りますよ』

『さうか。それぢや二階で一日遊ばせとけ。』

子供はガサガサ這ひながら祖母さんと遊んで居る。若い母はそれを見ながら、なぜ歩かないのだらうと考へる。明日から近所の花畑まできつと抱いてゆかう。さうしたら色が黒くなつてくれるだらう、と獨りで思つて居る。

子供は這ふのをやめて、若い母を振り返つて見た。

『おしつこ?』

『あん』

若い母は、あはて、縁側に抱へて行く。

『小便を教へるのか?』祖父さんはまた尋ねる。

『えゝ、智恵がつく一方で困ります。なるだけぼんやり育てたいんですが。』

『いゝさ。馬鹿な子は教へても駄目なんだから。一時流行つた天才教育とやらをやつてみちやどうだい。』

祖父さんは大きく笑ふ。

『天才教育も體が丈夫ぢやないといけない樣ですよ』

『色さへ黒くすりや、申し分のない丈夫なものになるよ。』

子供は、色が黒くなくちやいかんと祖父さんは思ひ込んで居る。若い父は、天才教育のことを考へる。自分の頭腦をすぐ對照にとつて終ふ。天才兒の兩親は必ずしも天才ではなかつたらう、とかつて讀んだ本のことを思ひ出さうとした。がなんにも出て來なかつた。

二停留場歩くと、代る事にして最初母が子供を抱く。父は煙草をふかしながら、兩手を妙に縮めて、電燈に眼をやつて默つて抱かれてる子供に話しかける。

『坊や』

『あん』

『あつかはどこ?』

『うん』右の手が突き出される。

若い母は重さうに抱きながら、呉服屋の店先には忘れず歩みをゆるめる。その度に、若い父はも少しなんとか生活を變へて行ける樣にしたいと考へる。それもみな金だなとため息を附く。も少し働いて、も少し收入の多い仕事はないか。子は大きくなつても、自分は縮まつて行く許りだ。子供の母は、子供の衣類について考へて居る事はよく解つて居るが、どうも出來ないのを、父は殘念に思ふ。親子三人が、また上の親の脛に噛りついてゆかねば、日干しになるとは情けないと考へる今になんとかするの決心はある。

若い母は、不自由な生活の事を考へる前に、あの布は此の子に似合ふけど、どしばり染の金紗を見て歩いて行く。あれが五尺あつたら子供のちやんちやん着が出來る。一尺どの位だらう。薄く綿を入れてふんはり着せた子供のちやんちやん着姿をもう頭に描く。そして、だが金がない事に氣が附く。しかし殘念相な顏つきもしない。若い父同樣、今に……』と

思つて居る。

寢室の二階は硝子張りだ。赫い斑模様入りの窓掛けが、だらりとゆるんだ針金の一本にさげてある。

何度も乳の呑み逃げをやつて、白ネルの寢衣を着た子供はガサガサ這ひ出す。若い母は、子に乳をやる片手間に讀んで居る雜誌を投げ出して、片手で子供をひき寄せて床の中に抱き込む。子供は喜んで聲を出して笑ふ。そして、チビチビ乳首をしやぶつてはくるりと起き返つてまた逃げだす。何度もそれが繰り返へされる。若い父は、二人の眠り前の騒ぎを他所に、服も脫がずに、二人の床の側の疊の上に長くなつて、兩手を額の上に組ませる樣に乘せて默つて居る。

『お父さんは？』と、子供に父を呼ばせやうかと考へたが、こんな時はそつとしておかないと、氣嫌が悪い事を知り抜いて居る若い母は皮肉にも、

『お父さんのお鼻をきいきいしておいで。』といふ。

一重瞼の眼は驚く程物分りのする感じをもつて居る。母の言葉を眼が見て知る。そして父の方へガサガサと行く。

小さな手は、父の口の方へ延ばされる。その儘身體全體が父の體によりかゝる。そして顏をのぞき込んで『あん、あん』といふ。

金に眼のない、兎口の跡があきらかに解る天神鬚の支局長の馬鹿野郎の事を考へて居る。あんな馬鹿が、豪さうな顏して此の世が渡れるのが不思議だ。世間でも馬鹿は充分知り抜いて居ながら、馬鹿は馬鹿なりの取扱ひをして居るかも知れぬが、それでも支局長として居るのが不思議といふよりも不合理だと考へる。そんなにいやなら止めたらいゝぢやないか止めたいのはよく知つて居るが、やめたら喰つて行けない。少し許り、此んな家庭を造る前に、買ひためた本を賣れば、二月三月は喰へてもその後はどうなるか解らぬ。

天神鬚の馬鹿の顏が見たくなくなつて、

『いやだから止めます』と、若い父は先輩に相談に行つた。

『止めるのはいゝが、現在の職を移動させて新らしい口を見附けるのは、こちらにも充分それを取捨して行ける力があるが、一旦浪人となつて終へば、ヒケメがついて面白くない。第一、獨身ぢやないのだから、死んだ氣でもう少し務めろ』

眞面目に心配してくれる先輩にかう云はれた。だが嫌なものは嫌だな……。

子供の呼び懸けに、ポツンと想ひは切れて終ふ。

『うん。また起きたのか。ねんねしなさい。』

子供は二三日前覺えた、顏を左右に振る『嫌』の表象をする好惡は人間の本性だなと解り切つたことに感心する。

若い母は雜誌の『亡兒の追想』といふ所を讀み出す。そして身につまされる。子を失つた經驗があるのだ。

今居れば此の子より一つ年上の年子だ。しかし男の子だつた。骨盤狹小で脅かされて、胎兒はいぢけて終つて、胎動も現存の子供の樣にしなかつた。九ケ月目に人工早産した病院の産室が思ひ出される。よくやつて來ては、大きな腹をかゝえた品の惡いおかみさんと、同じベッドに寢ころんで話して歸つた見たところ二十位若い亭主。また、姙婦が口ぎたなく叱り飛ばせば、一所になつてその子を叱つた父の馬鹿さ加減。あの叱られ通した子はたしかに父には似て居たが、姙婦には似もつかなかつたとこを見ると、繼子だつたに違ひな

い。こんなことをまた考へ出した。

年下の男を亭主然と持つて居たおかみさんと同時に、同室で、一聲早く男の子は生れた。おかみさんは女の子を生んだ一聲は高かつた。そしてそのまゝ連れて行かれて影も見せないで死んだ男の子。若い母は此處まで考へて、あの時の若い父の態度をにくゝ思つた。

『死に顔も見せなかつたと憤るが、豪ら相に今は俺をせめるけど、あの時死んだ子を見せたら一ぺんに逆上して居るよ。』

『そんな馬鹿なことがあるもんですか』

こんな問答が、その後屢々繰り返へされた。若い父は、醫師と看護婦と附添い婦と家人と相談して飽く迄秘密にしたことを萬全の策だつたと信じて居る一方に、若い母は死兒を見て逆上する樣な私ではないといさゝか不滿であつた。しかしその後、第二の我子を生み、それに對する自分の心的過勞から推すと、たしかに逆上したかも知れぬと此頃は考へる樣になつた。

月足らずの子供は骨あげもしないといふ迷信から——關西の風習に從つた若い父を恨みもした。しかし、あの兒は死ぬに決つて居たのだらう。赤い着物は一枚も作る氣がしなかつたので、全部白づくめにした。白にするのは西洋の子供にかぎる。看護婦さんがあとで云つた『赤い物は少しもなく、全部白づくめだつたのは凄い樣でした』と

今の子供の時は病院は一度でコリたから家を産室とした。町内並みに近所の婆さんを頼んだ。さうしたら如何だらう。産も樂だつた。子供も丈夫だ。

骨盤狹小と云つた醫者を今更らにくみたい。先の子も、私の氣持ちが確に生めると決心して居たら丈夫だつたに違ひない。——

若い父の顔をおもちやにして居る子供が無性にいとしくなつたので、若い母は急いで起き上つて抱きかゝえた。そして乳房をその口に押しあてた。子供は力强く吸ひついた。子供の脊中を叩きながら。

『おゝいゝ子。いゝ子！』

何度も若い母は云つた。死んだ子に云へなかつたのを一所にして云ふ氣持ちで。

偶然、若い父も亡兒の事を考へた。しかしそれは餘りに慘酷にしか思へなかつたのでつとめて考へまいとした。興奮した若い母の心持ちを一番可愛相に思つた。

『どうしたんです』

『いゝや。少し弱いから小兒室の方に預けてあるんだよ』

『さう。私、顔が見たい。保護箱に入れたまゝでいゝから此處に連れて來て下さらない』

『そんなことが出來るもんか。室の温度も喧しくして、先生が大事に育つ樣にして下さつてるのだ』

『さう』

半信半疑の眼光を、窓そとの日向葵に避けた。その時、子はとうの昔死の世界に昇天し、骸は煙を空間に殘して灰となつて居た。

『あなた』

『なんだ』

『何を考へて居るんです』

『何といふ事はないが、かうして居るのが一番樂なんだ』

『服でもおぬぎになつては？』
『このまゝがうるさくない。何時頃だい。まだ九時前か？』
若い母は起き上つて机の上の時計を見た。九時五分前だ。
『五分前です』
『うん』
『私、いやになつた』
『何が？』
『色が青白いと、祖父さんが怒りなさるけど、色を黒くしてやる暇がないんですもの。あなたは歸りがおそいし、日はもう暮れて終つてますからね。』
『それぢや日曜だけでも抱いて遊んでくれといふ謎かい』
『まあそんなものですね』
『そんなものはよかつた。それぢや、そんなものにきめ様かね。しかし、日曜なら、家中で出掛けて、親子三人が日にあたらうぢやないか？』
『さうして下されば尚ほ有難いんですが……』
謎も解けた。若い父母はもう死兒の追想も何處かに消へて兩手を思ひ切り擴げて寢入つて居る子供の寢顏を見入りながら、
『まるで女の子とは思へない風ですね』
と、若い母は云つた。
『これで大きくなつたら、どうだらう。亂暴な奴になるか知れないな』と、若い父は、『女の野球團來る』の新聞記事を連想して、少し困つたものが出來たなと思つた。
『この子は、あなたに似て本が好きですよ。今でも晝間、繪本を見ながら何か獨り言ひながら、おとなしく遊びますよ。そして晝寢させる時は、必ず私に讀めと、そこいらにある雜誌を持つて來てくれるんですよ。何でも解る樣に思へて仕方がないんですよ』
『早稻(わせ)かな。どつちにしても體だけは丈夫にしてやりたいね』
若い父は、こはごは子供の指を弄んだ。そして今度の日曜は奈良公園の芝原を這はせやう。鹿の糞を口に入れかけてきつと若い母を驚かすに違ひないと、獨り嬉しがつた。(終)

櫟の木まばらにからびし
秋くさの荒れしこの
原ひとは知らなく

俳壇



溪舟選

案山子

雨の落葉かゞしの笠にへばりつく　李陽
川風に吹れ吹るゝかゞしかな　清々果
隣田のかゞし我田の引板かな
かゞしの笠いつに飛たる嵐かな
弓もたぬかゞし痩田の烏かな　笠仙
かゞし仰いて烏は笑ひけり
寺領田の刈おくれたるかゞし哉　一雨
風のかゞし脚丈は吹れながらゆく　暮材
烏おどしと我父とゐる故郷かな
旭の色の露の中なるかゞしかな　懸魚
烏羽を横に切て田圃のかゞし哉
弦なしの弓も嵐のかゞし哉
悠然と山見てくるゝかゞしかな　浩志廬
烏雀のあなづりに老てかゞし哉
玉山已に崩んとするかゞしかな　南薫
松風の案山子に落る門田かな
山時雨かゞしに塞し籠の田　幡中

古蓑に肋らあらはのかゞしかな
かゞし死と蓑とゞめたる古田哉　射英
北山に倚りかゝりたる案山子哉　里宇太
俄雨かゞしの笠を叩きけり　朧月
功成り名遂げて穂り田のかゞし哉

夜長

ほど燒の薯夜長しと思ひけり　泊金
簗の音きゝつゝ更くる夜長かな
闇の中に見ゆ山の灯も夜長なる
物縫して人なつかしき夜長かな　朧月
爐に獨り讀更したる夜長かな
慰みの賭け事も倦み夜長なる
晴れてまた雨や夜長の街路樹子　金英
ごや〳〵と人通る橋の夜長かな
鍋の物の煮ゆる音して夜長かな　雫人
僧とゐて濃き茶を汲ぬ夜の長き
屋敷町夜長を通る人語かな　射英
夜長人物書き更かす灯かな
夜長人の窓に雨來し二更かな　風帆
夜長さや灯して書庫に捜し物
間切れ雲長夜の月は出てゐたり
さつを
天の川吹晴れて白き長夜かな
談義の座夜長の燭を灯したり　琴川
引舟に夜長の川を溯りけり
葡萄棚の上に夜長し天の川　滿々
電車降りて夜長の灯植木市

水亭に人ゐて夜長話しかな　紫星

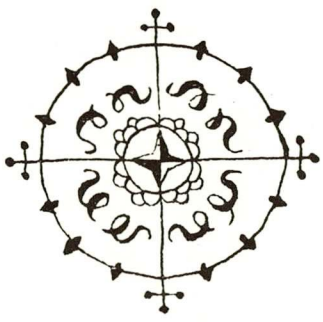
畵室にて

繪の具且溶き且描く夜長哉
木犀のふと匂ひきぬ門夜長　懸魚
市中の寄席の灯も夜長哉

次號課題

◇『夜寒む』『霜』各五句まで、各題を別紙にしたゝむる事
◇締切　十一月十八日
◇屆先　北區堂ビル三階日本建築協會

× × × ×



自然の蝕ばみ

溪舟

◎こんどの募集句は、私の手元で多く吟社の人たちのを集めたものであるが、何うも佳作に乏しかつたのは遺憾であつた。秋は俳人たち得意の季節で、俳想もまたサビを帶んで湧いてくるのだから、もつと佳い句がありさうなものと思つたが、それが殆んどないのは意外のことであつた。

◎私に云はせると、こゝに選抜した五十句からの中でまづ、認めていゝと思はれるのは、

弓ももたぬ案山子痩田の烏哉　笠仙
鳥雀のあなつりに老てかゝし哉　浩志盧
ほど焼の窘夜長しと思ひけり　泊舎
葡萄棚の上に夜長し天の川　満々

位なるのものである、而もこれらとて傑出したものとは考へられない。

◎句にもつとサビがほしいものだ。

◎サビといふのは、骨董的なサビのことではない。

◎このサビといふことは、實は文字の上ではチヨツと説明しにくいところがある。

◎一たい俳司の味ひは、これは日本人の持つてゐる國民性獨特のもので、歐米人の頭にはトテも了解出來さうもない趣致情操である。歐米人ではない、同じ東洋人の支那人にもちよつと分りかねるところのものだ

◎東洋人のもつてゐる蒼古閑寂な詩的情操は、支那人も日本人もよく諒解してゐるけれども、日本人のこのサビといふやつは、支那人にも徹底的には分るまいと思はれる。

◎サビとは何ういふ心持か？

◎サビとは、「自然」と「人間」との汐合に生れる或る色合、味ひ、匂ひであつて、つまり「自然」が「人間」を蝕ばみ、あるひは蝕ばまむとするところに生れる「力」の現れである。

◎——と云つたら、更に分らなくなるであらうが、要するに、日本人が詩的に自然の力を認めて、無反抗的にそれを樂しむ——自分を小さく見て、自然に服從する、落ついた、スナホな心持とでもいへばいゝかもしれないが、なほそれでも說き足らない。

◎サビは、消極的なヲビしさの中に、而もシツカリした自然觀があつて、必ずしも自己全部を沒却投棄しない。消極的だが、悲觀的でない、消極的樂觀である

◎この間、古俳書をたくさん賣るといふ人があつて私も案内をうけて出かけていつてみた。

◎なるほど澤山の書物だつた、私もほしいと思つたものが二三に止らなかつたが、私はこの賣立の値段について、不審でならなかつたことは、版本よりも寫本の方がズツと安いことだ。

◎版本より寫本が安いことは、何も俳書丈けのことではないのだが——

◎なぜ、木に刻して何冊も刷つたものの方が高くて一字一字克明に昔の人が手で書いたものの方が安いか何うも合點がゆかないしだいである。

◎米にしても、手搗き足搗きの白米はうまい、それで高い、然るに古書の場合（有名な人の手寫したものは格別である）は、砂をまぜて機械で早く搗いた米の方が高いといふ事になる。

◎木版もの、高いのは、絕版物稀版物であるからだといふが、手寫の本は、それよりも稀なものであらねばならぬ、然るにそれが安い、私は寫本を多く買つてきた。

◎私は、版本よりも、更に寫本に多くのサビの味ひを知る事ができる。寫本は、その出來が惡からうが美からうが、兎に角人間の生きた肉體から直接に生れた仕事なのだ版本は、その版木（ハンギ）の上に文字が刻りつけられる前、則ち人間の手で直接紙に文字が書かれた時に、ほんとうの尊とい肉體的仕事が終りを告げてゐる。それが、モハヤ版木上に刻りつけられてしまふと、それからは機械の仕事に移る。私は、直接肉體から生れた仕事の結果を敬んじて、機械の仕事を尊ぶ氣はなりえない。

◎サビは、自然と人間との親しみが濃い場合ほど、多くのゆかしさ懷かしさがある。人間直接の仕事である寫本が、自然に蝕ばれた趣致の濃さ深さは、人間間接の仕事である版本の場合に比べて、より以上にゆかしく懷かしいものでなければならぬ。

◎古人を偲ぶのに、その遺愛の什器に對して手澤存すといふ言葉がある。人間直接の生活のあとを、自然が蝕んだサビを云ひ現はすのに、これほど巧妙に云つた語も少いと思ふ。

大阪ビルディング新築工事概要

大大阪市の心臓地帶とも云ふべき中の島の中央に聳ゆる大建物は我『大阪ビルヂング』なりとす同ビルヂングは昨年四月中旬地鎭祭を擧行してより纔に十七ケ月にして其全工事を終へたり建築は渡邊節氏の設計に成り材料は主として內國製產品を蒐め絕對耐震耐火の構造とし其內外の裝飾は通じて簡素を旨とせしと雖も其要部に於ては放膽なる意匠と自由なる彫塑を以て豐かならしめたり。建物の間口は四拾八間奥行は貳拾七間此建坪壹千貳百餘坪地上八階建高さ壹百尺是れに地下室及屋上建物を加へたる總延坪は約壹萬坪を算し其大さに於ては實に關西第一と稱すべく而かも諸般の新設備に至りては未だ他に比肩するもの或は類例とすべきものあるを聞かず。左に其概要を摘記せん。

構造

鐵筋『コンクリート』造にして縱橫に多數の耐震壁を造り絕對耐震耐火の構造とせり。

用途

第一階　大阪商船會社大阪支店、住友銀行、攝陽銀行、大阪貯蓄銀行、郵便局、大阪ビルヂング事務所等諸貸室にして道路に面する部分及內部北側左右大廊下兩側は飾窓とす

第二階　大阪商船株式會社

第三階　同上

第四階　宇治川電氣株式會社

第五階　日本窒素肥料株式會社、大阪陶業株式會社、渡邊建築事務所、川西倉庫其他一般貸事務室

第六階　大阪鐵工所其他一般貸事務室

第七階　日本電力株式會社東半部を英國領事館、サン保險會社、大東瓦斯會社其他一般貸事務室に西半部を倶樂部室食堂、厨房理髮室、球戲室等に充つ

第八階　諸機器汽罐電氣室等を除き其他は貸書庫及貸倉庫に使用す

地下室　換氣及冷房裝置　各重要なる室には器械的換氣裝置を施し夏氣は冷期を以て室內の溫度を降下せしめ冬期は熱氣を以て之に代らしめ溫度の上昇に資す

『オゾーン發生機』　換氣用の空氣に『オゾーン』を發生せしめ建物內の空氣を常に新鮮ならしむ。

大　鑿　井　地下室に徑拾四吋深四百尺の大鑿井により一晝夜貳萬九千石の地下水を揚げ以て空氣洗滌冷却に備へ市水道を併用して消火用其他一般雜用に充つ此鑿井の水量は一切の用途に供するも尙ほ餘りあるを以て絕對斷水の憂なし。

ディーゼルエンヂン　地下室に百五十馬力の『ディゼルエンヂン』を備へ動力の補充に充つ

防火及消火裝置　各部共絕對防火構造なるの外尙ほ各階の要所に二重自働防火扉を設けて非常時には各階は階段室の外東、西、中央の三區劃に全階を自働的に三分するの裝置とし消火栓は各階に五箇所宛各百五十尺の『ホース』を備へ屋外にも更に二箇所の消火栓を設く。

眞空掃除機　は各階に六箇所宛開口し建物內の塵芥を全部地下室の容器內に吸收し常に清淨を保たしむ。

『メールシュト』　各階昇降機室に投入口を設け一階の郵便函に蒐集す。

便　所　洗滌式とし尙ほ絕對に臭氣の放散を防ぐ爲めに各部より『ダクト』を以て『パイプスタック』內に導き屋上に煽風器を据付け完全なる排氣を爲す。

地下室排水設備　床下に『タイルドレーン』を縱橫に布設し要所に『サンプ』を設けて地下湧水全部を二つの水槽に集め之れを屋外に排出す

製氷冷藏裝置　は八階厨房の一隅に設けて食料品の冷藏及食用凍氷の製造に供す。

電氣設備

電　燈　數、一六四九燈、差入口九四一個器、具は間接及半間接照明燈を使用す。

電　話　は共電式にして局綿引込容量

千貳百回線にして引出口は總數一、七〇六個を有す。

自働交換電話機　は大阪商船會社用として五拾個を備ふ。

電氣時計　親時計一個と小時計壹百個を備へ廊下、廣間其他主要貸室に取付く。

非常報知機　は電氣室、ポンプ室、宿直室及大阪ビルヂング事務所に報告し得る樣押釦を各階消火栓の位置に設く。

配電所設備　は左の通りとす。

電燈用變壓器　容量　百キロ　貳臺

動力用　同　同　參臺

外觀

近世式にして特殊の手法を施し一階正面は龍山石を用ひ之れに自由なる彫刻を加へ二階以上及側面は全部特殊の耐震裝置により特製タベストリブリツク』を以て積上げ軒部は『テラカツタ』積とす。

設備

昇降機　は六臺外に厨房用一臺何れも防火扉内に裝置す乘客用昇降機は急行と普通とに區別し尚ほ乘客の繁閑を計りて時々其按配を變更し混雜を防ぐ。

暖房　は蒸汽式とし地下室に五臺の汽罐を据付くるの外猶電氣暖房裝置を併用し各室に放熱器を配置す。

温度調節器　は各放熱器に特殊の「バルブ」を設け寒暖計に連絡して室内の温度を自働的に一定し過熱過冷を防ぐと共に燃料の節約に資す。

電熱用同　同　同　參臺

避雷設備　は煙突上其他六箇所に高さ二十尺以上の避雷針を配置す。

諸設備監理裝置

第一階の一室大阪ビルヂング事務所に於て昇降機の運轉狀態、暖房汽罐、各種ポンプ冷熱送氣狀態、冷温水の配給狀態、電氣の使用狀態等を居ながらにして其詳細に知ることを得機宜に應じて其場所より直ちに指揮を與へ得る裝置を行ふものとす。

本工事用建築諸材料は主として内國表産品を撰定使用せるものにして從來外國製品に限られたる鐵筋材『テラカツタ』『プラスター』衛生器具防火扉、昇降機、換氣用諸機械、左官材料等全部又は其大部分を内國製産業者に製作せしめ何れも滿足なる製品を得たり。



◎各省廳舍の建築準備費

既報中央官衙建築準備委員官制は、閣議を通過して既にその人選も終了し、目下内閣に廻附せられて居たが、最近正式に發表される手筈であるから、その第一回の顔合會は近日中に開會せらるべきであらう、但し明年度豫算としては準備費（修繕費、設計費等を含む）として、大體七百萬圓を要求することに爲つてゐるから、同會に於ては豫算に關してよりは、寧ろ議院燒失に伴ふ農林、商工省の關係もあり、主としてその計畫に關するものが論題にならうとられてゐる。

◎市街地建築法緩和規定

内務省は都市の美觀と防火衛生の完璧を期する目的で本年三月市街地建築物法の緩和規定を設け現在本法其他を適用して居る六大都市以外の中小都市計畫法を實施しつゝある四十一都市全部に該緩和規定又は本法を適用せしめんとし、過それ等の各都市に對する調査及び希望を照會する所があつたが此程札幌、長崎、佐世保等を除くの外何れも實施方に就ての申請並に回答があつたので目下同省都市計畫課に於て鋭意整理を急ぎ遅くも來る十一月中旬頃までには一括して指定勅令する方針であると

而して本法並に該緩和規定は以上の如く各都市の申請に依つて初めて指定するのであるが但し現在本法を適用中の大都市に接續する地例へば大阪市に隣接した堺市又は大阪、神戸兩市の中間にある尼崎市の如きは假りに内部の都合に依つて緩和規定の適用を希望するとしてもそれ等は矢張り大都市の外郭を爲すものであるから本法の全部を適用せしむる筈であると

◎官衙建築委員會官制

中央官衙建築準備委員會官制は二十二日勅令を以て左の如く公布された

第一條　中央諸官衙建築準備委員會は大藏大臣の監督に屬し中央諸官衙及其の附屬建造物の營築準備に關する事項を調査審議す

第二條　委員會は會長一人及委員若干人を以て之を組織す

第三條　會長は大藏大臣を以て之に充つ委員は左に揭ぐる者を以て之に充つ

一、關係各廳高等官
二、東京市長
三、學識經驗ある者

前項の委員は第二項に揭ぐる者を除くの外大藏大臣の奏請に依り内閣に於て之を命ず

第四條　會長は會務を總理す
會長事故あるときは大藏大臣の指名したる委員其事務を代理す

第五條　委員會に幹事若干人を置く大藏大臣の奏請に依り内閣に於て之を命ず
幹事は會長の指揮を承け庶務を整理す

第六條　委員會に書記を置く大藏大臣之を命ず
書記は上司の指揮を承け庶務に從事す

附　則

本令は公布の日より之を施行す

◎小學校舍の耐火震建築

本邦の小學校舍の建築は大部分木造で防火耐震といふ樣な事を加味して建築したものがなひので文部省は今回震災豫防調査會で發布した案に基き將來成るべく校舍新築又は營繕工事されたしとの事を本縣にも通牒して來が本縣の小學校の現在の狀況を見ると鐵筋で作られたものは唯一つ上伊那郡宮田小學校あるのみで其他に鐵綱にてコンクリートと云ふのは南安小倉澁明小學校等を筆頭として相當に存在し火防上から考慮して防火壁を設けられて居る學校は下伊那郡に二三あるが本縣では文部省の右通牒を俟つまでもなく現在新築さる學校等に對しては出來得る災害を免る方法を講ずべく指導して居る譯で今後も一層此方法に據らしむべく方針を樹てたいと云つて居る。

◎建築會社の收支

八ケ月の永い日數を費した復興建築會社も漸く内務大藏兩省の認可を受けたので明二十五日午後三時から丸の内銀行集會所に賛成者百餘名を招致し中村

市長及び設立に奔走した實業家から今日に至るまでの經過を報告し會社の定款並に收支計算書を提示して贊成を求め一兩日中に株券の公募に着手する事となつた而して最も危惧されてゐる會社の損益に對して聞く處はよるに初年度から三年度までは營業費創立費、各種登錄稅等出費割合に多く每年より補給を受け四年目より利益を擧げ六年度には市より補給されたるもの全部を償還し尙ほ若干の積立金をなす豫定であるがその收支概算は左の如くである

第一年	
營業積立	一、一九五〇圓
株主配當	二〇〇、〇〇〇圓
計	二一一、九五〇圓
市より補給	二一一、九五〇圓
第二年	
營業利益	一五〇、一一三圓
法定積立金	七、五〇六圓
株主配當	三五〇、〇〇〇圓
差引不足	二〇七、三九三圓
市より補給金	二〇七、三九三圓
第三年	
營業利益	四二六、〇三九圓
法定積立金	二一、三〇二圓
株主配當	五〇〇、〇〇〇圓
差引不足	九五、二六三圓
市より補給	九五、二六三圓
第四年	
營業利益	七〇三、一八四圓
法定積立金	三五、一六〇圓
株主配當	六五〇、〇〇〇圓
市へ償還	一八、〇二四圓
差引	なし
第五年	
營業利益	一、〇〇三、六四二圓
法定積立金	五〇、一八三圓
配當	八〇〇、〇〇〇圓
市へ償還	一五三、四五九圓
差引	なし
第六年	
營業利益	一、二二三、〇六三圓
法定積立金	六一、一五四圓
配當	八〇〇、〇〇〇圓
市へ償還	三四三、一二三圓
折半 市のだめ積立	九、三九三圓
額 會社特別積立	九、三九三圓

以下每年市と會社との兩方に第七年に一八九、七〇七圓第八年に一九一、九五九圓第九年に二〇〇、六五八圓第十年に二〇九、三四五圓宛を積立てる豫定である。

◎議院本建築完成を繰上げ

貴衆兩院燒失に伴ひ大藏省營繕管財局で攻究一結果年額二百五十萬圓づゝ增加すれば大正廿三年度に兩議院本建築が完成すべき豫定が大正廿年までに短縮され三ケ年間繰上げられるがそれ以上の繰上げは不得策であるとなし大正二十年度に繰上げることに大體決定したから近く主計局に對し年割額增力の要求をなすにすである、なほ同建築の完成期繰上によつて生ずる利益は年額約三十五萬圓づつで其主なるものは次ぎの通りである。

假議院一ケ年維持および修築費一九〇、七七七圓▲本建築▲事務費一〇七、六〇〇圓▲本建築錆止および動力費一、一〇〇〇圓▲本建築材料保護費三〇、〇〇〇圓

假議院備品費

議院假建築の備品費は貴族院卅萬圓、衆議院四十萬圓合計七十萬圓であるがこれが財源については第二豫備金の殘額六十萬圓を支出し不足の分は責任支出とすることに大藏省內の意見は大體一致してゐるが濱口藏相歸京の上最後の決定をなすはず

◎政府の住宅政策案

住宅政策に對しては內務省は最も力瘤を入れ大正八年以來全國の住宅組合にして每年平均七八百萬圓の住宅資金を融通し頻に住宅難の緩和に努めてきたが尙未だ徹底的緩和をみず住宅金資融通申込額は每年住宅資金融通額の約十倍に達しつゝあるといふ狀態で實際的效果は極めて微弱なものである上住宅資金の融通が最も公平に行はれてならない憾樣がある。しかしてその重なる原因は住宅不足數の調査困難なるに基くものである即ち內務省が住宅資金の配布額を決定するに當つて最も參考とすべき材料は各府縣の住宅不足數にあるが兎角各府縣の住宅不足數に關する答申が適當でない、この點は當局は十分調査の困難なることを認めて從來府縣の答申をその儘參考材料としたものであるがこれが實際的價値については內務當局も大に考するの必要を認めつゝあつたが今回これ等の事情が原因となつて內務省は徹底的住宅調査の計畫を樹てることとなつた而して右計畫はよれば各戶別的に極めて微細に亘つて徹底的住宅調査を行ひその結果によつて住宅政策を根底的に建て直さんとするものであるが內務省の豫想によればこれを行ふとすれば約三百萬圓の經費を要するが此計畫の斷行はよひて社會政策上重要なる材料を得ることができると稱し目下この計畫に關する具體方針に就て當局者の語る處によれば十月一日全國一齊に行はれんとする國勢調査の際同時にこの調査も行ふを最も便宜とするとがふ說もあつたが內務省の住宅調査は極めて微細に亘るものであるから國勢調査の如く簡單には實行不可能である若しこれを斷行するとすれば徹底的住宅政策が行はれるりと共に副產物として各種の社會問題に關する生きた材料が得られるが唯問題となる處はこれに要する三百萬圓の經費であるが何れにしてこの問題は是非とも解決したい意向である。

主要建築材料値段

◎耐火リノリウム　市内施工
大阪耐火リノリーウム會社
チョコレート色　四分仕上坪　八五〇（円）
褐　色同　同　八、五〇〇
赤　色同　同　九、〇〇〇
青　色同　同　三、〇〇〇
マグネシアセメント市内倉庫渡し　一トンニ付　九五、〇〇〇
ドロマイトプラスター　同　八、〇〇〇
一號品　一タル四切半　七、〇〇〇
三號品　同　同
ストロプロック（模造天然石）市中工事　八五
寒水石大理石類　尺坪　一、二〇〇
花崗石類　同　同
防水劑ポースイ　一、五〇〇
三封度入　二、三五〇
五封度入　二、六〇〇
四〇封度入

◎リノリユーム　英國チーアン製
奥村重兵衛商店
巾六呎　長九〇呎（十五坪巻）　X　一、九ミリ　一坪ニ付　七、八〇〇
E　二、二同　同　八、六五〇
B　三、〇同　同　三、四〇〇

◎ウオールボード　英國ゼームス純製
一坪　四、二〇〇
寸法　巾三呎　巾四呎　長六呎　三呎巾　長九呎　長八呎

◎メタルラス（和製）
廿六番　巾二呎長六呎　一枚　〇、四八〇
廿四番　巾六呎長六呎　同　〇、五五〇
廿　番　巾三呎六六呎　同　三、〇〇〇
十八番　巾三呎長六呎　同　三、八〇〇
十三番　巾五呎長六呎　同　四、八〇〇

◎壁　紙　巾一尺七寸　長三十六尺（張上約一坪五合）　一巻　一、〇〇〇以上各種
英國製
米國製　巾一尺五寸　長五十三尺（張上約二坪）　一、二〇〇以上各種

◎金屬天井　一巻　一、二〇〇以上各種
張手間　一坪　一圓四十錢以上
材料　蛇腹　逃板付　一坪　三、〇〇〇以上
同　逃板ナシ　同　一〇、〇〇同
張工貫　三、〇〇同

◎日の出印便利瓦　日本建築紙工　大阪出張所
半號　巾三尺二寸　長七十二尺　附屬品及ペイント添　一四、五〇〇
一號　一巻　同　一七、五〇〇
二號　一巻　同　二一、五〇〇
三號　一巻　同　二五、五〇〇

◎鶴印便利瓦
半號　一巻　巾三尺二寸　長七十二尺　附屬品及ペイント添　一三、八〇〇
一號　同　同　同　一五、五〇〇
二號　同　同　同　一八、五〇〇
三號　同　同　同　三、三〇〇

◎日の出印砂付便利瓦
半號　一巻　三尺二寸　長七十二尺　附屬品及ペイント添　二、〇〇〇
一號　同　同　同　九、〇〇〇
二號　同　同　同　三、〇〇〇
三號　同　同　同　二七、〇〇〇

◎日の出印建築用紙　ピルヂングペーパー
一號　一巻　巾三尺二寸　長七十二尺　三、〇〇〇
二號　同　同　同　四、二〇〇
三號　同　同　同　五、三〇〇

◎日の出印パーマネントルーフ井ング
一號　巾三尺長三十六尺　三十六ヲ以テ一巻トス　坪平方尺二七、六〇〇

◎日の出印衛生疊下用紙
一號　一巻　巾三尺二寸　長七十二尺　三、一〇〇
二號　同　同　四、四〇〇
三號　同　同　五、五〇〇

◎日の出印瀝靑（モスパーピール）
一號　一枚　巾二尺八寸　長三尺二寸　一、三五〇
二號　一枚　同　同　一、三〇〇
三號　同　同　五、五〇

◎日の出印アスファルトフエルト　巾三尺二寸　長七十二尺
一號　一巻　三、二〇〇
二號　同　同　四、二〇〇
三號　同　同　五、五〇〇

◎スレート
淺野スレート販賣株式會社

◎波形板　一枚單價
長　巾　荷造ナシ　荷造共
六尺　二尺二　三、一五　三、五五
七尺　二尺二　三、五五　三、九〇

◎大平板　一枚單價
長　巾　厚　荷造ナシ　荷造共
六尺　三尺　一分五　二、五〇　三、〇〇
同　同　二分　三、〇〇　三、五五

◎同波形附屬品　ゴム座付　丸額釘　長二吋　〇、一五
同木捻子釘　同三吋　〇、二五

◎スレート角板
大サ　白又ハ淡黒　黒　菫　赤　青
一六吋　一、一〇　一、三〇　一、三五　一、三〇
一二吋　一、一五三　一、一五〇　一、一五三　一、一五〇
八吋　〇、五三　〇、五八　〇、六三　〇、五九

◎石綿スレート
石綿スレート株式會社大阪支店
淺野スレート販賣株式會社
金剛商會
野澤幸三郎商店

	灰白色	淡黒色	灰黒色	菫色	赤色	綠色
角一枚	十六吋同	十六吋同	十六吋同	十六吋同	十六吋同	十六吋同
一枚	十二吋同	十二吋同	十二吋同	十二吋同	十二吋同	十二吋同
	〇、二一〇	〇、二一〇	〇、二一〇	〇、二一〇	〇、二一〇	〇、二一〇
	〇、一二五	〇、一二五	〇、一二五	〇、一二五	〇、一二五	〇、一二五
	〇、二二〇	〇、二二〇	〇、二二〇	〇、二二〇	〇、二二〇	〇、二二〇
	〇、一三五	〇、一三五	〇、一三五	〇、一三五	〇、一三五	〇、一三五
	〇、二五八	〇、二五八	〇、二五八	〇、二五八	〇、二五八	〇、二五八
	〇、一五三	〇、一五三	〇、一五三	〇、一五三	〇、一五三	〇、一五三
	〇、二九九	〇、二九九	〇、二九九	〇、二九九	〇、二九九	〇、二九九
	〇、一七五	〇、一七五	〇、一七五	〇、一七五	〇、一七五	〇、一七五
	〇、三三〇	〇、三三〇	〇、三三〇	〇、三三〇	〇、三三〇	〇、三三〇
	〇、一九五	〇、一九五	〇、一九五	〇、一九五	〇、一九五	〇、一九五
	〇、三六〇	〇、三六〇	〇、三六〇	〇、三六〇	〇、三六〇	〇、三六〇
	〇、二一五	〇、二一五	〇、二一五	〇、二一五	〇、二一五	〇、二一五
	〇、三九〇	〇、三九〇	〇、三九〇	〇、三九〇	〇、三九〇	〇、三九〇
	〇、二三五	〇、二三五	〇、二三五	〇、二三五	〇、二三五	〇、二三五
	〇、四二〇	〇、四二〇	〇、四二〇	〇、四二〇	〇、四二〇	〇、四二〇
	〇、二五五	〇、二五五	〇、二五五	〇、二五五	〇、二五五	〇、二五五
	〇、四五〇	〇、四五〇	〇、四五〇	〇、四五〇	〇、四五〇	〇、四五〇
	〇、二七五	〇、二七五	〇、二七五	〇、二七五	〇、二七五	〇、二七五

◎菱形葺（網目葺）十六吋角使用　重ね　灰白淡黒　黒　菫　赤　綠
二吋半　七、〇〇　七、五六　七、七三　八、一六　九、六二

◎葺上標準値段
（一坪アスファルトフエルト下葺）
（銅鉄、亞鉛鍍鐵釘使用手間賃共）

◉同　上　十二吋角使用

二吋半	八、三五	八、九〇	九、〇五	九、三七	一二、二四						

◎一文字葺（十六吋角二ッ切使用）

	合葺足五寸	五分葺足五寸
灰白、淡黒色	一〇、二〇	一二、七〇
灰黒色	一一、五八	一三、八〇
薫色	一一、八三	一三、九八
赤色	一二、五七	一四、九五
緑色	一二、五七	一四、九五

◎石綿盤葺上標準値段

（一面坪單價）

野澤寺三郎商店

網目葺（菱形）ノエルト一號品敷込材料間債共

色	合	十六吋	十二吋	八吋
寸法	角重二	角重二	重二	
	吋半二吋	吋	吋半重二吋	
灰白色	六、九〇	七、四〇	八、二〇	九、三〇	九、八〇
淡黒色	六、九〇	七、四〇	八、二〇	九、三〇	九、八〇
黒色	七、三〇	八、〇〇	九、三〇	一〇、〇〇	一〇、三〇
薫色	七、三〇	八、一一	九、三〇	一〇、三〇	一〇、七〇
赤色	八、一〇	八、八〇	一〇、〇〇	一〇、八〇	一一、二〇
緑色	九、二〇	一〇、三〇	一一、七〇	一二、七〇	一三、一〇

◎ロッコー瓦葺上標準値段

（阪神間ニテ）

平瓦各號共一尺一寸角葺足九寸

一坪約四十三枚葺、軒先及螻羽棟伏等道具瓦完備

灰白色、黒色、薫色、赤色共フェルト敷込	一面坪ニツキ	八、五〇
棟甲二段半圓形伏	一間	三、七〇
同　同　箱歴振伏	同	五、八〇
甲一段積	同	七、五〇
緑色ハ三割高		

◎亞鉛引平鐵板

月星	印30	（米一）	一、二四	円
タヒ	印30	（米一）	一、二四	品切
犬	印30	（米一）	一、二一	
三星	印30	（米一）	一、三三	
太陽	印30	（米一）	一、三三	品切
エビ	印30	（米二）	一、一九	
船	印30	（米二）	一、三〇	
月星錨	印30	（米二）	一、三〇	
山星	印20	（米二）	一、三〇	
五寸切レ		（米板）	〇、一四	
蝶	印10	（英一）	一、一四	品切
ラクダ	印30	（英一）	一、一九	
地球	印30	（英一）	一、一九	
赤丸一	印30	（英一）	一、一九	品切
桃	印30	（英二）	一、一七	
首	印30	（英二）	一、一七	品切

#28	一級品		一、一四	
#26	一級品		一、一四	
#24	一級品		一、一五	
#22	一級品	百斤ニ付	二、二〇	

◎同浪板

同　店

#30	六尺	〇、九八	
#30	七尺	一、一六	
#30	八尺	一、一九	

各參錢上り

#28	六尺	一、三三	
#28	七尺	一、五〇	
#26	八尺	一、七一	
#24	各尺	一七、〇	
#26	百尺	一六、三〇	
#28	ニ付		

◎鋼瓦板

巾一尺　長一尺二寸		
井筒政藏商店（大阪）	單價	和
名稱	一枚目付	百斤ニ付
薄增値	自拾二代	一二〇匁
	至八代	八〇匁
	建値	七、〇〇

◎ペイント

金剛商會大阪支店

内經	厚	長	價格	
二吋	四分ノ一吋	六呎	一、四〇	
二吋半	同	同	一、六〇	
三吋	同	同	二、〇〇	
三吋半	十六分ノ五吋	同	二、二〇	
四吋	八分ノ三吋	同	二、五〇	
五吋	同	同	三、五〇	
六吋	同	同	四、五〇	
	二分ノ一吋	同	七、〇〇	

◎金剛板

巾三尺　長六尺　一枚ニ付

厚サ	重量	円
二分	五貫二五	三、二〇
三分	七貫五〇	五、二〇
四分	一〇貫五〇	七、五〇
五分	一二貫七五	九、七〇
六分	一五貫〇〇	二、二〇

七代	七〇匁	三、〇〇
六代	六〇匁	四、〇〇
五代	五〇匁	八、一〇
四代	四〇匁	六、〇〇
三代	三〇匁	三、〇〇
二代	二〇匁	二、〇〇

七、〇〇	七、二〇	
七、八〇	七、〇〇	
八、六〇	八、〇〇	
九、五〇	九、〇〇	

◎塗料

日本ペイント製造株式會社

大阪營業所

ジンクペイントA印	一二瓩半	九、九〇	
白鉛ペイント	同　同	一〇、一〇	
光明丹	同　同	八、三〇	
ボイル油	同　一六瓩	一五、三〇	
コーパルワニス	同　一哦	一六、〇〇	
ゴールドサイス	同	六、〇〇	
建築用特種塗料			
調合ペイント白色上塗		六〇磅	一三、〇〇
同　上白色下塗	同	一六、〇〇	
上各色	同時々引合	一〇磅	四、二〇
光澤塗料（プライド）		一〇磅	七、一〇
水性、壁塗料（メロニア）四〇磅			一六、〇〇
亞鉛松用トタンペイント三〇瓩			一六、五〇
鬚剃塗料		一立	三、五〇

スパーワニス（耐水性）	一哦	六、五〇
金屬磨（コウミヨー）	大罐	一、三五
コンクリートペイント	三〇瓩	三、〇〇
パテ	七〇磅	四、九五

大東塗料株式會社

大阪營業所

品名	容量	定價
グラファイト	五〇ポンド入	二四、〇〇
ペイント各色		
セクロン		
乙種黒色	五〇ポンド入	七、〇〇
特製黒色	同	一八、〇〇
ネヅミ色	同	三一、〇〇
銅及赤色	同	三〇、〇〇
木管用黒色	同	五、〇〇
不二水性		
ペイント	五〇ポンド入	二、〇〇
各色共		
大阪及東京渡値段		

田中源太郎商店

性質	品名	種類
水性、壁、塗料	アラバスチン	白
	容器	單價
	五封度入	三、〇〇
同	同	各色 三、二五
同	同	四ヨリ 一、五〇迄

性質	品名	種類
艶消ペンキ	サテン艶消ペンキ	赤三角又ハ紅葉印 各色
	容器	單價
	一ガロン入	一五、〇〇
ジンクペンワンダー用		外部用
代	ホワイト	白

同	一ガロン入	一〇、八〇
	紅葉印コーパルバニシ	
同	一ガロン入	六、五〇
	ワンダーホワイト	艶消白
同	一ガロン入	一〇、八〇
同	同	二分ノ一ガロン入 五、七五
	エナメル代用	ワンダーホワイト エナメル白
同	一ガロン入	二、二〇
同	同	二分ノ一ガロン入 五、八五
	コンクリート塗料	コンクレライト 各色
同	五ガロン入	四九、八〇
	一ガロン入	一一、〇〇〇

大阪及東京渡値段

フエデラルバニシ會社製品

性質	品名	種類	電略	容器	單價
滲透性	オイル	各色	カロン	一ガロン入	一五、〇〇
本質着色料	ステイン		ス	入	
同	マガホオニー色		マン	一ガロン入	一六、〇〇
同	各色		オイン	一/二ガロ入	四、四〇
同	マホガオニー色		ホン	一/二ガロ入	四、九〇

塗替用色ニス	フユデラルバニシ	各色 一/二ガロン入 二、一〇
油ネリ目止	フエデラルウツド フイラー	各色 一封度入 八〇
中塗色ニス	オイルスインコーター	各色 一/二ガロン入 二、七〇
各種ワニス		

耐水耐熱ワニス	スパー外部用	一ガロン入 一五、四〇
	フン内部用	一ガロ入 二、三
同	家具用ペルペツトワニス	フヘン 一ガロン入 三、一〇
同	艶消	一ガロ 三、一〇

◎防水劑

□急硬防水劑

ケーテーオー日本工劑株式會社

一罐（二五封度入）	日本セメント防水劑製造所	一、五〇
ウオータイト	一〇ポンド入	五、五〇
同	七〇ポンド入	三五、〇〇〇
同	一〇ポンド入	六、〇〇〇
同	六〇ポンド入	三〇、〇〇〇

マノール	油脂化工社	一〇ポンド入 五、一〇
同		四〇ポンド入 二〇、〇〇〇
急結マノール		一〇〇ポンド入 三、六〇〇
同		五〇ポンド入 七、五〇〇
エキストラ		一ガロン入 四、一〇〇
エキストラ		四ガロン入 一六、〇〇〇
既設壁防水塗料	リアウオータイト	三封度入（十坪塗差分） 七、五〇

◎木材其他

田村商會（神戸）

平板	一坪ニ付	九、〇〇以上
蛇腹	長サ六尺物	一、〇〇以上
鈕飾	同	六〇以上
中眞飾	同	三、五〇〇以上

◎建築用壁紙

パブコボード	一尺平方	一、五〇
アイボリボード	同	二、五〇

◎メタルサイデング

平鈑	一坪ニ付	八、五〇〇
角石		

◎メタルラス（引伸金網）

船來品#26	一坪	二、八二〇
船來品#24	一坪	三、一〇〇
和製品#26	同	一、五〇〇
同 #24	同	一、八〇〇

◎米松角材（木場渡し）

大角材	一八吋角上 長	二四呎以上 一、〇〇以上
中角材	一二吋角上 長	二四呎以上 九、五〇以上
小角	四吋角	一〇呎 八五〇以上
取合	四吋四分ノ一角	一三呎 九〇〇以上
材	四吋四分ノ三角	二〇呎 九五〇以上
平材No.8	厚六吋巾一二吋上長二〇呎	一四、四〇

◎米栂角材

大角材	一〇吋角上 長	二四呎上
小角	四吋角	一〇呎 八五〇以上
取合	四吋四分ノ一角	一三呎 九〇〇以上
材	四吋四分ノ三角	二〇呎 九五〇以上

◎米杉（尺〆一本ニ付）

丸太	一等級 末口一八吋上長一三呎	一五、五〇

◎米檜（尺〆一本ニ付）

丸太ノ0クリヤ級末口二四吋上 長一三呎 二七、〇〇以上

同	末口一八吋上 長一二呎上	一五、〇〇以上
米松床板（神戸同店渡し一延呎ニ付）		
巾六吋マーチヤンタブル級		〇、四五以上
巾六吋板目無節		〇、六〇以上
巾六吋柾目無節		〇、七〇以上
上巾四吋板目無節		〇、四五以上
巾四吋柾目無節		〇、五〇以上
同 二等級	同	三、〇〇〇
同 三等級	同	七、五〇〇

◎檜、榧、赤樺、白樺、櫻、栓、

（建築家具用）

新田ベニヤ製造所

三枚合、片面、巾二尺以上ハ厚サ一分五ノ（十六分ニ）巾二尺一寸以上ハ厚サ二分（四分一）何れも一平方尺ニ付キ

寸法		定價（一枚ニ付）
巾	長	青ニツ星 青一ツ星
一尺一寸五分	六尺四寸	一、六四 一、八九
一尺二寸	六尺	一、六八 一、九二
一尺三寸五分	六尺四寸	二、〇三 二、三三
一尺五寸	六尺	二、三五 二、七〇
一尺六寸五分	六尺四寸	二、七三 三、一四
二尺	四尺	二、六八 三、〇八
二尺	五尺	二、九〇 三、三四
二尺	六尺	三、四八 四、〇〇
二尺五寸	五尺	三、八〇 四、三七
二尺五寸	六尺	四、五六 五、二四
三尺	五尺	五、九四 六、八三
三尺	六尺	三、八五 —
四尺	八尺	四、三〇 —
三尺	九尺	四、八〇 —
三尺	十尺	五、四〇 —

◎二等品（家具用）

厚一分五厘（十六分ノ三）又ハ二分三枚合 片面

巾	長	代價（一枚ニ付）
二尺	六尺	表三枚又四枚矧混合 二、六二
同	同	三、四二
同	同	四、五〇

◎天井用（一坪ニ付）（京間）

巾	長	青ニツ星	青一ツ星
一尺一五	六尺四	九、八〇	一一、三〇
一尺二五	同	一〇、一五〇	一二、七〇
一尺三五	同	一〇、九二〇	一三、五六〇
二尺一五	同	一一、九四〇	一三、七〇
二尺二五	六尺四寸	一二、三〇〇	一四、三〇〇
同	同	一二、三〇	一四、三〇〇

◎同　上（江戸間用）

寸法　定價（一坪ニ付）

巾長　青二ッ星　青一ッ星

一尺六尺　八、四〇〇　九、六〇〇

一尺二寸六尺　八、四〇〇　九、六〇〇

一尺五寸六尺　八、四〇〇　一〇、八〇〇

二尺六尺　一〇、四〇〇　一二、〇〇〇

三尺六尺　一二、六〇〇　一四、四〇〇

◎格天井用　厚巾二尺以下一分五厘　巾二尺一寸以上二分

三枚片面

檜　椹　樺　櫻しな　栓　黄檗

寸法　樹種　代價

二尺角　青二ッ星　一〇、四〇〇

同　青一ッ星　一二、〇〇〇

二尺五角　青二ッ星　一二、四〇〇

同　同　青一ッ星　一三、一一〇

三尺角　青二ッ星　青一ッ星　一三、六〇〇

三尺五寸角　青二ッ星　青一ッ星　一五、一四〇

四尺角　一七、五三〇　一八、八〇〇

◎腰羽目用　厚巾二尺以下一分五厘　巾二尺一寸以上二分

三枚合片面

楓　樺　櫻　なし　栓

巾長　青二ッ星　青一ッ星

一尺三寸五分　三尺二寸　一、〇一〇　一、二〇〇

一尺六寸五分　三尺二寸　一、三七〇　一、五八〇

二尺　三尺　一、七四〇　二、〇〇〇

二尺五寸　三尺　二、一七〇　二、五一〇

◎楓、櫟、玉杢

三枚合、〔巾二尺以下一分五厘　片面、厚〔巾二尺一寸以上二分

寸法定　價（一枚ニ付）

巾長　赤四ッ星　赤三ッ星　赤二ッ星　赤一ッ星

一尺三尺　一、八六〇　二、三五〇　三、一八〇　四、七七〇

一尺五尺　二、一七〇　二、七一〇　三、六九〇　五、五一〇

一尺六尺　二、四八〇　三、一〇〇　四、二二〇　六、三〇〇

二尺六尺　三、一〇〇　三、八七〇　五、二七〇　七、八七〇

二尺五尺　三、八七〇　四、八四〇　六、五九〇　九、八一〇

三尺六尺　四、六五〇　五、八〇〇　七、九〇〇　一一、七一〇

◎檜、椹、樺、櫻（京間用）

五枚合、片面、青一ッ星

寸法　定價（一枚ニ付）

巾長　三分厚　四分厚　三分厚

二尺六尺四寸　六、八三〇　七、六八〇　八、五三〇

二尺五寸　六尺四寸　八、九四〇　一〇、〇六〇　一二、一八〇

五尺二寸　六尺四寸　一一、三四〇　一五、三〇〇　一七、三〇〇

三尺二寸　九尺六寸　一四、二四〇　一四、九七〇　一五、六三〇

◎同　上（江戸間用）

寸法　定價（一枚ニ付）

巾長　三分厚　四分厚　三分厚

二尺六尺　六、八三〇　七、六八〇　八、五三〇

二尺五寸　六尺四寸　八、九四〇　一〇、〇六〇　一二、一八〇

五尺二寸　六尺四寸　一一、三四〇　一五、三〇〇　一七、三〇〇

三尺二寸　九尺六寸　一四、二四〇　一四、九七〇　一五、六三〇

◎檜柾目ベニヤ板（兩面物及ビ厚物ハ別）

三枚合、片面、厚

巾二尺以下一分五厘　巾二尺一寸以上二分

一尺　三尺　一、八六〇　二、三五〇　三、一八〇　四、七七〇

一尺五寸　四尺　二、四八〇　三、一〇〇　四、二二〇　六、三〇〇

二尺　四尺　三、一〇〇　三、八七〇　五、二七〇　七、八七〇

二尺五寸　四尺　三、八七〇　四、八四〇　六、五九〇　九、八一〇

三尺　四尺　四、六五〇　五、八〇〇　七、九〇〇　一一、七一〇

二尺五寸　五尺　四、八三〇　六、〇三〇　八、二三〇　一二、二一〇

三尺　五尺　五、七九〇　七、二五〇　九、八八〇　一四、六五〇

三尺五寸　五尺　六、七五〇　八、四六〇　一一、四三〇　一七、〇一〇

四尺　五尺　七、七一〇　九、六六〇　一三、〇〇〇　一九、四〇〇

◎檜柾目ベニヤ板（厚物ハ別）

三枚合、片面、厚

巾二尺以下一分五厘　巾二尺一寸以上二分

一尺　三尺　一、八六〇　二、三五〇　三、一八〇　四、七七〇

一尺五寸　四尺　二、四八〇　三、一〇〇　四、二二〇　六、三〇〇

二尺　四尺　三、一〇〇　三、八七〇　五、二七〇　七、八七〇

二尺五寸　四尺　三、八七〇　四、八四〇　六、五九〇　九、八一〇

三尺　四尺　四、六五〇　五、八〇〇　七、九〇〇　一一、七一〇

二尺五寸　五尺　四、八三〇　六、〇三〇　八、二三〇　一二、二一〇

三尺　五尺　五、七九〇　七、二五〇　九、八八〇　一四、六五〇

三尺五寸　五尺　六、七五〇　八、四六〇　一一、四三〇　一七、〇一〇

四尺　五尺　七、七一〇　九、六六〇　一三、〇〇〇　一九、四〇〇

◎新田式ベニヤ製圖板

寸法　定價（一枚ニ付）

巾長　厚　巾長　厚

二尺六尺　三分　四、六八〇　四分　五、八〇〇

二尺五寸六尺　四分　五、三〇〇　五分　六、五〇〇

三尺六尺　五分　六、九二〇　六分　八、四〇〇

◎丸　鐵

山本東作商店

長サ　徑

二分　五、八〇　十二尺

十八尺　五、三〇〇　十八尺

二十尺　五、〇〇〇　二十尺

三分　四、七〇〇　十二尺

十二尺　五、〇〇〇　十五尺

十五尺　五、三〇〇　十八尺

十六尺　五、五〇〇　二十尺

三分五厘　四、七〇〇　十二尺

十二尺　五、〇〇〇　十五尺

十五尺　五、三〇〇　十八尺

十六尺　五、五〇〇　二十尺

四分　四、七〇〇　十二尺

十二尺　五、〇〇〇　十五尺

十五尺　五、三〇〇　十八尺

十六尺　五、五〇〇　二十尺

五分　四、七〇〇　十二尺

十二尺　五、〇〇〇　十五尺

十五尺　五、三〇〇　十八尺

十六尺　五、五〇〇　二十尺

六分　四、七〇〇　十二尺

十二尺　五、〇〇〇　十五尺

十五尺　五、三〇〇　十八尺

十六尺　五、五〇〇　二十尺

二十尺以上五十尺位迄　四、八〇〇

七分　四、七〇〇　十二尺

十二尺　五、〇〇〇　十五尺

十五尺　五、三〇〇　十八尺

十六尺　五、五〇〇　二十尺

二十尺以上五十尺位迄　四、八〇〇

八分　四、七〇〇　十二尺

十二尺　五、〇〇〇　十五尺

十五尺　五、三〇〇　十八尺

十六尺　五、五〇〇　二十尺

二十尺以上五十尺位迄　四、八〇〇

九分　四、七〇〇　十二尺

十二尺　五、〇〇〇　十五尺

十五尺　五、三〇〇　十八尺

十六尺　五、五〇〇　二十尺

二十尺以上五十尺位迄　四、八〇〇

一寸　四、七〇〇　十二尺

十二尺　五、〇〇〇　十五尺

十五尺　五、三〇〇　十八尺

十六尺　五、五〇〇　二十尺

二十尺以上五十尺位迄　四、八〇〇

一寸二分　四、七〇〇　十二尺

十二尺　五、〇〇〇　十五尺

十五尺　五、三〇〇　十八尺

十六尺　五、五〇〇　二十尺

二十尺以上五十尺位迄　四、八〇〇

二十尺以上五十尺位迄　四、八〇

◎Lアングル

| 厚サ | 巾 | 高 | 目付ポンド | | |

八分	同	同	四〇〇
一一寸	同	以上十八尺位	四〇〇
一一寸二分	同	同	四〇〇
一一寸四分	同	同	四〇〇
一一寸六分	同	同	四〇〇
一一寸八分	同	同	四〇〇
二寸	同	同	四〇〇
二寸八分	同	同	四〇〇
三寸	同	同	四〇〇
三寸二分	同	同	四〇〇
三寸四分	同	同	四〇〇
三寸六分	同	同	四〇〇
三寸八分	同	同	四〇〇
四寸	同	同	四〇〇
四寸二分	同	同	四〇〇
四寸四分	同	同	四〇〇
四寸六分	同	同	四〇〇
四寸八分	同	同	四〇〇
五寸	同	同	四〇〇
五寸二分	同	同	四〇〇
五寸四分	同	同	四〇〇
五寸六分	同	同	四〇〇
五寸八分	同	同	四〇〇
六寸	同	同	四〇〇
六寸二分	同	同	四〇〇
六寸四分	同	同	四〇〇
六寸六分	同	同	四〇〇
六寸八分	同	同	四〇〇
七寸	同	同	四〇〇
七寸二分	同	同	四〇〇
七寸四分	同	同	四〇〇
七寸六分	同	同	四〇〇
七寸八分	同	同	四〇〇
八寸	同	同	四〇〇
八寸二分	同	同	四〇〇
八寸四分	同	同	四〇〇
八寸六分	同	同	四〇〇
八寸八分	同	同	四〇〇
九寸	同	同	四〇〇
九寸二分	同	同	四〇〇
九寸四分	同	同	四〇〇
九寸六分	同	同	四〇〇
九寸八分	同	同	四〇〇
一〇寸	同	同	四〇〇
一〇寸二分	同	同	四〇〇
一〇寸四分	同	同	四〇〇
一〇寸六分	同	同	四〇〇
一〇寸八分	同	同	四〇〇
一一寸	同	同	四〇〇
一一寸二分	同	同	四〇〇
一一寸四分	同	同	四〇〇
一一寸六分	同	同	四〇〇
一一寸八分	同	同	四〇〇
一二寸	同	以上十八尺位	四〇〇

◎鋼板

（三尺×六尺）

三枚物	一枚ニ付	十二尺位	四〇〇
四枚物	同	同	四〇〇
五枚物	同	同	四〇〇
六枚物	同	同	四〇〇
七枚物	同	同	四〇〇
八枚物	同	同	四〇〇
九枚物	同	同	四〇〇
十枚物	同	同	四〇〇
十一枚物	同	同	四〇〇
十二枚物	同	同	四〇〇

◎ホロタイル

住友合資會社製鋼販賣店（大阪）

一枚ニ付	一寸六分厚	同以上十八尺位	四〇〇
同	一寸四分厚	同	四〇〇
同	一寸二分厚	同	四〇〇
同	一寸厚	同	四〇〇
同	八分厚	同	四〇〇
同	七分厚	同	四〇〇
同	六分厚	同	四〇〇
同	五分厚	同	四〇〇
同	四分厚	同	四〇〇
同	三分厚	同	四〇〇
同	二寸六分厚	十五尺以上十八尺位	四〇〇
同	二寸厚	同	四〇〇
同	一寸八分厚	同	四〇〇
同	一寸六分厚	同

本誌定價表

本誌	冊數	定價	郵稅
	一冊	七拾五錢	貳錢
	十二冊	九圓	貳拾四錢

（毎月壹回一日發行）

大正十四年十月三十日印刷
大正十四年十一月一日發行

大阪市東淀川區中津町一九八番地
發行兼編輯人 江村恒一

大阪市東區內淡路町一丁目卅一番地
兼印刷人 大阪活版所

印刷所 大阪市北區堂島濱通一丁目一番地堂島ビルヂング 日本建築協會
電話北四二九一番 振替口座大阪三九、九七五

發行所 大阪市西區京町堀羽子板橋北 柳々堂書店
電話（土佐堀二四四〇番） 振替口座二〇八四番

特約販賣店

日本建築協會々報

第八輯
第十一號

日本建築協會々則

第一條 本會ノ目的ハ我國建築界ノ堅實ナル發展ヲ期スルニ在リ

第二條 本會ハ日本建築協會ト稱ス

第三條 本會ハ事務所ヲ大阪市ニ置ク地方ニ支會ヲ設クルコトヲ得

第四條 本會ハ人格、學識、經驗アル建築家ヲ以テ會員トシ會員ノ氏名住所ハ會員名簿ニ之ヲ記錄ス會員タラムト希望スル者ハ會員二名以上ノ紹介ヲ以テ入會希望書及履歷書ヲ本會ニ提出スベシ其ノ諾否ハ理事會之ヲ決議ス

第五條 本會ハ其ノ目的ヲ贊成シ事業ヲ援助スル者ヲ贊助員トス贊助員ヲ分チテ左ノ四種トス

一 名譽贊助員―地位又ハ學識アル名望家

二 終身贊助員―金參百圓以上又ハ之ニ相當スル物件ヲ本會ニ寄附スル篤志家

三 特別贊助員―建築ニ關係又ハ趣味ヲ有スル者

四 普通贊助員―建築ニ關係スル特種ノ技術家又ハ事業家

贊助員ノ氏名住所寄附金額又ハ物件ハ各贊助員名簿ニ之ヲ記錄ス

第六條 名譽贊助員ハ例會ノ決議ニ依リ本會之ヲ推薦ス

終身贊助員タラムトスル者ハ會員二名以上ノ紹介ヲ以テ申込書及寄附ノ金額又ハ物件ヲ本會ニ提出スヘシ其ノ諾否ハ理事會之ヲ決議ス

特別贊助員タラムトスル者ハ會員二名以上ノ紹介ヲ以テ申込書及履歷書ヲ本會ニ提出スヘシ其ノ諾否ハ理事會之ヲ決議ス

普通贊助員タラムト欲スル者ハ會員二名以上ノ紹介ヲ以テ申込書ヲ本會ニ提出スヘシ其ノ諾否ハ理事會之ヲ決議ス

第七條 會員ハ第十九條ニ關スル權利ヲ享有ス

會員ハ會內ニ於ケル其ノ言行ニ付會外ニ於テ責ヲ任セサルコトヲ得

名譽贊助員ハ本會ノ優遇及第十九條ニ基キ相當ノ利得ヲ受ク終身贊助員、特別贊助員及普通贊助員ハ第十九條ニ基キ會誌ノ配布其ノ他各相當ノ利得ヲ受ク

第八條 會員ニシテ脫會セムトスル者ハ其ノ旨ヲ本會ニ申込ムヘシ

前項ノ規定ハ贊助員ニ之ヲ準用ス

第九條 本會ハ會員ニシテ本則ノ規定ニ違背シ又ハ本會ノ名譽ヲ汚スノ行爲アリト認メラルヽ者ニ對シ理事會ノ決議ヲ經テ其ノ權利ヲ停止シ若ハ之ニ脫會ヲ勸告シ又ハ例會ノ決議ヲ經テ之ヲ除名スルコトヲ得

第十條 脫會其ノ他ノ事由ニ依リ會員タルノ資格ヲ失ヒタル者ハ既納會費ノ返還ヲ求メ又ハ其ノ債務ヲ免カルヽコトヲ得ス

前項ノ規定ハ贊助員ニ之ヲ準用ス

第十一條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

一	會頭	一名
二	副會頭	一名
三	理事長	一名
四	理事	十名（理事長タル理事ヲ含ム）

會頭ハ會務ヲ總監シ本會ヲ代表ス

副會頭ハ會頭ヲ補佐シ會頭事故アルトキ其ノ職務ヲ代理ス

理事長ハ會務ヲ總理シ會頭、副會頭事故アルトキ其ノ職務ヲ代理シ理事會ヲ代表ス

理事ハ會務ヲ處理シ理事長事故アルトキ理事會ノ決議ニ依リ其ノ職務ヲ代理ス

第十二條 役員ハ會員中ヨリ例會ニ於テ之ヲ選擧ス但シ會頭副會頭ハ名譽贊助員中ヨリ之ヲ選出スルコトヲ得

理事長ハ理事之ヲ互選ス

役員ノ任期ハ二年トス 但シ理事長ニ付テハ一年トス

理事ノ改選ハ每年半數トス但シ引續キ重任スルコトヲ得ス

第十三條 本會ニ左ノ職員ヲ置ク

一	主記	二名
二	主計	二名
三	編輯	五名
四	書記	若干名

主記ハ庶務ヲ、主計ハ會計ヲ、編輯ハ編纂ヲ處理ス

書記ハ理事長理事ノ命ヲ受ケ會務ニ從事ス

第十四條 主記、主計、編輯ハ理事之ヲ互選ス

書記ハ理事會之ヲ任命シ有給トス爲スコトヲ得

第十五條 本會ハ調査研究ノ必要ニ應シ例會ノ決議 依リ各部 委員會ヲ置ケ各部ニ委員長一名委員若干名ヲ置ク

委員長及委員ハ會員中ヨリ理事會之ヲ指名シ委員長ハ當該委員ノ互選トス

理事會ハ特殊事項ニ關シ會員外ノ專門家ヲ囑託委員ト爲スコトヲ得

第十六條 委員長ハ當該委員會ヲ代表シ委員長事故アルトキハ當該委員會ノ決議ニ依リ委員ノ職務ヲ代理ス

委員會ノ經過ハ例會ニ於テ之ヲ報告ス

委員會ノ調査研究報告ハ例會ノ決議ヲ經テ本會ノ名ヲ以テ發表ス但シ緊急事項ニ付テハ理事會ノ承認ヲ經テ當該委員會ノ名ヲ以テ之ヲ發表ス但シ緊急事項ニ付テハ理事會ノ承認ヲ經テ當該委員會ノ名ヲ以テ發表スルコトヲ得

第十七條 本會ハ每月一回會員ヲ召集シ例會ヲ開キ重要事項ヲ審議シ報告會、談話會、討論會又ハ講演會ヲ催ス但シ理事會ハ必要ト認ムルトキハ臨時之ヲ開催スルコトヲ得

例會ニ於ケル議案其ノ他ノ事項ハ理事會之ヲ會員ニ豫告ス但シ緊急事項ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第十八條 本會ハ春秋二季大會ヲ擧行ス

第十九條 本會ノ行フ事業左ノ如シ

一	建築ニ關スル諸般事項ノ調査研究
二	調査研究報告ノ發表
三	建築ニ關スル重要事項ノ議決
四	決議事項ノ實行促進
五	會誌ノ發刊
六	建築ニ關スル圖書ノ刊行
七	建築ニ關スル講演會ノ開催
八	建築ニ關スル展覽會ノ公開
九	建築ニ關スル視察
十	建築ニ關スル有志者ノ親睦會
十一	理想的建築ノ計畫
十二	其ノ他建築ニ關スル有益ナル事項

第二十條 會員ハ會費年額金拾八圓ヲ本會ニ醵出スト雖シ例會ニ出席シ難キ地方ニ在ル會員ノ會費ハ半額トス

一時ニ金貳百圓以上ヲ出ストキハ爾後前項ノ會費ヲ免ル會員タルノ承認ヲ得タル者ハ入會金五圓ヲ本會ニ納付スヘシ特別贊助員ハ特別贊助員年額金拾貳圓ヲ、普通贊助員ハ普通贊助員年額金六圓ヲ本會ニ前納スヘシ但シ六期以內ニ之ヲ分納スルコトヲ得

第二十一條 本會ノ經費ハ會費入會金寄附金贊助費其ノ他ノ收入ヲ以テ支辨ス

本會ノ財產ハ理事長之ヲ監理ス

第二十二條 本會ノ財產債權債務及每月ノ收支ハ主計其ノ計算書ヲ作リ翌月理事會ニ報告ス

本會ノ財產債權債務及每年ノ收支ハ理事會其ノ決算書ヲ作リ翌年一月例會ニ於テ報告ス

第二十三條 本會及本則ニ關スル詳細ノ事項ハ例會ノ決議ニ依リ細則ニ之ヲ定ム

第二十四條 本則ハ例會ノ決議ニ依リ之ヲ變更スルコトヲ得

會　告

會員、賛助員所在不明者の件

會員、賛助員の現住所並勤務先不明者はお知合の諸氏より御報知に接し漸次判明致して來ましたが尚左記會員、賛助員は不明の爲整理上差支へて居ります就ては止むを得ず例會に附議して除名致さねばならぬかと存じますから御承知のお方は何卒本協會事務所へ御通報下さる樣願ひます

大正十四年十一月

日本建築協會

會員　高堂德治

地方會員　安田繁

普通賛助員

伊藤武夫　戸山音二郎　太田四郎　若林俊一
吉本新之助　政安熊市　權藤洗二　小枝實
江藤猛夫　渡邊三郎　地福勇吉　田代正熊
矢田部喜平　野々山政金　青木立三　小林久之助
清原佐市　坂根秋光　田中儀一　桑田誠一郎
八木幸助　板垣要　平田茂樹　池永恒男
好岡享　杉本久吉　大下守造　山口辰治
肥塚房春　松原喜太郎　湊饒　林德一
宮崎加平　吉岡富藏



會員久保田繁亮氏大正十四年九月十五日疾を以て逝く。寔に惜悼に禁へず。茲に氏の小歷と照肖を掲げ謹むで吊意を表す。

氏は明治二十年五月十八日兵庫縣川邊郡小濱村寶塚二十五番地に生る。明治三十五年三月日本中學校四年級を修業退學。明治三十六年七月工手學校建築科卒業。明治三十八年九月より東京建築設計所に勤務。明治三十九年四月大藏省臨時建築部雇を命ぜられ後同技手を命ぜなれ以來函館稅關營繕事務所囑託門司稅關廳舍建築設計囑託等を命ぜらる。明治四十四年五月三橋建築事務所へ勤務。大正二年九月同大阪出張所勤務となり技師に任ぜらる。大正四年十一月同所長三橋四郎氏逝去に付工學士眞水英夫氏の援助に依り故湊嘉一氏と共に眞水三橋建築事務所を創立し諸般の建築監督をなす大正八年五月同事務所主事に撰任さる。大正八年八月見學の爲め歐米へ出張。大正九年五月歸朝。

會報

一、賛助員逝去の件

特別賛助員菅谷一郎氏は九月二十六日午前十一時逝去の訃音に接し洵に痛悼に堪へません本協會は直に弔狀を贈り哀悼の意を表しました

會合

○臨時理事會

△日　時　九月二十五日午後四時三十分——六時

△會　場　大阪市中央公會堂大洋軒別室

△出席者　片岡會頭、松本理事長、園部理事、和田理事、澁谷理事、伊藤理事、古塚理事、光安理事、松本儀理事

△議　事

一、建築職工敎化ノ爲大阪市建築業協會、本協會の三者聯合主催を以て講習會開催に關する件

協議の結果聯合開催に同意することに可決し敎化委員會に萬事を委託することゝなり委員長に委託書發送することに決定せり

一、會員銓衡

○例　會

△日　時　九月二十五日午後六時——九時

△會　場　大阪市中央公會堂中集會室

△出席者

伊藤宗太郎　伊藤　正文
岩尾　安衛　生野彌三郎
池田　宮彦　橋本　舜介
羽原　德衛　小笠原　銅
小川　久市　和田貞治郎
渡邊　家三　渡　實幸
片岡　安　加藤　善吉
横濱　勉　谷　幸三郎
高岡與三吉　高田利一郎
園部　文雄　坪井　誠一
長澤　榮作　永田三次郎
波江　悌夫　中西　六郎
中川　彌八　馬野　七登
山本　茂一　松本　禹象
松本　儀八　藤枝　艮一
吉塚　正治　古橋　剛丸
兒玉廣太郎　古宇田　實
左谷米三郎　酒井勇三郎
宮本　長治　光安梶之助
澁谷　五郎　森　篤次郎

△記　事

一、松本理事長より開會を宣し議長席に着き本月例會の遷延したる理由及本夕に審議すべき社團法人定款及細則案の作製經過に付說明をなし本案を議決して早く申請の手續を了したき希望等を述ぶ

一、然るに本夕の出席會員は四十餘名なるに付本問題たる定款及細則案の決議するには先決問題として現在細則第十七條の條項に據るべきが將又第十五條の條項に據るべきかとて細則第十五條及第十七條を朗讀して衆議に諮る

一、是に於て討議の結果重要事項なるに付第十七條に據るべき說大多數を占め結局本夕議決なしたる上通信決議に據るべしとの說と更めて例會再開を決議すべしとの說に分れ後說多數なりしを以て議長は定款案は本夕の議題となすことは見合せ延期の上臨時例會を開くことゝし協議會となす旨を述べ起草委員横濱氏の定款案の說明を求めたり

一、横濱委員說明ありて後質問の應答ありて閉會を告げたり

○敎化委員會

△日　時　十月一日午後五時——九時

△會　場　本協會會議室

△出席者　委員長　古宇田　實
委　員　波江悌夫、酒井勇三郎、澁谷五郎

△議　事　大阪市、建築業協會、本協會三者聯合にて職工敎化講習會開催に付本委員會に委託の一件右に付古宇田委員長より委託書朗讀ありて協議に入り結局本件受託するに先ち理事者に質問したき疑義多々あるを以て今一回本委員會を開き理事者の說明を求めたる後受託し進行せしめては如何の說起り衆議之れに決し散會す

○臨時例會

△日　時　十月六日午後六時——九時三十分

△會　場　大阪市中央公會堂中集會室

△出席者

池田　宮彦　井上　新二
井上　謙吉　石川　寬三
生野彌三郎　今林彦太郎
池田谷久吉　伊藤　正文
五百旗部俊次　出　隆雄
羽原　德衛　橋本　直明
服部萬次郎　德永　義治
朝永國次郎　大野　直平
岡本新次郎　岡本　茂樹
小津　利一　小笠原　銅
小川　久市　小川安一郎
大河原達海　和田貞治郎
渡　實幸　渡邊　源治

片岡　安　加藤　善吉
河盛金太郎　横濱　勉
吉井　長七　高岡與三吉
高木眞太郎　高田利一郎
竹谷德治郎　田中　光治
田原　政見　谷　幸三郎
宗　兵藏　園部　文雄
坪井　誠一　波江　悌夫
中出　丑三　中川　彌八
中村　昌三　長澤　榮作
野村　敬一　山本辰次郎
山中　茂一　矢木　英夫
增山　新平　松本　禹象
松本　儀八　牧野　利秋
牧野　忠　藤本賢太郎
古川　豐　古宇田　實
兒玉庸太郎　小島　淳吉
小寺　彌一　有田　桂太
阿部　萬助　酒井勇三郎
齋藤　立實　木村梅次郎
宮本　長治　光安梶之助
南　信　澁谷　五郎
白石登喜男　白水　進
平島　末吉　久木　堅治
毛利　泰三　森定松之祐
森本　藤吉　森　篤次郎
森田　富　森　正藏
瀨戸　文吾　菅田登美雄

△記事

一、定例松本理事長開會を宣し臨時例會開催の理由を述べ本夕出席人員の報告及社團法人定款及細則案中字句等の印刷誤謬の廉を訂正を乞ひ然る後本夕の問題たる定款及細則案は最も重要なる事項に付會頭の座長たらんことを衆議に諮り賛同を得て片岡會頭座長席に着く

一、次て座長より起草委員横濱氏に本案の說明に付て指名をなす横濱氏は法人組織委員會の經過より始め定款及細則案を現行の會則及細則と對照して詳細說明あり

一、是より質問に入り應答ありて後意見の發表となる種々の意見ありしも殊に役員選擧に關し十名連記說と五名連記說とありで採決の結果原案通十名連記說に多數決となる

一、斯くて本案は修正加ふる所なく原案通承認可次となる

一、尙左の件は理事者に一任することに決す

1、定款第三十條の變更に付て

2、主務官廳の修正に付て（此精神に據る限り）

3、第二十九條の役員の氏名

○教化委員會

△日　時　十月六日午後五時——六時

△會　場　大阪市中央公會堂大洋軒別室

△出席者　松本理事長、園部理事、光安理事、古宇田委員長、井上委員、小笠原委員、酒井委員、宮本委員、澁谷委員、波江委員

△記　事

一、夕食後古宇田委員長より本夕委員會を開會したる理由を述べて後大阪市、建築業協會、本協會聯合主催を以て職工教化に關する講習會開催の件に付理事者の意見を問ひ種々質問ありて委員會委託を承諾す

一、協議の結果波江委員小笠原委員兩氏を代表委員として先づ建築業協會側委員と會合して大體を打合すことに決定す

○定例理事會

△日　時　十月八日午後五時——八時三十分

△會　場　本協會會議室

△出席者　松本理事長、園部理事、和田理事、澁谷理事、古塚理事、光安理事

△議　事

一、社團法人設立申請に關し設立者總代決定の件

片岡安氏、宗兵藏氏、松本禹象氏三氏を設立者總代と決定す

二、社團法人定款及細則鑑定者に謝禮の件可決

三、秋季大會に關する件

秋季大會を本月下旬擧行することに決し左の件可決せり

1、臨地講演を目的とし見學旅行をなすこと

2、目的地は法隆寺、奈良とすること

3、日時は十月二十五日の日曜日

4、奈良に於て見學後宴會を開くこと

5、秋季大會委員を依囑すること

6、講演者の依囑

四、鐵筋混凝土工講習會速記錄處分に關する件

五、關東震火災視察記殘本處分の件

六、會員銓衡

○構造計算調査委員會

△日　時　十月九日午後五時——九時十分

△會　場　本協會會議室

△出席者　委員長　增田　清
委　員　池田宮彦、大野直平

谷田實、黒田茂、青柳貞世、酒井勇三郎

△記事　一、池田委員提出に係る「大阪の風力に就いて」なる事項に付同委員の説明ありて後研究をなす

一、構造其他に付意見の交換ありて散會

○新入會會員及賛助員

會員の部

山崎　節治君　神戸市荒田町一ノ八七五

松本　富藏君　神戸市門口町一五八

地方會員の部

豐田　清次君　滋賀縣蒲生郡八幡町慈恩寺町元

普通賛助員の部

中西　徹君　兵庫縣尼崎市別所村六〇九ノ一

川口清太郎君　大阪市天王寺堀越町八〇

○退會會員及賛助員

會員の部

松本宇吉郎君　池谷千太郎君

普通賛助員の部

木下鶴也君　殿島家雄君　中野安隆君

中島竹松君　今井楢治君　近藤文友君

有馬繁一君

○逝去賛助員

特別賛助員　菅谷一郎君　大正十四年九月二十六日逝去

○住所及勤務先移動

會員の部

藤村　武君　兵庫縣武庫郡本山村野寄字太田六一七

鈴木文治郎君　三重縣宇治山田市船江町

東洋紡績會社山田工場

大工庄七郎君　奈良縣生駒郡平端村大軌工務課平端出張所

佐藤　節雄君　神戸市元町一丁目鯉川筋永瀬方

矢部　芳夫君　福岡縣朝倉郡甘木後町彌壽銀行支店建築場

宇都宮邦士君　廣島市紙屋町鹽備銀行新築場大林組廣島出張所

渡邊　節君　大阪市北區宗是町大阪ビルヂング五五三號渡邊建築事務所

村野　藤吾君　同上

地方會員の部

中西　十一君　大阪市住吉區杉本町五三九ノ一

城戸　武男君　名古屋市東區新出來町三ノ一三

木田　延衛君　東京府下井荻村上荻窪四三三

普通賛助員の部

上野　逢郎君　東京府豐多摩郡中野町東中野四七一

野村　理一君　大林組本店設計部（宅）兵庫縣川邊郡伊丹町植松

田中　清志君　兵庫縣武庫郡今津町長畑一二六七

片山菊治郎君　名古屋市西區西菊井町二ノ三岡田建築材料店

（宅）名古屋市西區押切町七丁目

手賀　謹次君　京都市下京區高倉五條下ル……

（宅）京都府紀伊郡深草町福稻下横繩二三

大村　大藏君　東京府下蒲田町北蒲田六九八

廣田　好文君　兵庫縣川邊郡園田村戸ノ内東海方

木越誠二郎君　德島縣勝浦郡小松島町中町關西銀行小松支店内

安田　繁藏君　岡山市内山下水ノ邸町星ノ家旅館内

扁村庄三郎君　東京府下松並町阿佐ケ谷八八〇

酒井　健治君　大阪市東區高麗橋萬年社建築場大林組御靈出張所

勤務先前同樣住所北區澤上江町五ノ四四

矢野方

右の移轉通知がありましたが差出人の氏名が書いてありませんのでお心當りの方は協會までお知らせを願ひます

○渡米

會員下浦光衛君は米國建築界視察の爲約八ケ月間の豫定で九月二十七日横濱港を出帆渡米されました

○改名

普通賛助員　檜山　三郎君（舊一男）

○住所不明

寄贈圖書

工業ノ大日本　十號　工業ノ日本社
電氣評論　十月號　同社
都人　第十光都人社
學士會月報　四五一月號　學士會
建築世界　第十號　建築世界社
セメント界彙報（第二三號）日本ポートランドセメント同業會（第二五號）　同會
建築畫報　十月號　同會
住宅　十月號　住宅改良會
工政　七、一月號　工政會
土木建築　九、十月號　土木建築社
建築新潮　十月號　洪洋社
大阪工業倶樂部　七六七七號　大阪工業倶樂部
滿洲建築協會雜誌　九月號　同會
帝國鐵道協會報　第五號　同會
工業タイムス　九月號　同社
滿洲技術協會誌　九月號　同會
電氣學會雜誌　四四七號　同會
鐵道軌道經營資料　十月號　鐵道同志會
生活　十日號　生活改善同盟會
國際建築時論　十月號　國際建築協會
建築の普及　十月號　帝國工業教育社
工業評論　九號　同社
朝鮮と建築　第十號　同會
建築雜誌　九、十月　建築學會
通俗衛生　十月號　大阪府衛生會
趣味ノ園藝　十月號　關西園藝會
經濟資料　第十號　東亞經濟調査局
朝鮮鐵道協會雜誌　九月號　朝鮮鐵道協會
大阪記紀博覽會誌　大阪毎日新聞社
都市問題　第六號　東京市政調査會
建築物の耐震的補强法　電氣協會關西支部
名古屋工業會々報　第三〇號　名古屋工業會
大阪市商工時報　第五八號　大阪市産業部
木材彙報　第六號　大阪木材協會
建築士法成立に關する諸家の意見　日本建築士會
エンヂニヤリング　第十號　其社
土木建築工事畫報　十月號　工事畫報社
駿工　創刊號　日本大學駿工會
日本ポルトランド、セメント業技術會報告　第一六號　同上事務所

役員及職員

會頭　片岡安
副會頭　宗兵藏
理事長理事　松本禹象
主記理事　園部文雄
同理事　和田貞治郎
主計理事　吉井長七
同理事　澁谷五郎
編輯理事　伊藤正文
同理事　田中綱
同理事　古塚正治
同理事　光安梶之助
同理事　松本儀八

編輯係　江村郊邨　薦田夏治郎
庶務係　西谷節　取揚靈
會計係　大和榮衛　山口スエ

會員	三八一	會員（地方）	一七三
名譽贊助員	七	終身贊助員	五四
特別贊助員	二八	普通贊助員	五一四
合計（十月二十日現在）		一二二一	

●第八集 第一一号 掲載広告一覧（掲載順）

ミドリ商会
井上幸三商店
飾磨化学工業
大野正営業所
日本エレベーター製造
特許エレベーター製造
浅野スレート販売
小原鉄工商事
近江セールズ
田島安吉商店
伊丹商店大阪出張所
カール・ツアイス
石綿スレート大阪支店
大阪ピトロライト工事
南満鉱業
浅野物産
ベニス工房
木下商店
丸三セメント工業所
田村商会
玲光社
山本東作商店

HANKEN SEISAKUSYO
東亜鉄工所
大平工業所
油脂化工社
日本ホロタイル
政正
KENSEISHOKAI
日本建築紙工大阪出張所
メタルラス社
小籔一弥商店
原田商会
日本セメント防水剤製造所
野沢幸三郎商店
日本洋瓦大阪出張所
金剛商会
大阪陶業
大坪電気工業所
浅海商店
桐田商会
山中商会
阿部鉄工所
長田商店

日本工剤
日本ペイント会社
森川組
田中昌司商店
大福海上火災保険
三井物産
小野田セメント製造
伊奈製陶
城口研究所
出浦建築事務所
新海建築工務所
大阪建築相談所
池田建築事務所
小笠原建築事務所
岡部建築事務所
大阪建築所
和田建築事務所
葛野建築事務所
片岡建築事務所
横河工務所
横浜建築事務所
竹内建築事務所
宗建築事務所
国枝工務所

野村、橋本建築事務所
安井武雄建築事務所
柳下建築事務所
増田清建築事務所
真水工務所
真水三橋建築事務所
遠藤於菟
木子建築事務所
設楽建築工務所
西原衛生工業所大阪支店
大阪窯業
池田勘蔵
大倉土木大阪出張所
大阪橋本組
大林組
竹中工務店
長瀬組
中新
佐伯組
野村組
久保田組
熊取谷熊次郎
山本組
松村組

藤木工務店
正木工務店
岡本工務店
鴻池組
有山組
駒井喜商店
安藤組大阪出張所
辰巳吉之助
森本建築社
清水組大阪支店
銭高組
山田大理石製作所
矢橋大理石商店
大阪耐火リノリウム工業
坂本商会大阪出張所
須賀商会
栄進社
松尾鉄骨橋梁
新田ベニヤ製造所
大阪青写真調製所
山本窯業商店
常盤貿易商会
高島屋呉服店
中村グラニット商会

品川白煉瓦
萩原煖房工務所
早苗会
みどり製作所
日米板硝子
日本木材工芸
熊谷組
河村青写真調製所
デウエット商会
日米建築資料社
田中源太郎商店
建築金物商会